

谷川岳蓬沢遭難追悼集

群馬大学山岳部

群馬大学ワンダーフォーゲル部

谷川岳蓬沢遭難追悼集

群馬大学山岳部

群馬大学ワンダーフォーゲル部



S 47. 2月12日

茂倉岳 山頂にて

岩上君

寺林君



S 47. 2月12日

オキの耳より トマの方面
耳

高木君

岩上君

目 次

	頁
序.....	1
故三君略歴及び山行歴.....	2
捜 索 記 録.....	6
遺 稿.....	41
追 悼 文 集.....	49
会 計 報 告.....	83
編 集 後 記.....	84

序

1972年2月、我々にとって最も悲しい事が起ってしまった。谷川連峰の縦走をめざして出発した寺林、岩上、高木君のパーティは遂に帰らず、上越の雪の下に永眠してしまった。遭難事故発生以来、各方面の絶大な支援・協力により、またO.B.、現役の諸氏は打って一丸となり困難な搜索活動に励み、全くの献身的努力により早期に収容を了えることができた。再び還らぬ往時の友を偲ぶと共に、この遭難の実態を記録に残し、二度とこの様な事故を起さぬようにするには如何にすべきか充分検討し、その対策を立て、後輩にこの貴い経験の伝承をし蓄積するのが我々の義務であろう。

遭難が起こると、その度に深く反省し二度と悲劇を繰返さないことを誓い合う。数年の周期でこれを繰返し勝ちなのが学校の登山クラブだと云われている。その理由として遭難で得た貴重な教訓が、遭難を体験した学年の卒業と共に失われてしまうからである。個人山行とクラブ

集団としての合宿とは、それぞれその期待し得る成果は相異なるものがあり、個人のそれでは合宿では得られないよさがある。また更にクラブ員の登山技術の向上の為にも欠くことのできないものであるが、個々の技量に応じて着実に一步一步進み、安易な気持での大きな飛躍は禁物である。山行により学生生活を豊かにし、山と語り合う立派な登山家を夢見る若者にとって、遭難は悲劇である。若者の死は、友達は勿論のこと親、兄妹を悲嘆のどん底に落とす。遭難は絶対にしてはならぬ。

三人が遺した貴い教訓を生かし、再び遭難を繰返さぬようにすることこそ、亡き岳友へのはなむけである。

このたびの遭難に対し、御世話になった方々に心から御礼を申し上げます。

終わりに蓬沢の雪崩に若き命を失った3君の冥福を祈り序にかえる。

1972. 夏

忍足 舜吾

略歴及び山行歴

高木雅一君の略歴

昭和25年11月26日出生
昭和32年4月木更津市立巖根小学校入学
昭和39年木更津市立巖根中学校入学
昭和41年県立木更津高等学校入学
昭和45年群馬大学工学部機械科入学
昭和47年2月13日逝去

山行歴

昭和45年4月教育学部WV部に入部
同年4月25日～27日
新人オリエンテーション合宿
同年5月3日～5日
新人合宿 赤城山
同年5月23日～24日
公開ワンデルング 尾瀬
同年5月30日～6月1日
新人強化合宿 白毛門一茂倉岳
同年7月19日～8月4日 夏合宿
会津朝日岳一会津駒ヶ岳一田代山
同年10月10～11日
越後三山縦走
同年10月 浅間山
昭和46年1月11日～14日ス
キー合宿 土樽
同年3月24日～31日
三学部合同春山スキー合宿 尾瀬沼
同年4月 工学部WV部入部
同年5月2日～5日
新人強化合宿日光白根山一国境平一関藤
同年5月29日～30日
三国峠一谷川岳一西黒尾根
同年6月 公開ワンデルング 切込・刈込湖

同年7月20～8月5日 夏合宿
会津朝日岳一坪入山一城郭朝月岳
同年10月10日～15日
秋合宿 足尾（沢登り 三俣沢上流）
同年10月15日～17日
巻機山一白毛門
同年11月18日～22日
鬼怒沼一金精峠
同年12月
スキー合宿 石打丸山スキー場

岩上 正君の略歴

昭和26年11月7日出生
昭和33年田沼町立吉水小学校入学
昭和39年田沼町立田沼中学校入学
昭和42年県立佐野高等学校入学
昭和45年群馬大学工学部機械科入学
昭和47年2月13日逝去

山行歴

昭和45年4月教育学部WV部に入部
同年4月25日～27日
新人オリエンテーション合宿
同年5月3日～5日
新人合宿 赤城山
同年5月23日～24日
公開ワンデルング 尾瀬
同年5月30日～6月1日
新人強化合宿 白毛門一茂倉岳
同年7月19日～8月4日
夏合宿 那須岳一男鹿岳一荒海山一田代山

同年9月27日～10月2日 秋合宿

飯盛山—瑞牆山—金峰山—甲武信岳

同年11月 苗場—佐武流山

同年12月31日～1月1日

元旦登山 上州武尊山

昭和46年1月11日～14日

スキー合宿 土樽

同年3月24日～31日

三学部合同春山スキー合宿 尾瀬沼

同年4月工学部山岳部に入部

同年4月30日～5月5日

春合宿 仙ノ倉山荘付近

イイ沢—仙ノ倉—シッケイ—毛渡沢

同年6月 山荘—平標山—谷川岳—土合

同年6月20日

マチガ沢—巖新道—谷川温泉

同年7月17日～18日

マチガ沢のシンセン沢左俣

同年7月27日～8月3日 夏合宿

剣岳 ハッ峰六峰Bフェース・Cフェース・

源次郎尾根・小窓雪溪ジャングルム

同年10月12日～17日 秋合宿

谷川岳—ノ倉沢・ニルンゼー—Bルンゼ

同年12月 西黒尾根—谷川岳

同年12月23日～31日 冬合宿

鹿島槍ヶ岳の天狗尾根

昭和47年1月6日～8日

仙ノ倉北尾根

同年1月30日 赤城山の銚子のガラン

寺林 明君の略歴

昭和25年9月25日出生

昭和30年4月幼稚園入園

昭和31年国立第三小学校入学

昭和38年国立第一中学校入学

昭和41年都立国立高等学校入学

昭和45年群馬大学医学部入学

昭和47年2月13日逝去

山行歴

昭和41年国立高等学校山岳部に入部

同年4月 奥多摩 御前山

同年5月 南大菩薩

同年6月 奥高尾

同年7月 南アルプス縦走

同年9月 大菩薩—小金沢

同年10月 高水三山—ボウノウリ山

同年11月 石ヅク—ボウスギ山

奥多摩 火打石谷

昭和42年1月 奥多摩 鷹ノ巣

同年2月 奥多摩 西谷山

同年4月 奥多摩 逆沢

同年5月 丹沢主脈縦走

同年6月 雲取山

同年7月 北アルプス 上高地—穂高—黒部五

郎—剣岳

同年9月 奥多摩 イシヅクボ

奥多摩 戸倉三山

同年10月 大菩薩 コガネ沢

同年11月 奥多摩 巳ノ戸谷

同年12月 富士山

昭和43年1月 奥多摩・鷹ノ巣

同年2月 戸倉三山

同年3月 谷川岳 (雪上訓練)

同年4月 奥秩父 金峰山

同年4月 奥多摩 カワノリ

同年10月 奥多摩 海沢

昭和45年4月群大教育学部WV部に入部

同年4月25日～27日

新人オリエンテーション合宿

同年5月3日～5日
新人合宿 赤城山
同年5月15日～17日
尾瀬 大清水一燧ヶ岳一戸倉
同年5月23日～24日
公開ワンデルング 尾瀬
同年5月30日～6月1日
新人強化合宿 西黒尾根一白毛門
同年6月19～22日
夏合宿会津朝日岳偵察
同年7月11日～12日 守門岳
同年7月19日～8日 夏合宿
会津朝日岳一坪入一会津駒ヶ岳一田代山の
予定だったが寺林君はヤブで目をつつき坪
入田代から只見へ28日に下山
同年8月9日～14日 佐渡ヶ島
同年8月15日～21日
北アルプス(裏銀座等)
同年9月24日～25日
丹沢水無川本谷・シンカヤノ沢
同年9月27日～10月2日 秋合宿
飯盛山一瑞牆山一金峰山一甲武信岳
同年10月10日～11日
越後三山縦走
同年10月 群馬大学山学部に入部
同年10月 山岳部秋合宿
谷川岳南面ヒッゴア沢・鷹ノ巣A沢
同年12月 山岳部冬合宿
鹿島槍ヶ岳東尾根
昭和46年1月11日～14日
WV部スキー合宿 土樽
同年2月20日
谷川岳西黒尾根一茂倉新道
同年2月26日～3月1日
WV部春合宿 赤城と袈裟丸

同年3月24日～31日
WV部三学部合同春山スキー合宿
尾瀬沼
同年4月2日～10日
山岳部春合宿 八ヶ岳全山縦走
同年4月30日～5月5日
山岳部春合宿 仙ノ倉山荘付近
イイ沢一仙ノ倉一シッケイ一毛渡沢
同年6月20日
マチガ沢一巖新道一谷川温泉
同年7月27日～8月1日 山岳部夏合宿
剣岳 ハッ峰六峰Cフェース・東大谷
同年8月3日～5日
WV部夏合宿定着隊 丹後山
同年8月22日～28日
WV部北アルプス合宿表銀座一雲ノ平
同年9月 仙ノ倉谷 西ゼン・東ゼン
同年10月16日～17日 山岳部秋合宿一ノ倉沢
滝沢下部トラバースルート
同年10月 幽ノ沢V字右
同年11月1日～4日 八ヶ岳
同年11月22日 富士山
同年12月23日～1日 山岳部冬合宿
鹿島槍ヶ岳の天狗尾根
昭和47年1月 岩原スキー場
同年1月 WV部スキー合宿 土樽
同年1月30日 赤城山の銚子のガラン



(谷川岳付近略図)

<3人の提出した山行計画書>


(友人の下宿に残していく)

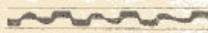
山行届

山行者名 寺林 岩上 高木

山行地域 谷川

山行年月日 47年2月10日～15日

コース 10日 桐生(10:25) 
(11:05) 新前橋

11日  土合——谷川岳
——オジカ沢の頭 C₁

12日 C₁ ——仙ノ倉 C₂

13日 C₂ 仙ノ倉——三国 下山(又は
北尾根下山)

㊟ 西黒尾根において相当時間を取ったならば
茂倉新道又は吾策新道下山

食料 5日分

装備 ツェルト ホエブス ガソリン

スコップ コップェル メタノール

ザイル(9mm 1本) ビニールシート

ローソク

第一次搜索概要

S 46.2.17~2.26.

谷川岳国境稜線縦走に向かった3名が下山予定日15日を過ぎても帰らない事より搜索活動を開始した。先づ彼らの残っていた計画書により、群大仙ノ倉山荘をB.C.にする、仙ノ倉隊及び、彼らの通ったと思われるコースを搜索する縦走隊を18日に出した。仙ノ倉隊はイイ沢河原に19~21日まで留まったが天候悪く何の手がかりも得られなかった。その他吾策新道、平標新道にも搜索隊が19日に出た。19日に入った情報により3名が茂倉岳方面に向った可能性も出て来た為、20日には茂倉新道に搜索隊が出た。

その後悪天候が続き縦走隊を吾策新道より安全に下山させる為、仙ノ倉隊は22日吾策新道にサポートに上がった。翌23日には縦走隊仙ノ倉隊共に山荘に帰る。

22日朝には、中ゴ-尾根分岐付近にザックが置いてあり、踏み跡がオジカ沢の頭まで続いていたとの情報から、中ゴ-尾根・オジカ沢方面で遭難の可能性も出たので23日には二俣にベースを移し、24日には中ゴ-尾根を搜索したが手がかり無しであった。その後全員が二俣に入ったが、25日は風雪激しく、行動できず、26日には桐生本部からの連絡により全員が下山し、その後の搜索に全てをかけることになった。

桐生本部 記録

<2月17日>

12:00頃 山岳部より忍足先生へ、寺林(AC、WV)岩上(AC)高木(WV)が下山予定日15日を過ぎても帰らず、食料は今日(17日)までであるが、心配なので、今後の対策を問いあわせる。

12:50 忍足先生より学事へ、上記のことを通報。

14:00 医学部の村沢(AC)下宿にて緊急会議が催される。

出席者 桜井(AC.OB)村沢(AC)前田(AC)鈴木(AC)井上(AC)田崎(A.C)鹿田(AC)稲葉(AC)相川(AC)壬生(WV)児玉(WV)

内容

1. 西黒尾根方面の探索
教育OBと杉田(WV)とが行う
2. 万太郎・仙ノ倉方面の探索
桜井(AC.OB)が中心に行く
3. 縦走隊
西口(AC.OB)西野(AC.OB)が中心に行く
4. WV部は連絡、ボッカに当たってもらいたい

20:00 WV部に緊急集合がかかる

出席者

小島(WV.OB)長谷、鎌田、太田、山口(昌)、広田、海老沼、武井、川崎、高橋、熊田、山口(明)、大島(以上WV)相川、稲葉、山田、漆瀬(以上AC)

決定事項

1. WVの持場

- ・土合（駅、指導センター）大島、山口（明）、熊田
- ・仙ノ倉山荘（伝令、ボッカ、行動）川崎武井、海老沼、山口（昌）、高橋
- ・土樽駅（ピラ〔3人が下山したらすぐ連絡するように〕を駅にはる）
- ・剣持宅、漆瀬
- ・元橋（ドライブイン）鎌田、太田

2. 連絡本部を桐生工学部忍足研とする。

連絡網の作成

本部、桐生、忍足先生 広田、海老原、斎藤、渡辺、尾高、品田、広瀬（以上WV）

TEL（昼、工学部）0277--22-3181

内線731（夜、自宅）0277 | 44-4094

（広田〔淵野研〕0277-22-3181内線310）

前橋、群大医学部事務

TEL 0272-31-7221

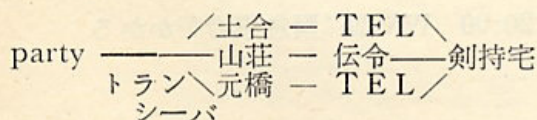
現地連絡本部

剣持宅（漆瀬）TEL 02578-7-3010

連絡先

土合指導センター（大島、山口（明）、熊田）

元橋ドライブイン（太田、鎌田）



TEL TEL
 ———— 本部 ———— 前橋

定時連絡 10時・15時・19時

< 2月19日 >

1:12 杉田（WV）教育山岳部OB、佐原、中島、片貝の4名、天神尾根より肩の小屋搜索の予定で出発、壬生（WV）鈴木、井上（以上AC）ら3名山荘より北尾根に向けて出発の予定。

10:00 工学部AC、及びWV部員、部室へ集合連絡網を示したコピー配布、入山の共同装備を整える。各連絡先へ部費より資金を配布。

11:34 仙ノ倉山荘へ入るAC、WV部員出発、前橋（医学部）にて食料買い出し、明日（18日）1:12新前橋発の夜行列車で土樽へ向け出発予定。

12:30 元橋連絡隊出発（5:30元橋着）

19:45（Tel from 杉田）2/18に肩ノ小屋にはいった佐原、片貝、中島（以上AC、OB）及杉田（WA）の連絡によると、肩ノ小屋の上段左に「桐生中央生協」と印刷された包紙が落ちており、3人が食料を調達した店名を調べるよう要請有り。

19:45（Tel from 医AC）WV、OBへ搜索隊を編成してくれるように要請有り。その際、ルートとして茂倉新道か吾策新道のどちらかをあたるようにとの要望。

20:00 桐生工学部 忍足研究室に遭難対策本部を置き、忍足先生を本部長として、対策会議を開く。（出席者：忍足先生、藤村、鳥居、鳩原、小沢（以上WV、OB）、広田海老原、尾高、品田（以上WV）

小島（WV、OB）大浦先生

対策会議において決定した事項は以下

1. 捜索隊の行動予定及人員の確認

A. 縦走隊 西口、西野（以上 AC、O
B）村沢、稲葉（AC）4名

2/19 新前橋1:12発～土合～肩ノ小屋
～万太郎山～仙ノ倉山～北尾根～群大
山荘。

食料5日分携帯。3名の提出した計画
のルートをとどり稜線を捜索する。

B. 仙ノ倉隊 桜井、近藤（以上AC、
OB）鈴木、相川、前田、山田（以上
AC）武井、川崎、壬生（以上WV）10
名

2/19 新前橋発1:12～土樽～群大山荘
～B.C、イイ沢にB.Cを張り仙ノ倉山
万太郎山、平標山方面の捜索をする。

C. 山荘隊（長谷、海老沼、山口（昌）
高橋（以上WV）横田（AC）大浦先
生6名）

2/19 新前橋発1:12～土樽～群大山荘
4～6台のトランシーバーを持参し仙
ノ倉隊、縦走隊と連絡を取り状況を土
樽現地本部剣持宅に伝令により報告。

D. 土樽現地本部剣持宅（漆瀬、
AC1名）
山荘より伝わる状況を桐生現地本部に
Tel連絡。

2. 医ACから要請のあったWV、OBに
よる捜索隊編成に関して、WV、OB隊
は吾策新道を捜索することに決定。

吾策新道隊（鳥居、齋藤譲、草場、小
沢、鳩原（以上WV、OB）5名）

2/19 新前橋発2/20までの予定で吾策新道
の1499mp、までの捜索にあたる。

また土樽駅にて登山者カード及茂倉岳
万太郎方面の登下山者がいたら情報の
提出を乞う。

22:00 (Tel. from 医AC) WV、OB隊が吾策
新道のルートと取るとの事であるが、AC
としては平標方面へのルール変更を要請。
日数から考えて平標方面の可能性が大きい
ため元橋から平標へは行ってほしい。また
医者1名山荘にあげたいので、その冬山
装備一式を本部で都合してほしいと要請。
WV、OB小島が装備を取りそろえ2/19に
持って行くことに決定。

<2月19日>

9:40 (Tel. from 小島) WV、OB隊は、隊
を2つに分け、吾策新道及び平標山の2隊
が出発した。

1. 吾策新道（鳥居、鳩原、小沢、齋藤
4名）

2/19 8:30新前橋発。2/19～2/20の2日
にわたって吾策新道の1499mp、までを
捜索する。

2. 元橋～平標山（草場、深沢2名）

2/19 4:00 車にて桐生を出発。2/19 中
に平標山を経て平標小屋にはいる。
2/19～2/20の2日にわたって付近一帯を
捜索する。

10:10 (Tel to 丑沢) 忍足先生が 山岳部東京
OB 会の丑沢氏を通じ山岳部OB に救援を
要請する。

10:15 定時連絡

現地本部より桐生本部へ

1. 縦走隊が5:00土合発。本隊（西口、西

野、村沢、稲葉4名)、サポート隊(中林、相川、山田、武井4名)サポート隊は肩ノ小屋まで荷上げに同行し、当日下山し仙ノ倉山荘に向かう。

2. 仙ノ倉山荘より、仙ノ倉隊はイイ沢河原にB.C張り搜索活動にあたる。(桜井近藤、清水、長谷、鈴木、井上、前田、川崎8名)、同サポート隊(海老沼、山口(昌)、壬生3名)
3. 大浦先生、高橋、横田、伊藤の4名は現地本部との伝令にあたるため山荘に待機する。
4. 元橋より、草場、深沢2名が平標山に向かったと連絡有り。
5. 山荘より食料その他の荷上げ要請。

11:00 (Tel. from 土合指導センター) 水上派出所及び土合山の家にも照会した結果2/11、2/12に谷川岳に登山した者の一部の氏名が判明した。尚登山カードは全く無し。

- | | |
|-------------------|--------------------------|
| 2/11登山
水上派出所連絡 | 1. 栃木県・佐藤氏 |
| | 2. 東京昭島市・氏名不明 |
| | 3. 群馬町・星氏 |
| | 4. 東京中野区・徳武氏 |
| 土合山の家連絡 | 5. 東京都豊島区
・山田修一氏、吉川剛氏 |

12:00 土合指導センターからの連絡の上記5名に桐生本部より電話連絡し山行状況の問合せをする。以下その連絡内容

1. 佐藤氏(12:00 不在のため20:25の連絡)単独行。2/10夜行で発ち、2/11早朝土合より西黒尾根を登る。12:00頃 ザンゲ岩付近で、キスリングを下にしているかなりの疲労状態であると思われる者が

眠り込んでいる様子なのを見た。その者は途中自分の前を歩いていた3人パーティーのうちの1人で、登行中2~3mスリップして後を歩いていた1人に受けとめられたような状況を見ている。ザンゲ岩の所でこの3人パーティーを抜き 13:40肩ノ小屋に着いた。当日は小屋に泊ろうと思ったが小屋内は10人以上の者ですでにいっぱいだったので小屋の外の鐘の所に持参した青いテントを張って寝た。

12日朝外に張ったテントを徹収して、小屋の中の二段になっているたなの下段にテントを移し張りなおした。以後テント内にいたので12日に小屋から出て行ったパーティーに関しては全くわからない。

12日は肩ノ小屋に泊り、13日西黒尾根を土合に下山した。13日は視界5~10mで吹雪、かなり悪天候だった。

2. 桑田氏(東京昭島市 群大AC.OB)

12:05 不在、14:30の連絡内容、以下。
8人P.で西黒尾根~茂倉岳を計画ルートとする。2/10夜行で出発。11日西黒尾根を登り肩ノ小屋泊。その際群大3人パーティーと思われる者と同泊している。その特徴として赤キルティング、黒の目出帽黄ツェルト、ホエーブス725小型、目のギョロッした者など。ザックは3人ともアタックだったという者と3人のうち1人はキスリングだった言う者と別れている。2/12桑田氏はこのパーティーが万太郎方面へ出て行ったのを見ている。桑田氏らは2/12肩ノ小屋よりノゾキまでをビストンした。その際、この3人にノゾキの所で抜かれたことを覚えており、自分達より先に小屋を出たのにあとから

抜かれたのでおかしいと考えた。桑田氏らのがノゾキで休んでいる間に、この3人に前後して4人パーティーにも抜かれており、さらに単独行の人に抜かれたと言っている。尚、3人に抜かれた時、桑田氏らのうち1名が、3人のうちの1名の顔を覚えており、抜かれた時にその1名が3人は群大のパーティーであったと確認している。桑田氏は2/19、21:00頃桐生に情報提供に来て下さるとの事。群大3人の写真を準備する。

3. 星氏 12:10Tel、12日11時頃は肩ノ小屋内外に10数名の者がいた。そのうち小屋内において寺林らしき者を見かけた。特徴として、身長170数cm、細からず太からず、のっそりとした感じの者。この者がどっちの方向へ行ったかは不明。吹雪の中を万太郎あるいは天神方面へ向った者がいた。尚12日11:00過ぎ星氏は西黒尾根を土合に下山。途中3人らしき者は見かけなかった。

13:40 (Tel from 桑田氏)

2/11に肩の小屋に泊った。当日は、かなりの人が小屋に宿泊した。2/11に男3人のパーティーを確認している。他に男女1人ずつのパーティーがあり、このパーティーは万太郎方面へ行くとの事であったので、この人を捜し出せば万太郎方面の状況はわかるであろう。尚2/12朝はガスが濃く、なかなか出発できなかった。

15:40 定時連絡

現地本部より桐生本部へ

1. WV、OB隊昼過ぎ土樽山の家着。
2. 14:00 縦走サポート隊下山。14:30 山荘に向かう。

3. 縦走隊は肩の小屋まではいった。山頂付近吹雪のため、2/19の行動は見あわせている。尚、2~3日待っても天候が回復しないような場合は下山する。

4. 元橋隊より異状なしの連絡。

16:25 忍足先生、高木父、岩上父により2/20ヘリコプターを飛ばすことに決定する。

2/20土合駅9:30発。警備隊の方1名、他1名の同乗を要請する。

18:00 (Tel. to 現地本部)

桐生本部から連絡

1. WV、OB隊に、土樽駅において登山者カードを確認し、これから登る人、あるいはおりてきた人がいたら情報の提供を求めることを要請。

現地本部からの連絡

1. 土樽にはカードがなく調べられない。
2. WV、OB隊は、2/19吾策新道の1499mP.まで搜索した。2/20にそれより上部を搜索する予定である。搜索の手がかりは無かった。

19:20 2/20 6:00 忍足先生及び永田学事係長が車にて土合に向かう予定。尚父兄の方は電車で土合に向かう予定。

20:50 東京よりAC、OB桑田氏ら3名(2/11谷川登山)が桐生に到着。忍足氏、父兄らと2/12の肩ノ小屋での状況などを話し合う。

以下、その時の内容。

桑田氏ら8名の行動。

2/10 夜行、西黒〜茂倉の予定で出発。

2/11 悪天。12:00 少し過ぎ肩ノ小屋到着。群大3人らしき者はあとから到着(13:00~14:00)。食事を取り始める。(紅茶・ラーメン)。コップェル(折り

たたみ式のもの)が少なかったため、時間がかかっていたようある。疲労のためかどうかはわからないが、おとなしかった。3人は黄ツェルトをかぶって早めに寝た。2/11夜吹雪。

2/12 午前中視界悪い。空が明るくなった頃(視界悪い)3人が出発した。

(10:00~11:00)「この天気の中をよく出るな」と桑田氏は感じた。約1時間後晴れる。桑田氏ら一行8人は空身で一ノ倉を見に出発。ノゾキまで行く。所要約1時間弱。雪はひざ程度まで所により腰までもぐり、ラッセルはややたいへんである。ノゾキで休んでいた時(13:30頃)うしろから3人パーティーが来る。この3人に関して、3人のうちの1人を桑田氏らのパーティーの高橋氏に照会したところ、写真により寺林であると確認している。

3人に抜かれた時、桑田氏と高橋氏は「3人は自分達よりも先に出発したのにここで抜かれるのはおかしい」というような会話をした。

この3人パーティーより約20分位遅れて、単独行者が桑田氏ら8人とやはりノゾキの付近で出会っている。

これらに前後して、万太郎方面の尾根のオジカ沢の頭手前にも3人パーティーが歩いているのを見た。この3人を肩の小屋を出発した最初の3人だとするとオジカ沢の頭付近まで行くのに時間がかかりすぎていると思った。

21:00 (Tel. from 忍足) 忍足、中島氏、父兄の方相談の結果、肩ノ小屋~茂倉岳のコースを民間人捜索隊に依頼することを決定。

人数は3~4人で2/20出発の予定。

23:35 (Tel. to 藤村 WV. OB) 2/20朝吾策新道に再び出かける予定のWV. OB隊に、茂倉新道の捜索も検討してくれるよう要請。

<2月20日>

6:00 (Tel. from WV. OB隊) WV. OB

鳥居、鳩原、藤村、横尾、小沢、宇多川以上6名は、2/20茂倉新道を通り矢場ノ頭付近まで行くことを決定。

土樽付近は現在吹雪。WV荷上げ隊は、土樽駅にて待機中であり、天候が良くなったら出発する予定である。AC. OB渡辺、栗原、剣持宅より山荘に向かう予定。

7:40 (Tel. from 指導センター) 土合付近、現在吹雪。

8:50 (Tel. from 草場) 元橋より

元橋より平標山に登ったWV. OB草場、深沢からの報告。

3/19 元橋7:30~16:00 平標、小屋着。

小屋は少なくとも1週間位は、人がはいった形跡はない。小屋付近は足跡はなし。入口は雪でふさがっていた。仙ノ倉隊へ書き置きをしてきた。2/20平標小屋7:00~8:30元橋。

10:30. (Tel from 草場) 後閑より

草場、深沢の報告追加。

小屋には、3人に与えるための食料を置いてきた。2/19天候良。但15:00頃山頂付近で少し雪。雪の状態は、何もつけない場合ひざまで、所によりももまでもぐる。大部分は、シールをつけスキーで登ったため詳細不明。

2/19 19:00頃から20:00頃より小屋付近吹雪。

2/20 朝から吹雪。視界5~6m。最良の場合でも30m位の悪天。元橋も吹雪。

10:30 定時連絡

現地本部より桐生本部へ

1. 山荘より連絡有り。2/20清水、桜井、鈴木の3名と近藤、井上のうち1名、合計4名がB.Cより万太郎捜索の予定。また、2/20宮崎、相川、武井、山口、山田、壬生の6名B.C荷上げ。宮崎、相川武井の3名B.Cに残る。トランシーバー電池が切れ交信ができず。
2. 元橋の4名現地をひきはらう。
3. AC.OB3名風間、萩原、半田、山荘にはいる。(剣持宅を9:05に出発)
4. WV荷上げ隊山荘に向かって出発。
5. 渡辺、栗原、岩井の3名、4:00 剣持宅に寄りTRS 1台を置いて山荘に向う。
6. 吹雪のため2/20 はへりは飛ばないことになった。

11:40 (Tel. to 指導センター) 桑田氏の情報により、2/12 茂倉岳方面に向った単独行者がいるので、その氏名の割出しを要請。

11:45 各隊に、食料、資金の現況はどうか問合せをする。

12:00 (Tel. from 指導センター) 土合山の家の中島氏からの連絡で、2/12 肩の小屋から茂倉岳方面へ向った単独行者が判明する。以下その情報。熊谷智之氏(単独行、千葉県八千代市)

2/11 3:00 土合発、西黒尾根を登り12:30 肩ノ小屋着。3人パーティーは自分のあとに小屋に着いた。天候吹雪。

2/12 朝吹雪。肩ノ小屋に泊ったと思われる者は、8人パーティー1組3人青ツェルト1組、3人上段左奥に泊った1組男女2人1組、それに単独行(本人)1組であった。推定によると、上段左奥

に泊った3人が群大パーティーであると思われる。

2/12 11:30 頃好天になった。13:00 熊谷氏肩ノ小屋発。小屋より一ノ倉まで足跡は多数有り、一ノ倉より先は2~8名の足跡となった。足跡は蓬峠避難小屋まで続きさらに蓬ヒュッテまで続いたようであった。蓬峠避難小屋 18:00着。その時は星空。小屋は熊谷氏1人が泊った。寝る頃になると吹雪になった。

2/13 吹雪のため小屋に停滞。

2/14 小屋を出、ヒュッテに行った。人はいなかった。そのあと土樽に下山した。

15:25 定時連絡

現地本部より桐生本部へ

1. WV.OB 隊が土樽より下山。
2. AC.OB 3名風間、萩原、半田、山荘より下山。
3. 12時頃縦走隊からのコールサインが現地本部トランシーバーで受信された。

17:00 (Tel to 指導センター) 指導Cの3名は2/22 までいるように要請、食料は現地で調達すること。

19:00 (Tel to 現地本部) 2/21 茂倉岳に登る桑田氏らのパーティーに縦走隊と仙の倉隊とのトランシーバー交信をとってもらい、できたら吾策新道を降りてみるように連絡してもらおう。

茂倉岳サポート隊として岩井、上波、栗原

19:45 定時連絡

現地本部より桐生本部へ

1. 桑田隊 2/21 茂倉登山の予定。サポートとして岩井、上波、深沢
2. 2/21 山荘より仙の倉隊に吾策新道を

搜索するように連絡。

<2月21日>

8:45 (Tel to 現地本部) 吹雪 6:20 茂倉新道へ5名出かける。縦走隊とTel交信ができ従走隊は大障子避難小屋にいるとのこと。天候次第で万太郎尾根を越えて毛渡沢より山荘へ下山するとのこと。食料残り5日分。燃料3ℓとのこと。10:15 もう一度交信する。

仙の倉隊は吾策新道は無理なので山荘に降りる予定。

9:15 (Tel From) (深沢氏) 蓬峠へ向う予定だった深沢(WV.OB) 斎藤(WV) 現地が吹雪のため中止した。

11:25 (Tel to 土合山の家) 現地は吹雪のためへり及び茂倉岳方面への民間搜索隊は出ない様である。

10:30 (Tel to 桑田氏)

『2月12日 朝、一ノ倉谷を登って来たという2人パーティと小屋の所で話をした。

2月12日 桑田氏が、一ノ倉方面へ向った時、トレースは無かった』

13:15 (Tel From 現地本部)

1. 仙の倉隊B.C 2月22日中に徹収する予定。
2. 従走隊は吹雪がひどく2/21は大障子小屋に泊る。天候良くなり次第万太郎尾根を下山する予定のこと。

15:00 (Tel From 熊谷氏)

『2月12日小屋(肩の小屋)の外に張ってあった冬テンのメンバーは、男3人、女1人で、上野より男女1人ずつ高崎より、男1人、さらに土合付近で1人加わった、合計4人のパーティである』当日、自分が撮った写真には、この冬テンが写っており、

冬テンにLM-2と書かれている。LMの前にも、字が有ったようだが覚えていない。この4人とは、2月12日、一の倉山頂で出合っており、社会人山岳会の様でザイルを持って何か、練習しているようであった。』2月12日12:00頃肩の小屋より写真を数枚撮っているの、桐生にそれを郵送してくれるとのこと。

15:30 (TEL From 星氏) 星氏からの情報

『星氏らは男4人のパーティーで2月11日は、西黒尾根を登り、鉄塔より2時間位の所に冬テンを張って泊った。2月12日、4人はザイル1つを持って、肩の小屋に向った。肩の小屋着、11:00そこで20~30分休んだ。本峰へは行かなかった。小屋の鐘の所に冬テンが有った。東尾根の方から登って来るパーティーが有った』

16:10 (定時連絡) 現地本部より桐生本部へ

- ① 14:50 現在、仙ノ倉ベースキャンプ隊は全員北尾根を下っている途中である。桐生本部より現地本部へ
- ① 2月22日 6:00より、現地本部にて忍足先生出席のもとで、状況報告、説明を行なう。
- ② 2月22日 茂倉岳搜索予定。従走隊のサポートに全力を集中
- ③ 2月22日AC.OB荒井、大川、木村、関、下田の5名、3:00土樽着の予定。従走隊のサポートに当る予定。

16:50 (Tel From 指導センター) 2月11日、男3人、女1人の新宿勤労者山岳会のPが谷川岳に入山している。

20:00 (Tel From 新居純子) 『2月11日朝、西黒尾根登山。11:00頃ラクダの背の手前でテントを張り宿泊。テントは青で三角

型、外フレームのもの。パーティーは男3人、女1人。2月12日8:00過ぎ、空身でテントを出る 11:30 肩の小屋着。

トマの耳だけ登って 13:20 頃肩の小屋を出て、16:00 前、テントに戻る途中で何人にも出会う。自分達は、一ノ倉方面及び万太郎方面には行かなかった。』

20:00 定時連絡

○ 桐生本部から現地本部へ

1. 前記新居さんの話について
2. 剣持宅へ明日(22日)本部を移動する。今夜の夜行(新前橋1:12)で向かう。メンバー…忍足、小島、藤村、島居、深沢、上山、広田、海老原。
3. 桐生本部で連絡にあたるメンバー…渡辺、尾高、広瀬。

現地本部から桐生本部へ

1. 仙ノ倉隊は全員下山し、山荘へ向かう。
(トランシーバーでかすかに確認)
2. 縦走隊は明日(22日)下山の予定である。救援隊は山荘から1348mまで登る予定である。
3. 17時に4人が山荘に向かう(内、3人—上波、岩井、栗原—はラッセル要員、他一名は連絡)
4. 茂倉新道方面はサポートの到着を待って行なう。
5. 剣持宅へは桑田、鈴木、漆瀬が残る。

<2月22日>

10:00 定時連絡

○ 桐生本部から土合指導センターへ

1. 桐生本部のメンバーが土樽へ移ったため、電話連絡の順序を変更、土合—

剣持宅—土合(必要があれば)—前橋にする。

土合指導センターから桐生本部へ

1. 天候回復
2. 三人がオジ沢の頭方面へ向かったのを見たとの情報があり(詳細不明)地元の人が二俣からつきあげる予定。

○ 桐生本部から現地本部へ

同上 及び土合指導センターから情報
現地本部から桐生本部へ

1. 縦走隊との交信通じず。大障子小屋にいるらしい、一応吾策新道を下りるよう指示する。但し、毛渡沢は危険であるので下りないよう指示する。なお縦走隊の食料はあと2日である。
2. 茂倉新道へ明日(23日)桑田、前田他1名向かう予定であり、その準備として、本日6名、ラッセルに茂倉新道へ向かう。
3. 6:00 からの現地協議の結果は
 - i) 当面縦走隊を安全に下すことに全力を注ぐ。
 - ii) 救援隊は万太郎尾根を登り、今日、登った所でベースを張って縦走隊をむかえる。
4. 天候 雪

15:00 定時連絡

○ 土合指導センターより、桐生本部へ

2. 「オジカ沢の頭付近で1人すべり、二人助けに行ったらしい」との情報があり(詳細不明)地元の人8人位、二俣へ向かった。しかし雪の状態で二俣まで入れるかどうかわからない。

○ 桐生本部より現地本部へ

1. 土合からの情報およびその確認。

○ 現地本部より桐生本部へ

1. 朝8:20に入った情報

男女パーティー（秋草、野沢）が思い出してまとめて連絡してくれたもの。

下記

『11日群大のパーティーらしき三人、が肩の小屋へ14:00に着いたようである。疲れた様子はなかった。西黒尾根を登っていた時の順は、前から青アタックキスリング、青アタックであった。』

12日、10:30に群大パーティーらしき三人が吹雪をつけて出発したのを見た。二人（秋草、野沢）は、13時に万太郎へ向かった。その時は天気は晴れていた。13:20に中ゴ-尾根分岐へ着いたが、そこで、指導標の所に、昨日（11日）見た青リュックと思われるものが2個あった。他にもう一つなにかがあったが、キスリングはなかった。オジカ沢の登りにかかった時、下降したあとがあったのを確認。頭の200m手前で、トレースは、もどるように輪を描いて、消えていた。頭から見た時、中ゴ-尾根を下りたようなトレースが見えた気がする。以上のことから考えて一人に事故があり二人が救出に向ったのではないかと思われる』

2. 1. の情報により、当面縦走隊の救出に全力をあげる一方、茂倉方面は中止し、中ゴ-尾根、二俣の方へ明日 O. B 隊を出す予定である。

3. 忍足先生は14:59の電車で土合へ向かった。桐生へ帰るかどうかは不明。

4. 今日入山したO. B（メンバー不明）は西口隊（縦走隊）の救出へ向かう。

5. 縦走隊と救出隊の間ではトランシーバーで連絡がついている。剣持宅とは、不通であるが、両隊の通信は傍受できる。両隊の今日の行動は、

i) 西口隊（縦走隊）は万太郎を下り、最初の岩峰を越えた付近に風をさけてテントを張る。

ii) 救出隊は1499m.p. を越えた所へベースを張った。

6. 桜井氏は二俣へ向かうメンバーを決めるため、山荘へ向かった。

7. 現在、山荘の食料は、あさって（24日）の朝までしかないため西口隊がおくれる場合を考えて、今晚の前橋からの荷上げは、二俣へまわすかどうか検討する。その結果は19:00の定時連絡でわかると思うが、明朝荷上げ隊は土樽駅到着後、6:00まで待ち、電話により指示を受ける。

8. 土合のメンバーは情報がなければ下山してよい。

○ 桐生本部より再び土合指導センターへ

1. 現地本部からの情報（1~8）を連絡

○ 桐生本部から前橋へ

1. 現地本部からの情報（1~7）の連絡

16:50 熊谷氏から、谷川における写真5枚が届く（速達）

17:30 (Tel. From 小島) 小島氏、桐生着、現地の行動は、二俣へベースを置き搜索（土曜まで）他は撤収する。縦走隊は下っているらしい。

19:20 定時連絡

土合指導センターから桐生本部へ

1. 土合のセンターの人が、今日、二俣まで入った。谷川温泉から二俣までは

雪は予想程多くはなかったが、腰まであり、3時間かかった。

2. センターの人の話では、オジカ沢の頭とヒッゴ一沢の頭は(雪が降ったので)雪がかたまらないとトラバースが危険であるので、荷物の搜索は困難ではないか。

○ 桐生本部から、現地本部へ

1. 土合からの情報(1~2)の連絡

<2月23日>

10:05 定時連絡

○ 桐生本部から土合指導センターへ

熊田、大島、山口3名は、すでに下山桐生へ向かう。

現地本部から、桐生本部へ

1. 縦走隊と救援隊とトランシーバー交信。

5:55 両隊は直接合流できないで、救援隊からコースを指示し、縦走隊は、一度上へもどって尾根を下るようになる。

8:00 両隊の間300m位に近づくと、黄色のツェルトらしきものを発見、そこまであと1時間位である。

8:30 両隊合流する。ツェルトは誤認であった。

10:00 両隊1499mP.の救援隊テント着、昼食をとる。山荘着 13:00~14:00の予定

2. 鈴木氏、9:00に剣持宅を出、下山
2. 桜井氏一行8名、土樽 8:39の電車で土合へ向かう
4. 石田(WV.1年) 柴崎(WV.1年)
3:00 土樽駅着、食料を山荘へ上げる
二俣へまわすか6時まで指示を求め

る。上記 5:55の交信の結果山荘の食料は間に合うので二俣へまわすことにし、指示する。

11:30頃(忍足先生着)

今朝、9:00頃風がやみ、ロープウェイが動き出したので、それに乗って民間及びOB、15人位が肩の小屋から中ゴ一尾根の分岐の荷物の確認に出発したとの事。

13:10(Tel. to 土合指導センター) OB7名

(名前不明)と地元の人6名が9:30分にロープウェイで出発、天神尾根から肩の小屋、分岐のザックを確認する予定である。

13:30(Tel. to 現地本部)~(忍足先生)

山荘、および剣持宅(現地本部)は、撤収し、O.B.の内、活動できる人は二俣方面へ加わるよう要請。(そのパーティーは疲労していない者を当てる)その編成は、現地OBに任せる。縦走隊、救援隊、サポート隊は今夜山荘へ泊る予定。

15:00 定時連絡

現地本部から桐生本部へ

1. 現地本部は明日(24日)ひきはらう予定。
2. 桜井氏は二俣へ向かった事を確認

17:00(Tel. to 土合山の家、中島宅)

中ゴ一尾根分岐搜索の結果

O.B. 7名全員(丑沢、松崎、下田、荒居、関、木村、大川)および水上山岳会5名で天神から登った。1:30肩の小屋着。中ゴ一分岐の道標付近には荷物の痕跡なし、掘ってみたがなかった。その付近は吹きさらしで道標も出ており、荷物のうまるような所ではない。風で飛ばされたとも考えられない。

OB. 7名は今日東京へ帰る。

19:00 定時連絡

- 桐生本部から現地本部へ
 - 1. 新居さんからの上記の情報及び県警への問い合わせの結果。
 - 2. 中ゴ一分岐の荷物搜索の結果。
- 現地本部から桐生本部へ
 - 1. 西口隊無事おける。
 - 2. 西口、清水、西野氏帰る。
 - 3. 二俣はどうするか（昼間の連絡では余力のある者は二俣へ入れとのことであったが、中ゴ尾根搜索の結果可能性が少なくなったのだから、茂倉の方へまわさないのか）

<2月24日>

9:35 (Tel. From 忍足)

- 1. 家族の方、13時頃桐生に着く予定である。
- 2. 六日町の駅の電話にて、東電清水小屋へ連絡するにはどうすればよいかたずね、連絡をとり、12日前後のことについてたずねる。
- 3. 7人が二俣へ向かったが、茂倉はメンバーがいらないから見合わせる。それについて家族が桐生へついてから相談する。

4:40 (Tel. to 六日町駅) 清水小屋について、電2-2119へ問合わせる。

(Tel. to 2-2119) 無線連絡は 8:30・11:15・20:15である。

昨日峠から帰った人の話では、峠付近には足跡はなく、小屋へも来ていない。詳しくは当人が15:00に来るので電話してくれとのこと。

10:00 定時連絡

現地本部から桐生本部へ

- 1. 茂倉へは食料その他の関係で行かない。
- 2. 7名二俣へ向かう。
メンバー…村沢、稲葉、相川、山田、井上、前田、武井他。齋藤、品田が二俣まで行き、伝令として今日下山。
- 3. 前日入った二俣隊のメンバー桜井、菅谷、長谷、山口（昌）、海老沼、川崎、壬生、鈴木。
- 4. 荷上げは二俣へ行ったことを確認、二名は帰る。
- 5. 剣持宅へは11時頃帰る予定。

10:25 (Tel. From 谷川温泉、品田)

村沢他9名、谷川温泉着。

桐生本部より、清水東電小屋についての情報を伝える。

10:30 定時連絡

- 桐生本部より前橋へ
 - 1. 清水東電小屋についての情報
 - 2. 現地本部よりの情報（1～5）を連絡。

10:40 (Tel. to 谷川温泉) 壬生が二俣より下りて来る。その情報によると、二俣は今日一日で終りそうである。村沢他7名は二俣へ入り、齋藤、品田は18:00までに下山する予定。

13:50 (Tel. From 前橋) 清水東電小屋の小野塚さん（昨山下山した人）の話。

2月15日に入山した。清水峠の小屋の前に毛久山岳会が通ったという紙がはってあった。いつはったかは不明である。

16日は、晴れたり曇ったり、17日は晴。鉄砲尾根まで見廻りをしたが、その時は人の通った跡はなかった。

清水峠の付近は、クラストしていて、足

跡があれば判るのだが、なかった。

14:10 家族の方、工学部着、学事で先生及び永田係長と話し合う。

15:05 (Tel. to 六日町駅、給電) 昨山下山した小野塚さんに、12日前後の状況を聞く。

10日 小雪、11日風雪、12日晴。

12日 前後の状況……峠付近は、クラストしていて、アイゼンの跡は、3、4日後でも判るのだが、通った跡跡は全くなかった。又付近の尾根は人の通る跡がクラストしているのだが、やはりなかった。旧道を鉄砲尾根まで巡回するが、そこにも跡がなかった。

15:40 (Tel. From 谷川温泉) 一斎藤

二俣の隊、明日一日、搜索し、明後日下山の予定。

本日中腹まで行って2時頃二俣着。

斎藤、品田は今日下山する。

19:05 定時連絡

○ 桐生本部から前橋へ

1. 二俣隊、14:00 に二俣へ下山。何も発見できず斎藤、品田は帰る、残り15人で明日(25日)もう一度搜索して明後日下山予定。

2. 二俣隊が下山するまで、前橋は待機すること。

3. 27日の13:00より工学部で会議を催すので教背、医学部の山岳部及びワングルのO.Bにも連絡して欲しい。

< 2月25日 >

10:50. 二俣隊、天候悪く、行動不可、明日全員下山との事。

土樽(剣持宅)連絡本部 記録

< 2月19日 >

3:00 土樽着

6:00 土樽駅より医薬品、スキーを持って剣持宅へ向う。

7:00 剣持宅着(連絡員漆瀬)

8:50 元橋より連絡(草場、深沢
< WV.OB > 元橋より平標へ)

10:10 山荘より伝令(大浦、高橋)

① イイ沢のベース: 桜井、長谷、清水、川崎、鈴木、井上、前田、近藤。

サポート: 山口(昌)壬生、海老沼。

山荘: 高橋、横田、伊藤、大浦。

② 雪の状態、多少沈む程度

土樽駅→山荘2時間30分

山荘→剣持宅スキーにて1時間20分

天候、曇、西の風、強からず。

14:00 土合よりTEL

サポート隊下山。2:30電車で土樽→山荘へ(頂上吹雪、2日間晴れない場合は下山の予定とのこと)

尚、本日は縦走隊は肩の小屋泊りとの予定ということ。

15:00 元橋より

別に変化なし。

15:40 本部より連絡

① 山岳部OB、新井(小西六) 三国→平標へ向かう予定。

② 谷川指導センター

谷川岳登山、下山名簿あり。

17:50 WV、OBよりTEL(A隊)

20日予定 1499mP—万太郎へ、それから毛渡沢の方向の尾根を探索する。

18:00 本部よりTEL

山の家のOBに連絡し、入山 下山者の情報収集を依頼せよとのこと。

<2月20日>

7:00 山の家のWV、OBより茂倉新道矢場の頭まで出かけるとのこと。TEL

8:45 元橋よりTEL(草場)

1. 元橋(4名)引き上げる。
2. 平標小屋はここのところ誰も入った様子なし。
3. 元橋から平標へ向う道も通った形跡なし。

9:05 山岳部(学芸OB)佐原氏よりTEL

{ 学芸OB三名が土樽へ向ったとのこと。状況を説明。

9:05 学芸OB三名山荘へ向う

9:15 沼田署山崎さんよりTEL

状況説明する。

隊員が2名西黒へ向ったとのこと。

9:50 山荘より伝令(大浦先生、横田)

- ① 仙ノ倉隊ベース8名中万太郎へ清水桜井、近藤、鈴木以上4名が行動予定。
- ② サポート荷上げ(山荘→仙ノ倉ベース)宮崎、相川、武井、山口、山田、壬生。
- ③ 宮崎、相川はベースに残るとのこと。

10:30 本部よりTEL

- ① 平標隊より報告あり。
- ② WV、OB、茂倉隊メンバー
鳥居、鳩原、藤村、横尾、小沢、宇多川以上6名。
- ③ 桑田ら三人の話より茂倉が可能性が大きい。
・桑田氏ら数名21日茂倉へピストン予

定。

- ・矢場の頭までサポートしてもらいたいとのこと、
- ・サポート要員数名(4~5名)体力、装備のあるもの今日中に剣持宅に滞期しているようにとのこと。

④ 教育WV荷上げ隊6時に山荘へ向う。

⑤ 7時現在の平標元橋の天気ともに吹雪、平標の視界5mとのこと。

12:00 縦走隊のトラシーバー、コールサインを受信、その後受信できず。

15:00 WV、OB藤村氏よりTEL

- ① 茂倉新道、矢場の頭まで行く(天候悪し)
- ② 14時過ぎに山ノ家に着く。
- ③ 本部へ引き上げるとのこと。

15:25 本部よりTEL

- ① 桑田氏ら三名土合山ノ家へ向うとのこと。
- ② 単独行者よりの情報について。
- ③ 万太郎へ向った三人パーティ(群大パーティらしい)。
- ④ サポート隊の用意、明朝早く。

15:40 桑田氏よりTEL

- ① 17時23分土樽着で来る。
- ② サポート要員確保のこと。

16:30 山荘より茂倉サポート要員3名(上波、岩井、栗原)着。

18:15 桑田(ACOB)、桑原(会社の人)両氏着。

21:15 仙ノ倉隊と交信。

明日の予定。清水、近藤、井上、鈴木21日万太郎吾策新道上部を調べる。
・桜井、他2名がサポートにあたる。

- ・近藤一大笹平を経て22日下山予定
- ・清水一縦走隊と合流後東俣へ、余力があれば吾策新道上部。

- 中ゴ一尾根について本部の見解を問う。

<2月21日>

6:30 桑田、桑原、上波、岩井、栗原、茂倉新道へ向う。

8:00 縦走隊と交信

- 現在地 大障子避難小屋
- テントにて天候待ち。昨日、今日と停滞

食料	火を使うもの	3日分	} 計5日分
	非常食	3日分	
	燃料	3ℓ	

- 21日行動予定
万太郎尾根を下り、毛渡沢を経て、仙ノ倉山荘へ行く予定。

8:15 仙ノ倉隊と交信

- 昨日の予定に従い行動する。
- 本部よりの下山の件を伝え、協議後連絡するとのこと。

8:30 大障子と交信

状況説明、下山ルート確認

8:30 桑田氏、土樽駅よりTel

茂倉新道へ向ったが下山し、駅に待期している。

8:40 仙ノ倉隊と交信

- 予定していた万太郎山へ行くことは中止する。
- イイ沢河原にテント1張3名を残す。
(剣持宅⇄イイ沢河原⇄山荘の連絡網確保のため)
- 山荘予定 縦走隊のため毛渡沢をラッセルする。

8:50 本部とTel

- 中ゴ一尾根は考えず。
- 万太郎方向へ予定どおり下山するよう。

9:50 仙ノ倉隊と交信

- 平標、仙ノ倉方向の可能性のため、テント1張(4名)残す。
- 桜井今日降りる。

10:05 本部よりTel

- 11日肩の小屋、12日万太郎より先へは行っていない。
- 山荘へ草場、太田、鎌田、品田入ること。
- 仙ノ倉隊は全員、テントを撤収し山荘へもどること。
- 菅谷(医学4)今夜土樽駅着予定

11:10 桑田氏、サポート隊

(上波、岩井、栗原)帰る。

12:15 縦走隊と交信

これから小屋へテントをうつす。明日以後下山する。

12:30 仙ノ倉隊と交信 下山の確認。

13:30 本部よりTel 12:00 矢場の頭着、上は吹雪手がかりなし。

16:30 本部よりTel

- 22日朝6時より剣持宅にて打合せ会。
忍足先生出席、状況報告、説明、今後の打合わせ。
- I 西口パーティのサポートに全力集中。
II 桑田氏の茂倉又は、蓬峠への搜索を取り止める。
- 22日山岳部OB新井、木村、関、下田

大川氏が夜行で土樽へ。山荘より毛渡沢を経て1499mPまでラッセルルートをつけて縦走隊の道案内に当たる。山荘にいる主力メンバーは22日早く下山して協議に加わる。

4. 剣持宅の4名は山荘への伝令へ。
5. 22日土樽3時着の列車で教育4名高橋、須永、小野里、藤田、医学部、菅谷入る。

17:30 伝令(高橋、上波、岩井、栗原)

出発内容 本部よりのTel

21:20 菅谷氏着

21:50 深沢、斎藤氏着

23:30 桜井、高橋、山荘より着

<2月22日>

6:30 忍足先生、小島、大沢、藤村、鳥居、上山、広田、海老原、林(WV、荷上げ) 剣持宅着。

- ・山荘へ丑沢、新井、大川、木村、関、下田、松崎。荷上げ隊高橋(直)、須永、藤田、小野里が向ったとのこと。
- ・対策会議 忍足先生、桜井、鈴木、桑田、小島、大沢、藤村、鳥居、深沢、上山、広田、斎藤、海老原

内容 ○万太郎以後(仙ノ倉方面)へは行っていない。

- 縦走隊を確実に下山させる。
- 仙ノ倉隊、山荘にいるメンバーよりサポート隊を出す。
- 本日入ったOB 7名もラッセルする。
- 明朝、茂倉新道を登り避難小屋まで行き、食い残し等がないか、どうか調べる。
- 本日茂倉新道をできるだけラッセ

ルする。桑田、鈴木、深沢、上山、大沢、草場(弟)、広田、斎藤。

桑田さんらラッセル隊が茂倉新道へ向う。菅谷さん山荘へ向う。

- ・明日の茂倉隊のメンバーについて山荘へ出動依頼。

忍足先生、桜井さんらで協議の結果

- 中ゴアあたりで誰か転落したのではないか。
- その捜索にあたる。(中ゴア分岐、二俣等)
- 明日予定していた茂倉をとりやめ、二俣の方へ入る。

12:45 高橋(茂)山荘へ伝令

- 二俣の方の捜索を行なう。

13:40 山荘より伝令(品田)

- ・従走隊の収容が明後日以後になった場合山荘の食料がなくなるので荷上げを要請前橋へTEL。
- ・縦走隊とトランシーバー交信できたら「今日は乗越の避難小屋に入れ、明日むかえに行く」と伝えるように(山岳部OBのことづて)
- ・山荘より1499mPへサポートに向った隊定 着:清水、井上、前田、相川、山田、武井
ラッセル:近藤、宮崎、鈴木、栗原
ボッカ:岩井、壬生、長谷、山口(昌)
海老沼、上波。

13:50 忍足先生、小島、藤村、鳥居の各氏が

14:57 で帰る。尚、忍足先生は土合へ立ち寄るとのこと。

14:00 頃 縦走隊と交信

- 現在地万太郎尾根(吾策新道)を下った最初の岩峰のところで幕営する。

万太郎サポート隊と交信

- P 1499で幕営、その上部もトレースをつけた。

18:00 頃 茂倉ヘラッセルに行った桑田、鈴木氏が帰る。1100mぐらいまでトレースをつけた。

- 桑田氏に茂倉中止の旨を伝える。
- 桑田氏は、茂倉の可能性が否定されていないことと桑田氏のパーティの1人が三人を見ていることなどから茂倉方面（避難小屋など）も行けるのなら行くべきだと主張。

20:20 山荘よりOB7名丑沢さんら着。

- 明朝中ゴーフ岐ヘザックを調べに行くとのこと。
- 桑田氏と茂倉について話し合う。

<2月23日>

5:55 万太郎サポート隊とトランシーバー交信

- 山荘へ荷上げの有無を聞く、一必要なし、荷上げ隊は二俣隊の桜井氏の指示にしたがうこと。

5:30 頃 山岳部OB丑沢氏ら7名、土樽 6:40 発にて土合へ向う。

- 天神一肩の小屋一中ゴーフ岐ヘザックの捜索を行う予定。

8:30 トランシーバー（サポート隊）

- 縦走隊と合流、ツェルトは誤認であった。

10:00 サポート隊とトランシーバー交信

- 天候一行動に最適である。縦走隊元気。
- 山荘の食料あまりなし、しかし帰るので大丈夫である。

13:40 本部よりTel

- ヘリは飛ばない
- 今日の現地の予定について

◦ 明日山荘と剣持宅撤収

- 〃 〃 余力があったら動ける者は二俣へ移動

◦ テントは全部二俣へ移動一中ゴーフ岐の下部をやる。

◦ 中ゴーフ岐に行ったOBの行動

- 9時土合より土地の人6名とOB4名がロープウェイ→天神尾根→肩の小屋→中ゴーフ岐へ行き、リュックをさがす。今夕5時に帰る予定。これについては17時頃連絡する。昨日地元の人6名（2名かもしれない）に応援してもらい二俣を捜索したが手がかりなし。

◦ 今後の対策は明日桐生本部にて会議、現地は土合山の家にて。

◦ 警備隊の山崎氏より忍足先生にTELがあった旨伝える。

15:40 西口、清水両氏下山

- 山荘は全員明朝引きあげる。

<2月24日>

8:00 村沢、稲葉、武井が剣持宅へ着く。

東電の清水の避難小屋に三人が行っていないかどうか聞いてみてくれとのこと。

9:55 本部へTEL

東電の清水小屋の件についてしらべるように問う。

10:00 沼田署 山崎さんへ、土樽本部は撤収し、桐生に帰る旨を伝える。

10:05 本部よりTEL

清水の小屋には1週間近く人は入らなかった。（尚、清水小屋には東電の職員が常駐とのこと。）土樽を撤収することと、二俣へ向ったメンバーを伝える。

10:40 撤収

以上

「土合指導センター隊 記録」

山口、大島、熊田 (WV)

<2月18日>

天候、前橋晴れ、土合曇り時々小雪

14:10 医学部出発

15:25 土合指導センター着

○ 到着してすぐ、桐生工学部忍足先生に、土合到着と電話番号の連絡、先生より11日付近の登山者を調べよとのこと。

3人で土合山の家へ行って宿帳をみせてもらう、ほとんどがスキー客で12日に登山(日帰)りした2人1組のパーティーがわかる。この人たちは西黒尾根を登って肩の小屋までピストン。山田修一、古川剛

○ 駅では登山者カードはまったくなかった。

6:00 ロープウェイ駅の下で杉田 (WV)、

佐原、片貝、中島 (AC.OB) に会い、情報を聞く、(肩の小屋にもちと桐生中央生協の包装紙があり、外にはツェルトがうまわっていて、ほりおこしてみたが、中には人はいなかった。

○ 水上派出所と連絡して、11日の登山者を聞く、12日の登山者はわからない。

11日の登山者 栃木県 佐藤
東京昭島市 氏名不明
群馬町 星
東京都中野区 とくたけ

○ 桐生へ以上4人の名と電話番号を知らせる。

<2月19日>

天候、午前中曇り、午後、うす日がさす。

3:15 西黒一万太郎の縦走隊到着。

5:30 西黒一万太郎の縦走隊出発。

○ 剣持宅へ西黒一万太郎隊出発を知らせる。

9:00 水上派出所から電話あり(内容): 捜索に出た、パーティー数と、人員と場所を聞かれる。その他に三国、吾策新道、赤谷の捜索はしないのかと聞かれる。

また、発見した場合は、水上派出所と沼田警察署、土合山の家へ連絡してくれとのこと。

10:00 剣持宅へ電話: 水上派出所の電話の内容をしらせる。

12:45 サポート隊下山(天神尾根を通り、ロープウェイ使用)

サポート隊連絡の内容: 肩の小屋 10:00 着で、頂上は風強く、かたい雪で規界がほとんどないため、小屋泊りに決定。20日に下山して来た人に聞くと〔14:00 に頂上についたが、小屋には、だれもいなかった〕とのこと。また、〔3日ぐらい同じ天候の場合は土合に下山〕とのこと。

<2月20日> 天候 吹雪

9:00 家族到着 すぐ山の家へ案内する。

家族の方、及び先生、事務関係の方など 8名

○ 山の家にて中島喜代志さんの話を聞く。

○ 忍足先生車にて到着する。

13:00 日本電子より3名着、状報を提供、山の家へ行き次いで剣持宅へ向う。

9:00

○ 学事の永田さんと水上派出所の警察官(馬場、高橋)が来る。

13:00 以後

- 19日に西黒尾根を登り肩の小屋に泊った人の情報

19日の14:00に肩の小屋についたが誰もいなかった。

- 桐生からの電話の内容

- ・桑田さんから3名（サポート岩井、上波、栗原）茂倉新道を通って肩の小屋へ行き、西黒一万太郎縦走隊と、トランシーパー連絡をとるとのこと、また縦走隊と仙の倉隊のいずれかが吾策新道を下るとのこと。

- ・肩の小屋から万太郎方面へ降りた男女各1のパーティーが土樽へ降りたこと。

- ・20:00に桐生で忍足先生を中心として、今後の対策を検討するとのこと。

- 桐生からの電話の内容

- ・6:20に剣持宅から茂倉へ向った隊が茂倉新道とつぎを吹雪のため下山。

- ・縦走隊と剣持宅との連絡が可能になった。

縦走隊は、大障子避難小屋にいること、そして、万太郎から毛渡沢經由山荘へ下山するとのこと、〔本部の指示〕

- ・剣持宅と仙の倉との連絡によると、仙の倉隊は下山の予定。

- ・今日（20日）は、蘆峠は中止。

<2月21日> 天候 吹雪

10:45 桐生より定時連絡あり

もう一度11日の登山者の住所を調べて確認して欲しいとの事。

11:00 19日 報告した人たちと変りない事を伝

える

20:30 桐生より連絡

- 万太郎の北部には、いないという見通し。

- 仙の倉隊は、今日（21日）下山に向っている。

- 肩の小屋→万太郎への縦走隊は万太郎尾根をまっすぐ下山し、1499ぐらいのところから、吾策新道へ、そして土樽へ、また、土樽から、ポサート隊が吾策新道をラッセル。

- 剣持宅から山荘へ4人行く、うち3人はラッセル要員

- 本部が剣持宅へ移る。

22日 15:00に小島、鳥居、深沢、上山忍足、海老原、藤村で今後の方針をたてる。

<2月22日> 天候 午前中風強し、午後曇り

10:15 土合山の家から指導センターへ

群大の3人がオジカ沢を降りたという情報が入る。

10:30 指導センターから桐生へ群大の3人の

うち1人がすべったのを、2人が救出に向い、稜線からオジカ沢へ転落したのではないかという推定。

定時連絡内容 桐生よりTEL

11日 群大らしき者 肩の小屋 10:00着、疲れなし 順番 青アタック、キスリング、青アタック

12日 10:30 吹雪について出る。群大らしき者、万太郎方面へ

13:00 男・女 万太郎方面へ出発 晴

13:20 分岐（中ゴウ）にて、青2コ何かもう一つあった。

オジカの頭の登り、200m 手前にて輪をかいて、ひき返す跡あり。

オジカの頭より中ゴウ尾根を見る。

中ゴウ尾根を降りた様だが→不明確

土樽より大障子小屋の縦走隊に救援隊を出す。

剣持宅⇄仙の倉

トランシーバ不可能

西口隊→万太郎の北尾根、最初の岩峰、風のない所でテント

サポート→1499mを起えた所

剣持宅の桜井氏→山荘へ

明日の下記の行動は中止

茂倉新道→避難小屋

今週土曜日まで行動する予定

山岳部 OB、谷川温泉より二俣へ入る予定

13:00 地元の人、8人ぐらいが谷川温泉から二俣へ向った。

14:59 忍足先生、土合着

16:45 忍足先生及び諸先生方、桐生 or 前橋へもどる。

17:50 地元の人センターへもどる。

地元の人のお話

二俣まで3時間あまりかかり、ラッセル積雪：思いの他少ない。

オジカ沢、ヒッゴウ沢のトラバースは危険。

19:00 指導センターから桐生へ

17:50 の内容と、土合の方へできるだけ来

てもらいたいことを連絡。

<2月23日> 天候 曇り

9:30 (指導センター) — 9:45 (土合山の家) —
11:05 (教育) — 1:00 (桐生工学部)

「元橋隊 記録」

太田、鎌田 (以上WV)

<2月18日> 天候 桐生① 元橋②

桐生発 (12:30) — 元橋 (17:30)

元橋到着後元橋茶屋より 土樽本部 (剣持宅) に電話番号の連絡。(元橋茶屋025789~2602)

<2月19日> 天候⊗ のち⊙ 一時①

7:30 WV、OB草場、深沢両氏、スキーにて平標山へ出発。2月20日夕方までに帰るとの事。

10:00 土樽本部への定時連絡。内容は上記の事の報告。又、店主より昨夜西黒～肩の小屋をピストンした隊からの電話連絡のことを聞く。内容は、群大パーティは、万太郎南への枝尾根にまよったのではないかとのこと。

15:00 土樽本部への定時連絡。新しい情報は入っていないとの事。又こちらからは、元橋茶屋は、19:00 には閉店しているため、19:00 の定時連絡は、しないことを伝える。

<2月20日> 天候ふぶき

8:30 草場、深沢両氏、平標山より下山。平標山頂付近には、人のいる様子はなく、又平標小屋は約一週間人の入った形跡はなく、

そして小屋には、三人に与える食糧を残して来たとの事。我々がテント撤収している間、草場、深沢両氏が本部へ電話連絡。内容は、4人は元橋を撤収することを伝えこれからの行動指示をうける。

10:30 後羽より桐生本部へ電話連絡。内容は一度桐生に帰り、装備、食料等を整えてから土樽へ出直すこと。

12:30 桐生着。

縦走隊 行動記録

西野(OB)、西口(OB)、村沢、稲葉サポート隊、中林(OB)、相川、山田武井

<2月19日> ⊕→○

指導センター(発5.00)一肩の小屋(着10.00)

(11.00) サポート隊天神尾根より下山。

肩の小屋(発13.00)一オジカの頭(14.30)一大障子小屋(16.00)

我々は視界不良の為一時は、今日の予定を肩の小屋泊りとしたが、昼頃、天候が回復したため、急に大障子小屋に向けて出発。大障子小屋付近まで視界良好、ラッセルほとんどなし、オジカの頭近くは、岩が露出しており、慎重を要する。ところどころ足跡があり、数日前のものと思われる。

中ゴウ尾根の分岐にザックなし、ヒッゴ一沢、オジカ沢には雪崩の跡は発見できなかった。夜半風雪、テントの補強。

<2月20日> ⊕

風雪強く停滞

<2月21日> 風雪強く停滞 ⊕

土樽本部とのトランシーバー交信が初めて出来た。その後の状況を知る。山荘から万太郎尾根をサポートするとのこと、明日下山決定、天幕を小屋に移す。

<2月22日> ⊕

大障子小屋(8.15)一万太郎山(着11.10)一井戸小屋沢源頭 ① (15.00)

吹雪の中を万太郎山に向かって出発、吹きだまりでは背丈ほどのラッセル、思ったより時間を費す、視界10m程、万太郎からの下り判別できず、苦しむ。下山をあきらめ幕営、夜現在位置確認。絶えずサポート隊との交信あり。

<2月23日> ⊙→①

出発(7.00)一合流(8.30)一荘(2.00)

昨日とは変り、視界がよく、サポート隊の天幕も見える。長丈な万太郎尾根も目の前に見え、一度稜線近くまで登り直し下山。小さな岩峰がいくつかあり一ヶ所ザイルを付ける。サポート隊から連絡のあった黄色いテントらしきものは見あたらず、最後の岩峰を下った所で合流し、サポート隊の天幕へ向う。昼頃天幕を出発して山荘へ戻る。

仙之倉隊 行動記録

鈴木、井上、壬生

<2月18日(金)> ○→⊙→⊕

(3:00) 土樽着 (7:00) 山荘着

(10:00) 山荘発、仙之倉北尾根 1200m 付

近までトレールをつける (15:30) 下山 —
(16:00) 山荘

< 2月19日 (土) > ⊙→⊗

(8:50) 山荘発—イイ沢河原のベース (15:00)

(15:20) サポート隊下山— (18:15) 山荘着

イイ沢のベース：桜井、近藤、清水、
長谷、鈴木、井上、前田、川崎
サポート：山口(昌)、壬生、海老沼
山荘：高橋、横田、伊藤、大浦

< 2月20日 (日) > ⊗ 風強し

仙之倉 BCへのサポート隊

宮崎 (OB) 山口(昌)、山田、相川、
武井、生壬

(7:50) 山荘発 土樽駅から荷上げ間に合
わず、山荘の食料、燃料、医薬品を荷
上げする。北尾根を登る、2人の par
tyが毛渡沢をラッセルを行っていたが
引き返した模様。下部は、風雪あるも
弱し。

イイ沢河原の B.C.

風雪、非常に強く、沈澱

午後から、風少し弱まる。

この日、明け方、工学部の冬テントの
ポール、強風のためにおれる。

(14:30) サポート隊イイ沢河原 BC に到
着。

< 2月20日 (日) >

イイ沢 BC 泊：桜井、近藤、清水、宮崎、
相川、武井、鈴木、井上、前田、川崎
下山者
山口(昌)、山田、壬生、長谷

(2:45) —山荘 (17:00)

< 2月21日 (月) > 猛烈な吹雪

イイ沢BC泊った者、全員下山

(13:30) 下山開始— (14:00) 仙之倉隊と
剣持宅

交信— (18:30) 山荘

イイ沢河原は、風雪激しく、しばしば歩行
困難、視界ほとんどきかず。K2を下りお
わるころから、風雪よわまる。

(22:00) 桜井、高橋、剣持宅へ向う。

(23:30) 剣持宅着

二俣隊 行動記録

< 2月23日 >

仙ノ倉山荘発 (6:15) —土樽 (8:56) —
水上 (10:00) —谷川温泉 (10:30) — (12
:35) 二俣T.S.

○ 山荘から二俣まで行動した者
桜井 (AC.OB.) 鈴木、長谷、岩井
上波、海老沼、壬生、栗原、山口、川
崎

○ 土樽から二俣まで行動した者
菅谷、石田、柴崎

○ 二俣から下山した者
岩井、上波、栗原、石田、柴崎。この日
は快晴で視界はよかったが、時間を考えて
二俣 T.S. からの行動はせず。谷川温泉か
ら二俣T.S. まではラッセルしてあった。

< 2月24日 >

二俣 (9:30) — (12:00) 中ゴ—尾根、
樹林帯の終わる少し手前の地点 (12:20)

— (13:15) 二俣

出発の時は、雪が降っていたが、視界がよかったので出る。尾根に登ってからは、風も出てきて、視界は50mぐらいになる。途中でひき返す。この日、単独行者が中ゴ一尾根を登り、分岐の2~300m手前まで行ったが、何も発見できなかったとの事であった。

◦ 中ゴ一尾根に登った者

桜井 (AC.OB) 菅谷、鈴木、長谷、海老沼、川崎

◦ この日二俣に入った者

村沢、井上、前田、相川、山田、稲葉、武井

< 2月25日 >

朝から風雪激しく、この日は行動せず。

< 2月26日 >

全員二俣より下山。

1972年2月の天気概説

冬型の気圧配置は非常に弱くて、低気圧が頻繁に通過した。特に13~14日、19日、26~28日には日本海と南海沿いに発達した低気圧が通り全国的に天気を大きく崩した。

1月に引き続き暖冬傾向で雪国では寡雪であったが20日からは冬型になり積雪量が増えた。

13~14日にかけては豆台風級に発達した低気圧が日本海と南岸と沿って進み、この低気圧で

全国的に多量の降雨を見た。またこの低気圧は強い突風や暖気をもたらして、気温がぐんと上がった。

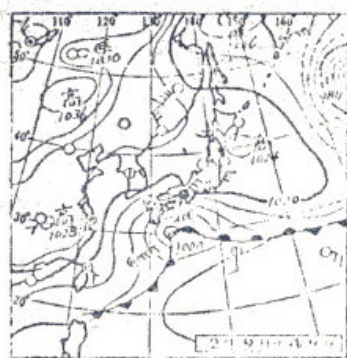
20日から21日にかけて低気圧が本州の東で強く発達し、冷たい北よりの季節風が吹きまわった。それが一応収まった22日は全国的に冷え込む。

谷川山麓の天候

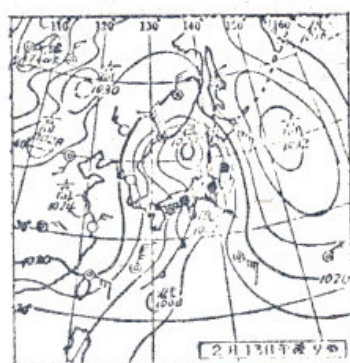
(47.2.10~2.17)

日	時刻	土 合				土 樽				備 考		
		天気	風向	風力	積雪	気温	天気	風向	風力		積雪	気温
10日	8:00	⊗	N・1		52 ^{mm}	-3°C	⊗	S・2		90 ^{mm}	1°C	夜行にて 土合へ向う
	16:00	⊗	N・1		55	0	⊗	S・1		95	0	
11	8:00	⊗	S・1		56	0	⊗	S・1		100	0	西黒尾根を 肩の小屋ま で
	16:00	⊗	N・2		54	1	⊗	N・1		100	1	
12	8:00	⊗	N・3		55	-2	⊙	N・1		100	-2	肩の小屋か ら 蓬ヒュ ッテまで
	16:00	⊙	N・3		50	1	⊙	N・1		100	2	
13	8:00	⊙	S・2		45	-1	⊙	S・3		100	2	蓬沢を下山 途中遭難
	16:00	⊗	S・2		45	0	●	S・6		95	2	
14	8:00	⊗	N・1		40	1	⊙	N・1		95	1	
	16:00	⊙	N・2		37	4	⊙	N・2		85	3	
15	8:00	⊗	N・3		37	0	⊗	N・1		85	1	
	16:00	⊗	N・3		37	1	⊗	N・2		85	1	
16	8:00	⊙	N・2		37	1	⊙	N・1		85	0	
	16:00	⊙	N・1		30	4	⊙	N・1		80	4	
17	8:00	⊙	S・1		28	3	⊙	S・1		80	1	

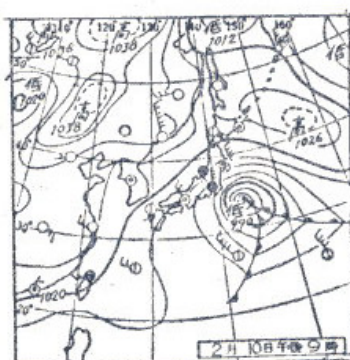
1972年2月中旬の天気図



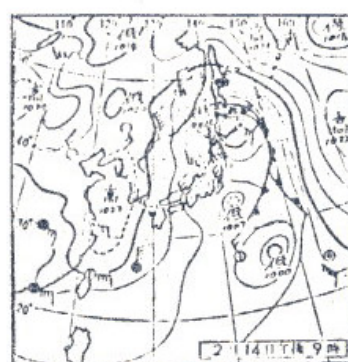
9日(水) 天気変化は小刻みで、九州には早くも雨が降出す。冷たい高気圧におかれた関東以北は冷える。



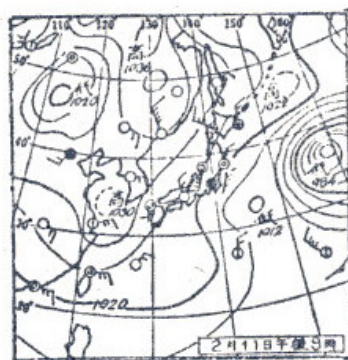
13日(日) 南北に伸びる深い気圧の谷に入り。2つ玉低気圧で全国的に悪天である。雨量も40~90mmと冬の雨としては多い。



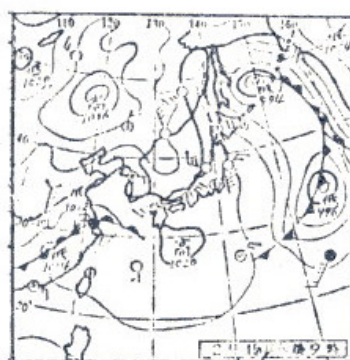
10日(木) 表日本大雪型で平野部で4~10cmの積雪、3年ぶり大雪警報。金沢、館山は、みぞれ。



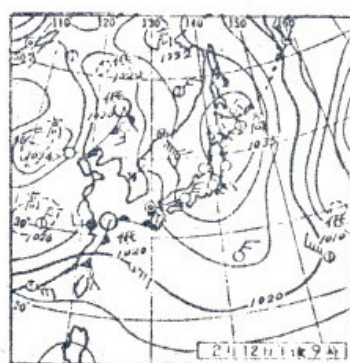
14日(月) 烈しい2つ玉低気圧の通過後各地は異常な暖かさ。昨日の低気圧で利尻岳で雪崩犠牲2、若狭湾で漁舟転覆5犠牲。



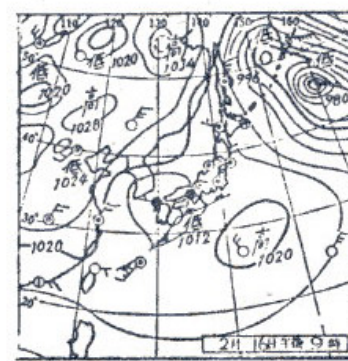
11日(金) 雪をさせた低気圧が去っても関東の回復は遅れた。鳥取の大山と福島のア達太郎山で新雪ナダレ犠牲出る。



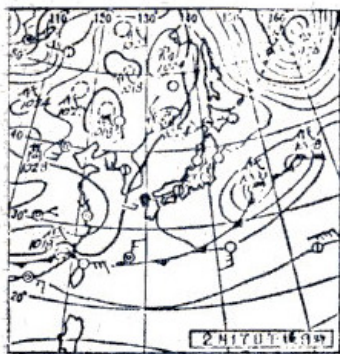
15日(火) 低気圧が去って北西の季節風が吹き出す。その割に気温は下らず全国的に暖たか。



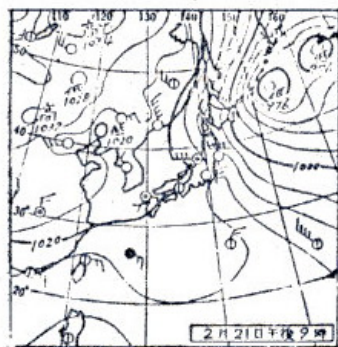
12日(土) 中心が北偏しているが峰が南に伸びる移動性高気圧で全国的に晴。しかし夜では早くも上海低気圧で、九州は曇。



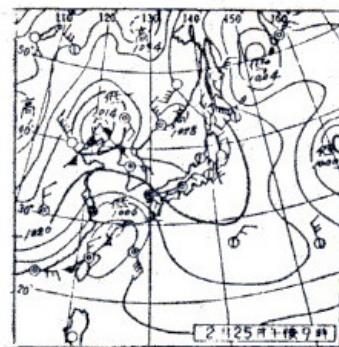
16日(水) 低気圧の接近で九州は雨が降り出す。天気の移り変わりがかなり早い。気圧系の移動速度も時速30k以上に達する。



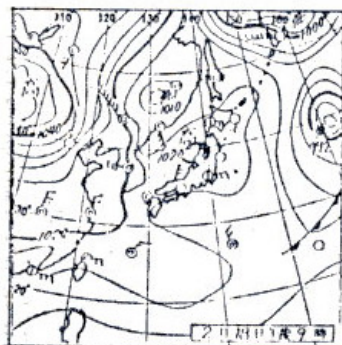
17日
前線は南海上に南下



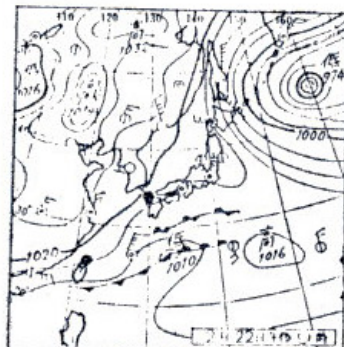
21日
前日に続き冬型



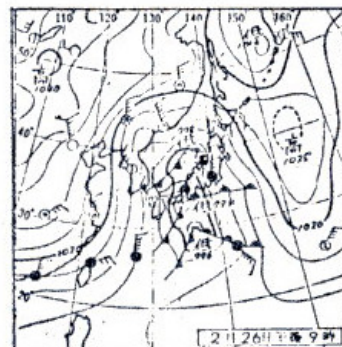
25日
たて長の移動性高気圧



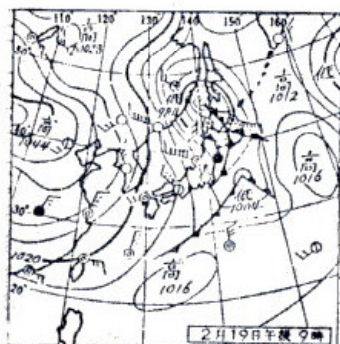
18日



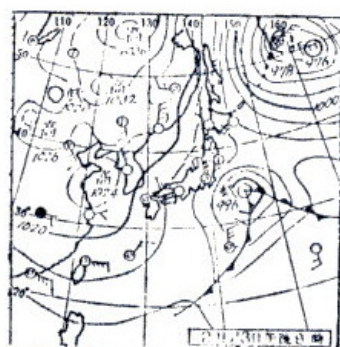
22日
低気圧停留で冬型続く



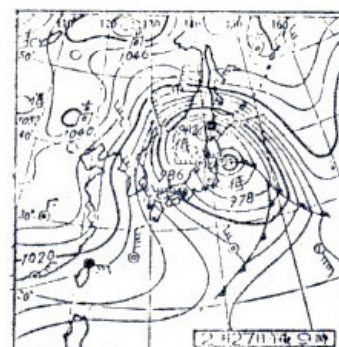
26日
低気圧が九州に接近、
南岸に前線が発生



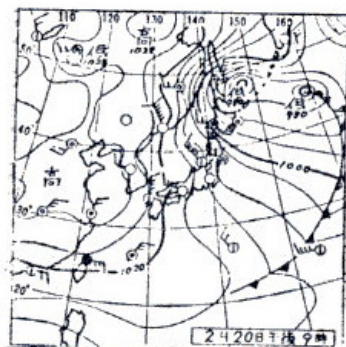
19日
日本海低気圧で全国的
暖たか



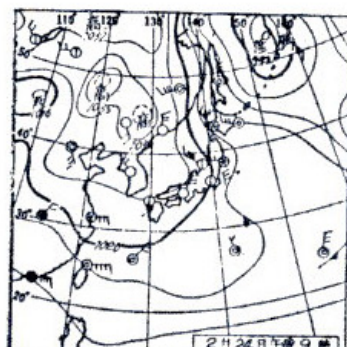
23日
低気圧で南関東小雪



27日
低気圧が発達し全国的
に大きく、くずれる



20日
久しぶりの冬型、季節
風強し



24日
冬型の気圧配置ここに
きての積雪かなりの量
に達す。

第一回遭難対策会議

<2月27日>

空しく終わった第一次捜索の経過報告が、その任にあたった各者からなされた後、新たにワンゲル部、山岳部の現役部員による、遭難対策本部が設置された。そしてまず、3名の体格、服装、装備、及び連絡先等を書いた看板を、後閑、水上、ゆびそ、土合、土樽、湯沢、六日町の各駅と、谷川岳登山指導センター、谷川温泉、元橋、三国峠の各登山口に立て、一般登山者に協力を呼びかける事にした。捜索はまず3名の足取りをつかむ事に重点がおかれ、現役の行動はOBの協力を求めて対策本部で決定され、慎重に行なわれるものとした。

谷川岳～蓬峠捜索記録

西口、山口、稲葉、川崎、相川

3月18日(土) 快晴

土合ロープウェイ駅(10:30) — (11:00) 稜線
(11:25—(12:20) イワオ新道との分岐(12:35) — (14:20) 谷川岳肩の小屋 — (15:45—ノゾキとオキの耳中間点幕営

3月19日(日) 快晴

(7:05) — (8:05) 一の倉岳 — (8:40) 茂倉岳 — (10:47) 武能岳 — (11:53) 蓬ヒュッテ ヒュッテ内のゴミ捨てにCOOPの紙ぶくろが発見された。中には次の物が入っていた。

- ラーメンの紙袋3ケ
- ビスケットの包装紙1ケ
(桐生中央生協の値表示のはりがみ付き)
- ショートホープの空箱1ケ
- リプトン紅茶2ケ

◦ ちり紙

また、紙ぶくろの近くに

- ラーメンの袋3ケ
- モチの包装紙1ケ
- ショートホープの空箱1ケ
- リプトン紅茶2ケ
- ちり紙

があった。

3月20日(月) 雨

蓬ヒュッテ(6:05) — (8:30) 茂倉新道出合 — (9:10) 土樽駅

蓬沢を下る。途中かなり大きなデブリが続いていた。

第二回遭難対策会議

<3月26日>

経過報告がなされ、3月18日から20日の谷川岳蓬峠間の捜索で、蓬ヒュッテより桐生生協の紙袋が発見された事より、捜索範囲を蓬沢付近に限定することが確認された。

決定事項

- 土合駅、土樽駅、蓬ヒュッテに新たな看板を立て、一般登山者の協力を求める。
- 捜索方法はまず三名の遺留品発見に重点を置く。
- 四月中は、医学部中心で捜索を行う。
- 蓬沢に関する資料収集を早急に行う。

第三回遭難対策会議

<4月23日>

経過報告がなされ、現在3名の遺留品は何も発見されていない事、蓬沢本流のサク作りに現

在取りかかっている事が報告され、4月26日から5月7日までの第二次捜索が決定された。

決定事項

- 蓬沢本流とチャイリ沢出合より下流ナダレ跡を捜索の中心とする。
- 26日に先発隊6名を出し、捜索場所の確認と、ベースキャンプ地の下見を行なわせる。
- 28日に本隊は捜索道具と共に出発する。
- 捜索は、長さ5mのゾンデによる捜索と、スコップによるナダレ跡の発掘を並行して行う。
- OBの参加を求める。

第二次搜索記録

<4月28日>

7:00、工学部のバスにて、搜索の本隊、約25名（前橋よりも含む）が桐生工学部を出発し、土樽の蓬林道のベースキャンプに向かい出発する。

14:20 テント場、予定地着（先発隊と合流する。）ここで、テントを張る人間を残し、残りのものは、前に作ったサクを見回ると同時にもっと上流にもう一つのサクを新しく作るために出発

15:05 前に作ったサクより約10分ぐらい上流にサクを作り始める。

16:40 サク作り完了し、もう少し上流まで偵察し、下山開始する。

17:30 サク作り隊テント場着。

<4月29日>

5:10 トランシーバー連絡員ならびにテントキーパー1名を残し、他のものはすべて搜索に出発（スコップならび、ゾンデをすべてもって上がる。）

5:55 第一のサクの現場着、何名かサクの修理に残す。

6:30 チャイリ沢とイイ沢の出合いの今日の作業場に到着する。沢の状態は第2のサクより約5分ぐらい上流に3m四方の雪がとけ

沢の出ている所が2ヶ所ぐらいあり、それより上流には沢の見える所はなし。

作業方法は、出合の辺よりイイ沢のほぼ中央より幅1m深さ2~3mのみぞを上流に向かって約40mぐらい掘ったが、どの場所でも雪がなくならないので少くとも雪の深さは約3m以上は常にあった。他は約20人ぐらいで約4mの長さのゾンデをもち、みぞ穴を掘り始めた位置より横に約0.5~1m間隔に並び、上流に向かい約150mぐらい、ゾンデで突き刺していったが、べつだん手がかりらしきものは発見されなかった。ゾンデでやってみた結果でわかったことは、急斜面になっている所では雪の深さは浅く下の方1mぐらいは空洞になっていた。

ブロック雪崩の危険があるので、笛を持った見張の人が2人ずつおもにブロック雪崩について、左右の尾根や蓬峠からの沢を監視していた。

今日の時点においては、3人が遭難した場所は、今日穴を掘り始めた所よりイイ沢本流をずっとさかのぼった沢が左右に分れる所があり、その蓬峠の小屋の方に向かっての沢の方に雪崩のあとが残っていたので、遭難場所はその雪崩跡近辺ではないかと考えられ、今回の搜索の中心にするつもりであった。

15:00 作業打ち切り。

<4月30日>

5:05 昨日と同じ道を通り、第1、2のサク地

点を通過していった。現場までの道の様子としては、第1と第2の中間地点ごろで夏道と別れ、沢沿いの雪の上を歩くようになる。夏道と分かれる地点の辺まではそれほど雪はないが、何度か沢をわたらなければならない。その他は別に危険と思われるような所はなかった。

第2サクの地点に 5:43 分ごろつき、そこを通りすぎていくとすぐに2人の登山者がザックを発見し、下に知らせにくるのと出合う。だいたい 5:45 分ごろである。その人たちの話では、ザックに岩上と名前がはっきり書いてあり、駅のポスターを見てきたので、ベースまで知らせにくる所であったようだ、すぐに本隊はザックの出た場所に急行し、ザックの確認をする。その結果まちがいなく岩上君のアタックザックであることを確認する。

6:00 作業を開始する。まずザックの見つかった地点より上流の雪の中で、だいたい下に水が流れている地点を見当をつけて、穴を開けていく。並行して、ザックの見つかった地点の雪の割れ目の位置をその割れ目をどんどん広げていく作業をした。上流に掘った穴は、穴同志を、幅 1m ぐらいの溝でつなぎ、流れがどういう状態になっているのか調べようとした。

8:00 ザックの見つかった地点より約20m上流で穴を広げる作業をしている時、流れの中で、ワカンを発見、これは2つとも、ゆわえてあり、ザックの切れはしがついていた。このワカンの確認を試みたが、ザックの切れはしから岩上君が持っていたワカ

ンにまちがいがないと確認された。

その後穴掘り作業が続行されたが、他に何の手がかりもつかめなかった。みぞ掘り作業は、あまりみぞを長くすると、みぞの左右で雪がくずれて、作業に危険がともなうので途中から中止された。

この日の作業の進みぐあいは、ちょうど連休であり、A.C、W.VのOBや群馬高専の応援もあり、総数約60名でザックの発見された地点より上流に向かい縦、横2~3m深さ3~7mぐらいの穴を約250mの間に20個以上掘り、いくつかの穴はみぞでつなぐという結果になった。

15:30 作業打切り

<5月1日>

5:15 小雨のため今日作業ができるかどうかまだ決定できないため約10名を偵察隊として、サクの見回りなどのため先に出発させる。

5:55 雨もあがってきたので本隊も出発する。

6:55 現場着

今日の作業はワカンの発見された場所を中心に幅1mぐらいの横みぞを約3m間隔ぐらいに何本か掘って見た。そして雪の中に、何か埋まってはいないかと思い、ゾンデをつかい、いままではゾンデは上からついていただけだったのを、横みぞの中から、表面と平行に近いような方向にもついでみた。結果としては今日の成果は何もなかった。

以上の作業と並行して、ザックの落下テストを行なった。これは岩上君の発見されたアックザックと、同じ型、同じ体積同じ重さに近いものを使い、実際にそのザックを沢の中に落としどれだけ下流まで流れて行くかを調べ岩上君のザックがどれだけ上流の方から流れてきたのかを推測しようとした。その結果、沢の中は岩などがごつごつありほとんど流れていかないことがわかり、その結果から、岩上君のザックは、発見された近くの雪の中にあり、雪がとけて、沢に落ちた所を運よく発見したものであるということがわかった。

13:00 にB.Cに向かう。

<5月2日>

7:40 雨のため、何人かが偵察のため出発、第1のサクの辺で雨が強くなり、やや遅れて出発した本隊も第1のサクより前へは行けず、サクの見はりに3人残し、残りは全員B.Cにもどる。

その後は、天気はやや回復したが、捜索には出ず、見張をかえただけで他の者は沈没。

<5月3日>

5:00 B.C出発。今日は、現場の穴掘りと、昨日、一昨日などの雨で水がかなり増え、サクがあまり役にたたず、サクの上を水が流れて行ってしまうので、サクの修理をする隊とに分かれて作業することになった。

5:50 穴掘り現場に着いた。今日の穴掘り作業は、4月30日に多数の穴を掘った地点より

上部にもいくつか穴を掘ってみて、それと並行して、A.C部員によって下の穴から順に、穴と穴との間を沢にそって、水流の所の空洞を歩いてもらい、雪の下を調べることにした。

12:30 雪の下を歩いているA.C部員が、今日掘った最初の穴（これは4月30日に半分ぐらい掘り始められていた。）のほぼ真下に近い所で、高木君を発見した。

発見された位置は、岩上君のザックが発見された所より約300m上部、チャイリ沢の出合いより約300m下方の沢のほぼ中央の雪の深さ5m、空洞の深さ1.2mぐらいの、水の中である。

* 状態としては、キスリングザックを背負ったまま、うつぶせに、頭をほぼ北よりにピッケルなどはもったままで、水に体半分がつかっていた。

* 服装、装備

キスリングザック、ピッケル、（ピッケルバンドが右手についていたので流れなかった。）真赤な、オーバーケッケ、オーバーズボン、青いオーパシューズ、アイゼン（はいていた。）ワカン、青のオーバ手ぶくろ（右手だけして左手はとれてなくなっていた）黒の目出帽、ゴーグル。

13:00 流れないようにザイルで高木君を確保しておいて、まずザックから、次に高木君を水の中から雪の上に引き上げる。

13:25 高木君が引き上げ終わったので、その近所を集中的に捜索するため、穴掘りと、もぐって雪の下を調べる作業とを続けてみる。雪の下を調べていた人が、高木君が発見された約15m上部の流れの中で岩上君を

発見した。

その位置は
高木君より約15m上方の沢の中央より左岸より、雪の深さなどは高木君の所とほぼ同じ。

その状態は
頭を北向きに、大きな岩の上にあお向けになっており、足をほぼ180°に近く開いており、右足の先約15cmぐらいが上の雪の中にうまっており、他の体の部分は岩の上よりかかるかっこうであった。

*装備、服装

青のオーバーズボン、赤のオーバーヤッケ、赤のオーバーシューズ、ゴーグル、アイゼン（はいていている。）青のオーバ手ぶくろ、青い目出帽、ピッケルバンド（右手にしている、ピッケルは切れて、なくなっていた。）

岩上君の遺体引き上げが手まどってしまったので、寺林君の搜索は明日にして、今日中に2遺体をB.Cにおろすことにする。

15:20 遺体下山開始

17:30 B.C. 着

2人の遺体はその日のうちに検死を済ませる。

<5月4日>

6:00 B.C 発 — 7:00 着（昨日の発見現場）

今日中にどうしても寺林君を発見してやろうと、2人が発見された付近に集中的に穴を掘ったり、ゾンデでついたり、雪の下にもぐって搜索したりしたが、結局寺林君に関しては何の手がかりもえられなかった。

15:45 今日の作業を打ち切り B.C に向かう。

以上の作業と並行して、部員も何名か同行、湯沢で家族の人たちによって火葬がおこなわれた。

<5月5日>

5:40 今日は天気が悪く、先発隊だけが出発する。

7:40 小雨の中、今回の搜索の最終日であったので、どうしても今日中に寺林君を発見しようと本隊も出発する。

まず、今日は、昨日と同じように2人が発見された付近に穴を掘っていくと同時にもう1度下の方の穴から雪の下を調べようということになり、下からずっともぐりはじめた。

10:30 穴にもぐっていた人が雪の中2個所に異臭個所があるとしてきた。その場所は、一個所は岩上君の発見された穴より約8mぐらい上部、もう一個所はその所より約10m上部ということであった。その所に穴をあけてみたが何も発見されなかった。

結局今日の搜索では寺林君に関する手がかりは何も得られず、今日の搜索は打切ることになった。

<5月6日> 下山

第四回遭難対策会議

<5月7日>

2人が発見された状態から判断して、残る1人も近くにいると思われたが、少人数の発掘は

危険であるので、多人数くり出せる土、日曜を今後の搜索の中心とすることが確認された。

決定事項

- 搜索範囲を2人が発見された現場より上に広げる。
- 今後、雪どけが急速に進むと思われるので、できるだけ多く現場付近の見まわりを行う。

<5月14日>

(3:55) 土樽—5:55現場

5月7日の対策会議で、今日はできるだけ多数の人数をくり出し、穴掘りなどをして搜索することに決まり、26人が参加した。

天気は悪く、雨の降る中で、途中一時中止することもあり、作業はイイ沢とチャイリ沢の出会いまでもすべて雪の下を搜索しようということになり、前の搜索のときあけた穴より上部に穴をあける作業を行った。3つだけ穴をあけ、中を見たが何もせず、今日の搜索は打ち切った。

<5月20日>

7:20 B.C. 発

今回の現場までのルートは今までと同じであるが、連休の搜索の時とくらべると雪は非常にとけており、ほとんど沢伝いに現場まで行ける状態であった。高木君たちを引き上げた穴の辺までは、沢がぱっくりと雪がとけてあいていて、沢の中を歩いていった。

8:18 沢を現場に行く途中、高木君の発見された約20m下で青いオーバー手ぶくろを発見(左手)これは高木君のにまちがないと

確認した。

8:20 少しおくれてきた人が岩上君のワカンの
● 発見された少し上部でピッケルを発見、ピッケルバンドがついていない所から岩上君のピッケルであることは、ほぼまちがないと思う。

今日の作業は、チャイリ沢とイイ沢の出会いまで確実に調べようということになり、さらに上流に穴を2つほど掘って、残りは2人の発見された付近の穴から横みぞを掘って、雪をすべて掘りかえそうという意気込みでやったが、睡眠十分でないのと少し雨が降り出したのとで、あまり成果があがらないうちに

12:30 ごろ B.C に引き上げた。

(参加人数約15名)

<5月21日>

5:10 出発(B.Cを)、昨日の夜行で来た人にはテントで少し寝てもらい、ほぼ昨日のメンバーだけが先に場所に向かった。

6:10 現場着、昨日と同じに横みぞ掘りをやっていった。

8:00 岩上君の発見された所より約20m上部の穴の所に横みぞを掘っていた時に、青いオーバーシューズがあるのがわかり、もう少し掘ると体があることが確認された。

* 位置

岩上君より約20m上流の沢のやや左岸よりの雪の中、雪の厚さ約3.5mぐらいで表面より約1m下の雪の中。

* 状態

頭を南東に向け左上の横向きにほぼまっ

すぐに、顔はやや下向きかげん。左手のオーバー手ぶくろが少しめくれて、皮膚の出た所には少しカビが出ている。顔のまわりなどには少し雪がとけていて氷のうすい層ができています。岩上君たちよりも腐乱して少しに匂っていた。右手にはピッケルをもち、ピッケルの先にザックがついていて流れずにいた。

＊ 装備、服装

青いオーバーヤッケ、オーバースボン、青いオーバー手ぶくろ、オーバーシューズ、アイゼン（つけている）、アタックザック、ワカン、ピッケル、磁石、時計（5:28で止まっていた。）、ゴーグルはなかった。）

10:20 下山開始。

12:30 B.C. 着。その日のうちに湯沢の火葬場で検死をすませ、火葬する。

第五回遭難対策会議

＜5月28日＞

経過報告がなされた後、今後の方針が決定される。

決定事項

- サク、及び看板の撤去を早急に行なう。
- 礼状の作製を行なう。
- 追悼山行の計画を立てる。
- 碑、または導標を立てる。
- 遭難対策本部は解散し、追悼集編集委員会を発足させ、それが後の事務処理をひきつぐ。

遺稿

高木君遺稿

拝啓

昨晩は久しぶりの月夜でしたので、明日は晴れると思っていましたが、実際今日は、からっとした秋晴れです。こんな日の谷川岳あたりは、紅葉が陽にはえて、さぞ素晴らしい景色でしょう。雪国の紅葉は、ほんとうによいものです。尾瀬へも多くの人が紅葉を見に行くようです。あの燧ヶ岳にはもう初雪があったそうです。春の花の種はどうしましたか。

私がハウスの跡にすこしばかり土をおこしておいたのですが、桐生にはもくせいが多くて町全体が甘酢っぱいにおいでいっぱいでした。どこの家にもだいたい色の小さい花が見つかるのです。雨の後など、地面が落ち花で一面だいたい色に変わるくらいです。家でも草花だけでなく、くちなしとかこのもくせいを植えたらどうですか。前期の試験もあと明日の地理一科目を残すだけで終了です。

前期は小説ばかり読んだり、古典の本など読み返し、あらかたの科目が、そのままだったのが苦労しました。とにかく先月の10日に帰ってから今日までの約1カ月がこのくらい長く感じられた事はありません。毎晩あけがた寝る生活を続けざるを得ませんでした。でもやはり四カ月分をわずか一週間で終わるすべもなく、あまり良い結果ではないようです。でもわれながらこんなに勉強したという実感を味わった事は今だかつてありませんでした。

後期はこれにこりて、たぶん毎日よく勉強するでしょう。前期には実習を含めて3科目であった専門科目が、倍の6科目、14単位を取らねばなりません。時間割をみると月曜日から金曜

日まで毎日、8時30分から5時30分までのハードスケジュールでびっくりしています。

このため製図の道具とか設計論の本などとりそろえなければいけません。18日から後期が始まるのですが、その前後に本を買いたいと思います。教授が本を指定したら、定価等を見てまた手紙を書きますから金を送って下さい。たぶん一万円前後になると思います。またカメラのレンズにかびがはえてしまったので、東京へ送ってあります。以前から気づいていたのですがシリコンでいくらふいてもおちないのでカメラ店で見てもらったらかびがあるとの事です。

3000円を越えるようだったらそのまま返してもらおう事にしてあるのですが、そのため少し前記の本とあわせてもらったと思っています。

秋休みは一週間ですがクラブで足尾の山で沢登りをする予定です。紅葉のよい時なのでそれを期待しています。来月の6・7日は那須で宇都宮大、茨城大との合大合宿というか、クラブ間の交流会があります。今度こそ那須の山々がよく見える事でしょう。今度帰る時には、新しい風呂に入れるわけですね。

鉛筆で失礼

敬具 雅一 16日

岩上君遺稿

高校生当時の日記の一部より

5月9日 火曜日（昭和42年高校一年生当時より）

頭にきてしまった。地学の勉強で火成岩の出来方と云うところを読んでわからなかったので

何度も読みなおした。しかしわからない。この間買った参考書をひらいて読んでみてもだめだ。地学は本を読んで要点をノートにメモしなければならぬのだ。自分があきれてしまった。どうして自分はこうだめなんだろう、これでも高校生かなと自分で寝ながら考えてしまった。

5月12日 金曜日

英語のテストが返って来た、90点だった。しかし90点以上は数多くいた。英語は自分の得意な教科なのでがっかりした。テスト中時間が余ったので何度となく見なおしたのにどうしてまちがいに気づけなかったのだろうか。何だか自分だけがとり残されていくような気がしてならない。英語だけはだれにも負けたくない。こんどはきっといい点をとって見せるぞ。

5月14日 日曜日

失敗した。きょう旺文社の学力テストがおこなわれた。一年普通科全員受験した。体のコンディションが非常に悪かった。朝学校へ行く途中は気分がよいように思ったが試験になってみたら——だ。それもその筈きのうは12時頃まで起きてしまった。テレビを見ていたのだ。数学の試験中など、これがそれかなと自分でも思った。考えることが出来なかった。気分が悪かったのにプラス夏のような気候。

今机に向ってこの日記をつけながら反省して居る。こんどはけっして試験前に夜更かしはしないようにする。全体にだ。また試験に関してだが希望校希望科を書かせる欄があった。どこと云うあてもなかったが群馬大学工学部にした。あとでみんなに聞いて見たら私立が多かった。少しはずかしい、この頭では。しかしこれから一生けんめいやって、きっと入って見せる。

5月18日 木曜日

今日は授業にでている時眠ったくてしかたがなかった。話を聞いていてもわからない。きのうは11時30分頃眠ったと思う。けさ起きたのが7時30分、8時間位ねたのだがどうして眠りたいのだろうか。体が弱いからなのか、学校で理解できなかった事を今やって居るが、なかなかかどらないので頭にきてしまった。

どうして俺は粘り強くないんだろう、根気がないのかもしれない。どうしたら根気が強くなるだろうか。

9月7日

寝ていると姉が「犬が死んじゃった」と言った。初めはしんじることが出来なかったけれど、うそはつかないと思った。寝ながらこれは夢かなあと考えたが現実だった。これが夢であることを目をさましながら思った。コロはぼくらが小学校にあがって間もなく二月ないし三月のはじめ頃、父が多田の方でもらって来た犬である。その死んだ状態はなんともいじらしかった。というのは物置小屋でまるで寝ているように感じられた。なんだかそのいじらしさのために目の中があつくなってしまった。

8月6日 月曜日（昭和43年高校二年生当時）

夏休みも半ば半分が終ろうとしている、休み中一回位はと思って今日大島君と大沢君で榛名山に行く予定だった。しかし午前七時に大沢君が家に来て出発したところ、車のスピードメーターが動かなかった。しかたがないので8時頃まで待ってから車をなおしに、佐野に行って車をなおしてもらった。そうしたら9時20分になってしまった。さてこれから大島をさそって出発しようと思ったところ、こんどは大島君の家

が見つからなかった。しかたなしに、ある所で大島君の家に電話をした。しかし電話がでなかった。もう頭の中は何とも言いようのない気持ちにおそわれた。だが大島君ががっかりして家で待っているのだろうかということを考えるとなんだかすまない気がしてたまらなかったので人にたずねながらやっと10時頃大島君の家にたどりついた、おそくなってしまったので予定を変更して筑波山に行くことにした。

今日一日はとても楽しい一日であった。もう一度位夏休中はどこかに行って見たいものだ。

7月19日 土曜日（昭和44年高校三年生当時）

成績は前々から悪いと思っていたが実際に通知表が自分の手に入ると改めてがっかりしてしまった。ゆううつだったが田中君に誘われて本屋に行った。その本屋で本を見ていたら池田君が来てコンサートの切符が手に入ったから東京まで聞きに行かないかと誘ってくれた。俺がいつ行くのだと聞いたら今日だと言った。

俺は初め返事に困ってしまった。と云うのはそのコンサートが夕方からやるのでその日は外泊しなければならないのだ、泊る所は池田君の親戚の家なのだ。その時は「行こう」と返事をしてたのだが家に帰る途中で明日東北大学の模擬があるのだった。その事を母や姉にすでに話してしまったのでそれをさぼることが出来なくなってしまった。母に相談したが良い答は母の口から出なかった。俺のいやなのは模擬があるのにそれをさぼって遊びに行った事が父に知れたら、めんどろな事に発展してしまうからなのだ。父はそのようなことは非常にきらいな者だから。しかし俺は考えこんだ。

今俺は17才 来年には高校も終え、もしかし

たら大学にも行けるかもしれない。たった後七ヶ月位で束縛と自由とが表裏を裏返すのだ、人間というものはおかしいな考えを持つものだ、卒業すると自由、卒業の一日前には束縛にながらわれている。何とおかしい現代の矛盾なんだろう。

俺には父の真直ぐな性質とこの矛盾を理解し難い、ところでコンサートのことだが、それは二日間分あるので明日の午後行くことを電話で連絡した。

稿 遺

夏山合宿（7月23～27日）

1年3組20席 寺林 明君

7月23日 東京—静岡—畑薙第一ダム—ヤレヤレ峠—沢の出合

正午畑薙第一ダム着。昼食をすませて午後1時出発。平地なので速く歩く。そのせいか右足のくるぶしが当たって痛む。30キロの荷をしょっていると、こんな所でも苦しい。畑薙大吊橋は、長さ二百メートル程も有り、一度に3人以上は渡れない。一寸見るとスリルが有って面白そうだが、いざ自分がのってみると、吊橋は大きく上下に揺れ、振り落されそう。思わず両側のロープにつかまる。こんな反面、五十メートル下の湖にダイビングしたら気持ちいいだろうと考える。ここを過ぎるといよいよ急な登りだ。こんな所を登って行くのかと驚ろいた。

明日はこんな登りばかり6時間も続くと聞かされて、もうダメだと思った。苦しい。何の因果でこんな苦しい思いをしなければならないの

か。来年は何か口実をつくって合宿は休んでやれと思った。ほとんど荷物を持たないハイカーが通ると、うらやましくて見てられない。こんな希望のないことばかりじゃしょうがない。吊橋から1時間程苦しい思いをして、やっと大きな沢に出た。

7月24日 一ウソッコ沢出合一横窪沢小屋一
茶臼小屋

午前3時起床。夜中暑くてほとんど眠れなかった。外は真暗空には星がピッシリ。東京では薄暗い星がパラパラと有るだけだがこの2日間ほとんど眠っていないし、今日は全行程中一番キビシイ。気がめ入る。星が明かるくじっと輝いているのが無情に感じる。

そんな苦しさに比べたら勉強なんか楽なものだ。帰ったらみっちり勉強しようなどと考えながらも、飯をたく。かまどを1つ任されたが、どうすればよいのか何も分らない。どうにか飯が出来た時は嬉しかった。荷物がゴチャゴチャしてしまって、整理に手間どった。こんな状態で、これから一週間生活していけるのか心配になった。

出発午前6時。茶臼小屋まで標高差1500メートルを7時間かけて登る。たとえどんな所でも、最初から最後まで苦しいのが山登りだ。この日も例外でなかった。1時間ほどして僕は苦しさに耐えきれなくなって、時々止まってしまう。

皆、「ガンバレ。」などと励ましてくれるが全然効果はない。女子にも、「ガンバッテヨ」。などと言われる。普段の僕なら恥かしく思うだろうが、そんな余裕は無かった。木や岩などつかまる物が有れば手の力をも利用する。急な登りは四つん這いになった。ただ前について行こうと頑張った。ウソッコ沢出合を過ぎる頃から

女子もバテてきた。僕は自分のことに一生懸命で、そんなことで気持は楽にはならなかった。僕にはこんな状態で茶臼小屋まで行き着くことは不可能に思えた。僕にとって、茶臼小屋へ行き着くことは時間の問題よりも苦しき問題であった。この時ほどアルプスの山々がとてつもなく大きく思えたことはない。

歩いている時、いろいろな事を考える。「冷たいジュースをゴクンゴクンと飽きる程飲みたいなア。家に帰ったら直ぐ飲んでやるぞ。」

「早く荷物を降ろしたい。」主にこの2つのことばかり考えた。だが、僕はこんなことを考えることが現在の自分の苦しさをより大きくしていることに気が付いた。それからは、何も考えないように努めた。結果は、この時は何も感じなかったが、今考えてみるとそれからは前程バテなくなったようだ。

午前10時。ザーという沢の音が近くなる。しばらく行くと小屋が見えた。横窪沢小屋だ。この時程嬉しかったことは無い。苦しい時に僕の一番欲しいものは、水と休息である。ここで昼食だから、十分休むことが出来る。また、沢のザーという水の音を聞くだけで、涼しくなる。心の中が急にパッと明かるくなり、体が軽くなる。横窪沢小屋に着くと直ぐ沢の水を飲む。行動中なので、あまり沢山飲めないのが残念だ。また、この水で顔を洗うと冷たくてとても気持が良く、気持がシャンとする。昼食は、飯に小さな干物が付いているだけだ。干物を口にパクッと入れると、もうおかずはない。仕方ないから水を注いで、すする。かんでいると甘くなってそうまずくはない。ここで山を降りる人達に会った。とてもうらやましい。

「僕達はまだこれから一週間もあると思うと気がめ入る。「ここにテントを張って一日ゆっくり

りしたい。」と考えると直ぐ出発。現実にはキビシイ。茶臼小屋まではあと3時間。また苦しい登りが始まる。女子はバテてきた。三十分程すると、とうとうそのうちの一人が泣き出してしまった。僕も一緒に泣きたい気持だ。仕方ないので、女子と先生、森田さん(O.B.)、平田さんらを残して僕達は先に行くことになった。そこで、僕は先頭にされた。

最初僕は、「出来ないから」と言って断わったが、やはり先頭になった。先頭というのは自分のペースで歩けるので、一番楽ということになっている。僕は異常なほどゆっくり登って行った。僕は楽になったが、ペースはそうとう落ちたようだ。今井さんがすぐ後にいて、いろいろ教えてくれる。「歩幅をもっと狭くして規則正しく。」「ゆっくりでいいから。」

「手は使わないで。」僕はなるべくその通りにした。確かに大分楽になった。だんだん希望が沸いてきて「やってやろう。」という気が起こってきた。10分の休み時間には、まず今井さんの「一本」と言う声が掛かる。皆ザワザワしながら道の斜面の方にドサッと荷物を降ろす。そしてその上にドカッと腰を降ろす。

今までの肩の重みがスーツと消える。この時程気持の良い時はない。それから肩や腰を回す。僕はこの休みに必ず水筒のキャップ半分の水をチビリチビリと飲む。今まで水がこんなおいしいものとは分らなかった。僕は睡眠不足のせいか休みとなると眠たくてたまらない。先輩に「眠るな」と言われる。

一生懸命こらえているのだが、まぶたが閉じて頭が前にコックリと倒れる。すると直ぐにハッと目がさめ、またまぶたが閉じてくる。10分は直ぐ過ぎてしまう。出発したばかりの頃が一番苦しい。

半分位経つともう少し頑張ろうという気が起こる。終り頃になると気力もなくなって「休みまだかな」などと考えるようになる。茶臼小屋が見えたのは二時頃、嬉しいというよりもホッとした感じであった。小屋の回りは、一面お花畑、黄色い花が咲きみだれ、春の野に居るようだ。小さな小川を流れる水は氷の様に冷い。水をがぶ飲みしてとうとう着いたという気分を味わっていた。

すると、ここでテントを張るのではなくて、もう一寸先の稜線に張るのだそうだ。またここまで登らねばならない。荷物をしょった。足はまだ動くのだが、もう気力が全然ない。「ダメだ」と思ってお花畑の中にドカッと倒れた。

「歩け」と言われて、また登って行ったが10メートルも行かないうちに「もうダメだ」と思ってまたドカッと倒れてしまった。「歩け」と言われたが僕にはそんな気力はない。ずっと倒れたままでいた。皆先に行ってしまって、僕と榎間さんが残った。榎間さんは医療係だ。僕に気付薬としてウィスキーをくれた。ヤケになってグイッと飲んだら元気が出てきたようだ。

それで、どうにか稜線までたどり着けた。稜線のあたりは、はい松が一面に繁って、高山という感じがする。稜線では浅野さん(O.B.)が昼寝をしていた。そこへ出ると、強い風が吹いている。僕達も寝ころがったが、寒くて目がさえてしまう。四、五十分経つと女子のキャップ話す声が聞こえてきた。テントはここに張ることになった。

7月25日 茶臼岳往復—上河内岳往復—聖平

午前4時起床。昨夜はひさしぶりによく眠れた。テントから顔を出すと、東の方に青い富士がすぐ近くに見える。テントから出ると、強い

冷い風に身を震わせる。さっそくセーターを着込む。から身で上河内岳往復。速く歩くので、また右足のくるぶしが痛くなる。茶臼岳山頂には直ぐ着いてしまう。景色なんかには感激しなかった。ほんの散歩といったところだった。

荷物は相変わらず重い。今日の行程は下りがほとんどで、短かく楽だ。苦しいことは昨日と変わらない。だが今日は気力十分。お花畑を過ぎて行くところごろした岩ばかりだ。その先に巨大な上河内岳がそびえ立つ。誰かが、「やっぱり奥多摩の山とは違うな。」と言った。僕も「やっぱりアルプスだ」ということをつくづく感じた。

ちょうど正午に聖平に着く。例によって水をガブ飲みした。昼食にソーダラップが出た。おいしかったので二杯もらった。野口さん(1年女)がソーダラップを大分残したのでそれをいただいた。昼食後やかんを見たら、まだソーダラップは一杯分残っていたのでそれもいただいた。こう水分をとれば、尿が沢山出るはずであるが、ほとんど出ない。体の水分は汗となって出てしまって、僕は干物の様になってしまったのか。中村が、「明日の聖岳の登りは大変だな。ここから標高差七百メートルもある。百間洞までも長いな。」と言った。僕は「僕は次の日のことは何も考えないことにしているんだ。その日暮しだよ。今日はもう歩き終ったからもう天国だよ。明日は明日。」と返事した。

7月26日 予定 聖平—聖岳—兎岳—大沢岳
—百間洞

変更 聖平—聖岳往復—西沢渡

午前四時起床。今日から女子と行動は別。今までは女子と交替にバテたからよけれど、今日からバテるのは僕だけだ。気が重い。今日

から団体装備の割り当てが変わった。荷物をしょってみるといやに軽い。20キロ位しかない。軽過ぎると言おうと思ったが、何か増やされるかもしれないのでやめた。後で分ったことだが中村の荷物は僕位だった。20キロという女子と同じ重さだ。しょっていても肩が全然痛まないし、手もしびれない。たかがこんなことで嬉しかった。出発すると直ぐに倒木帯だ。

倒れた木の下を遣ったり、またいだりする。皆のいやがる所だ。僕にとってこういう所はペースが落ちるので楽だ。しかし風が吹かないので暑い。稜線に出ると急に風がフーと吹いてとても涼しい。上を見上げると聖岳の全ぼうが見える。大変な山だ。中腹あたりに、先に登って行った女子達が手を振っているのがやっと見える。ここでは岩とはい松だけだ。右側はがけくずれして切立った岩壁が落ち込んでいる。

一寸でも足をすべらしたら大変だ。休み時間には、あとどれ位で山頂に着くか計算をする。「よし、あと一時間だな。頑張ろう。」この休みから僕はだんだんバテてきた。前の人と間が開いてしまったり、止まってしまったり。僕は、ただ前に付いて行こうと懸命に足を前後させた。だが足下の石ころはガラガラくずれてしまって能率が悪い。

呼吸はハアハアして苦しい。その時ふと、自分で一步一步しっかり足場を作って登って行くとそれほど苦しくないことに気が付いた、それからはなんとか皆にくっついて行くことが出来た。頂上では、山を征服した喜びも感激も無い。ただフーッと息をつくだけだ。

合宿その後

上河内沢で朝の食当の時、「この苦しさに比べたら勉強なんか楽なもんだ」と思っていた

が、家に帰ると、思う様になかなか出来ない。山の苦しみは人からその中に飛び込まされた様なものだが、勉強は山登りに比べたら楽でも、自分からその中に飛び込まねばならない。僕は、自分からその中に飛び込む勇気と忍耐力（根性）がない。やはり僕は努力で一步一步前進するより外仕方がない。

僕は茶臼岳の登りで、「なぜこんな苦しんで山に登らねばならないのか。もっと楽しみながら登って行けばいいじゃないか。」と思った。

しかし、今考えると山登りのよさというものは、偉大なものに取り組んでいる時の苦しみだ。今まで僕は、こんなに苦しんだことは無い。それだけに、この苦しみが尊いもののような気がする。

無神経になればなったで一から十まで無神経にならねば気がすまないのが私の性格である。であるから必要な時には神経質に、また不必要な時には無神経になるということができない。

また私は、自分自身のはっきりした個性というものを持っていない。また仮に持っているとしても非常に弱いものである。ゆえに人と衝突したりすることはなくとも、自分が何かを建設していくということがない。また他人の癖が直ぐ自分に移ってしまうことが多い。

（例えば私とクラブを同じくする中村和男君。

同君はうれしいことやびっくりすと、人のする2～3倍の奇声を発する。それが最近私に移ってしまった。）また私は理想主義者であるけれども自分に理想を宿す個性がないため、結果として人と同じことしかできない。

9組 22席

寺 林 明

何を隠そう、私は二重性格者である。ある時はふさぎ込み引っ込みじあんになり、ある時ははしゃぎまわる。対人関係においてもそうである。初対面の人には恥かしがり屋であるが長い間付き合った者には必要以上に図々しくなる。

また以前は何事をするにしても一から十までそろえて端から端まできちんとやらなければ気がすまなかった（数学の奥山先生のように）つまり非常に神経質な面があった。ところが都立国立高校山岳部に入って、山に行く様になってから山での不潔な生活に慣れ（例えばキジの後手を洗わない、中学の頃は手を洗わなければ気がすまなかった）それまでの神経質な性質がガラガラくずれて以前とは反対に無神経になった。

追悼文集

P 048 : 欠

追悼文

高木 文郎 (父)

雅一、父にはどうしても君がこの世には居ないのだと思うことが困難で桐生で学生生活を楽んでいるのではないかと錯覚されます。

母も妹も同じことです。しかし5月3日の夕方、学友の手よりベースキャンプに運ばれた君との対面を思い浮べるとき、君の死はまぎれない事実でどうしようもありません。この夢見る想いは一生私の心に続くことでしょう。

君はいつから山が好きになったのだろうか。房総の地には山らしい山はなく、海拔300米の鹿野山が君が育った母の実家より望まれたためだろうか。小さい従姉たちを従へて鹿野山へ行こうとして家人に叱られたのは小学生二年生位だったろうか。受験勉強にあきたとき、群大より帰省したとき、よくご挨拶と称して行ったそうだね。君が群大工学部へ進むと言ったとき私の兄達が果せなかった学業をついでくれることを希望していた私には不満であり、小さいときよりそれを知っていた君には勇気のいることだったと思います。

山があると云うことが君をはじめ父にそむかせたのだろうか。しかし生活面での我儘を許さない方針には不満もあったろうが理解してくれたことを、又父の我儘を許してくれたことを、更めて感謝せずにはられません。

祖母が丈夫だった幼稚園の頃、バスの無賃乗車を得意として、或日とうとう夕方になっても帰らず、警察の厄介になり、迎へに行ったらリング片手に話しに興じていたっけ。又雹の混じる雷雨のなかで泣きもせず木陰で雨やどりするその頃の君を送ってくれた老人は健在で、君の死を悲しんでくれました。祖母が死んでより次第

に無口になっていったのですが、小学時代学習の一助に書かせた日記を播くとき君の素直さがあふれ、昨日のここのように思い出されます。

高校を終へて群大へ入った君は次第に変わってきました。父の私には細いことは言はないが、母にはよく話しかけたらしいね。でも心配をかけないためか合宿以外の山岳行は話題にしなかったようですね。今私の心苦しいのは山岳行の楽しみを知ろうとしなかったことの後悔の思いです。しかし君が自分の意志で群大を選び、学問の一端をのぞきWV部の先輩同輩によって山への愛情を深め、最後にはWV部山岳部の方々の友情により父母の地へ帰れたことを親子共に幸福とせねばならぬと思います。

以上

追悼文

高木 郁乃 (母)

雅一が生れたのは、昨日のようです。親に似ず小さく元気な子でした。父親の顔を覚えられないうちに主人の長い療養生活でした。

丸々太って、大きな目、長い腿、そんな雅一は、私には、なくてはならない心の支えでした。父親がいなくてもスクスク育ってくれました。小学生の頃は全校生徒会の副会長をさせて頂き、世の中は自分の為にあるように元気でした。皆様から高木の坊や坊やと大変可愛がって頂きました。その頃同じ年の従姉の影響を受けたのか、ピアノに興味を持ちよく小さい手で、バイエル、ソナチネ、等を弾きこなしてくれました。中学生になっても小さく、靴が歩いているようでした。従姉や妹達とばかり遊んでいた雅一はだんだん女の子のようになり花を好むようとなりました。遠く京都から種を取寄せ四季

を通して、庭一面花を咲かせてくれました。
高校大学入試と、私ですらじっとしていられなくなりましたが、本人は花いじりはやめず、のんきで、来年は、赤と白の縞の、アマリリスを咲かせるんだとか言って居りました。咲いた花を見る度「花の命は短く儚くて哀れだ」とその頃良く言って居りました。特に百合の花が大好きで「お母ちゃんが白百合のようだったら僕は、最高に幸福なんだがな」と皮肉も忘れずに語って居りました。

勉強不足の為失敗、一浪の末、群大に入学出来て大喜びでした。初めての下宿生活は、赤城、榛名、の山々に囲まれ、又親切な御友達に恵まれ、楽しい便りがつき一安心致しました。昨年の夏合宿の様子など、一晩一晩を語り最後の日に、岩魚を手で捕へフライにしたとか、若者ならではの楽しみのようなものでした。

今年も元気であったら出掛けるであろうと、思うと胸が痛く、仏前に、ザック、寝袋等供へ、五万分の地図とやらに、私なりに、コースを書き込んだりして居ります。山を愛し、花を愛し、音楽を愛した子が、自然にうちのめされ、ただただ泣けるばかりです。やがて来る夏休みの頃には、雅一の植えた真赤な、ポンポンダリアが咲くでしょう。

追悼文

高木久仁子

私は兄の部室に入るのが好きでした。しかし兄は勉強しているので用事がある時しか入れません。入ったとしても静かに歩かなければいけないと思って歩いていると兄が、「久仁子は、静かに歩いても、ふとっているから地震みたいだ。」

と言って地震で体が揺れている動作をした。
おもしろい兄。

兄といっしょに遠乗りにも出かけた。兄といっしょに、自転車を並べて風を切って走るのは、すがすがしく気持のよいものだ。

父が、胃かいようで入院した時、とても心配し、夜私に

「久仁子、朝早く起きろよ。かにを採りに行くんだから。」

と言った。私はなんでかわからなかったが、ついて行った。しかし、かにはひとつも採れず、小さな魚ばかり採れてしまった、兄は

「このまえ来た時は、たくさん採れたのに今日は久仁子がいるから、ひとつも採れないや。」

と言って私のせいになりました。家に帰ってくると母に

「お父ちゃんの所へかにを持って行ってもらおうとしたんだけど、誰かさんがいたから採れなかったよ。」

と言った。かには父の所へ持って行こうとしたのだ。又、私と姉に

「お母ちゃんに、しじみ持って行ってもらうんだから、採ってこいよ。」

と、よく言いました。

今考えてみると兄は、いじわるだったけど、とてもやさしい兄でした。

我が子を憶ぶ

(岩上正父)

岩上 清治

「岩上君その後病気ようだいは、いかがですか。長い間休んで机もいすも、さみしそうです。クラスの人達はみんな元気で学校にきています。それから勉強のことをおつたえします。」

算数は……国語は……理科は……社会は……
ところをやっています。かんたんですが、この
様におつたえします。それから岩上君副委員長
になりました。みんなまっています。勉強したり、
クラスのためにも早く体をなおして来て下
さい。さようなら。

5月5日 吉水小 6年1組 A子
岩上 正君

こんな手紙がつい最近正の書類を整理して居
りましたら30数通でてまへりました。これは彼
が小学校6年生の1学期の頃クラスの皆さんか
ら送れた病氣見舞の手紙でした。

5年生の3学期より^{ジンゾウ}臓腎炎で自宅療養中の身
でした。やゝともすると慢性になり勝ちなこの
病氣に私達も大変心配して医師の意見の通り学
校を休ませて専ら早期治療に努力しました。そ
の間に扁桃腺の手術もしたり、いろいろやった
結果快方に向ったので2ヶ月程して学校に通
い、そのかわら医師の治療を受けて居りまし
たが、なかなか元気がよくならないで夏休みに入
るのを待って東大病院にて精密検査を受けまし
た。

その結果は病氣はすでにほとんど快癒して居る
と云われ。私はほっとしました。それを傍で聞
いて居た本人も安心してそれ以来変わった様に元
氣を取戻しました。しかしこの約半年間の病氣
生活で彼は学業に対する意慾を失った様子でし
た。

私も前年(37年)3女を病氣で亡して居るの
で、学業よりも先づ健康第一と勉強も強要しま
せませんでした。唯健康に育ってくればいいとそれ
だけを願っていました。それでもまああの成績
で小学校を卒業して中学校に進学しました。
中学1年生の通知簿の通知欄に担任の先生の意
見がこんな風に書いてありました。「氣力に欠

ける感じがします。勉強も積極的にやる必要が
あると思います……」これを見ても当時の彼の
態度がうかがえます。こうした彼の消極的な態
度、根気のない態度を私もいたく心配し、心身
の発達に最も大切な中学生の時代に強い体力と
健全な精神の持ち主になって貰うためにはどう
したらよいだろうか、それはスポーツ以外には
ないと思ひスポーツに打ち込ませる様努力した
が、彼はさっぱり乗ってくれなかった。

剣道部に入ったからよかった、みっちりやら
せようと思へばこれもすぐやめて駄目、なにか
好きなスポーツをやれと云ってもさっぱりだっ
た。そこでサイクリングでもと思ひ当時では未
だ珍しい8段変速機付のツアー(自転車)を与
へてやった。これは彼の好みのあった感じでよ
く日曜日なんかには1人でサイクリングに出掛
けて行った。そして今日は〇〇まで行って来た
とか、今日は〇〇まで行って苦しかったとか結
構楽しそうだった。そのうちに自分の健康に自
信もつき、すこしでもやろうかなと云う積極性
が除々にではあるが生活態度に現われて来た。
学業成績も1年1学期を底にして尻上りに見違
へる程に良くなって来ました。2年2学期の通
知簿の通信欄には担任先生の意見には「積極的
になり学問も向上しました。3学期も油断する
ことなく頑張ってください」と書いてあったの
を見てもその様子がうかがえます。こうして彼が
3年生になった時、私が同校のPTA会長に選
任されました。もともと内気でおとなしい彼の
ことだからこれをどう考えたかと私が時々「父
がPTA会長になっていやだか？」と質問して
見ることがあったが、彼は「別に……」と言葉
少なに話すのだった。そんなことが、私も学校
に行くことも多かったので学校に於ける彼の行
動もよく分って居たが次第に積極性を取戻して

来たことは事実だった。そして2年より3年と学業も向上しやがて中学校を卒業した。

そしてなんなく佐野高等学校普通科に進みこれから大学進学之道を選んだ訳でした。高校に入ってから体も大変健康になって来ました。勉強もどうやらやる様になってまいりました。勉強にあきると庭へ出てバットを持ち出し石ころをノックして居る姿をよく見うけました。

又或る時は室の中でギターを一生懸命ひいて居ました。自動車にも大変興味を持ち、高校1年生の時軽四輪の免許証を取り車に乗ってはドライブに出かけて行きました。しかし運転には非常に慎重で、安全運転そのものだった。彼の運転には私も安心して同乗出来た位でした。こうした彼の慎重さを私は信頼して居ました。

やがて高校も卒業となり、直ちに群馬大学工学部に見事パスした。その時彼はさほどうれしそうではなかったが、私はうれしかった。よくやると心の中でつぶやいた。いつもベストをつくして勉強して居ると思えない彼が合格したのだ。群大の入試の前日テレビの前で親の心配も知らぬ顔でチャッカー、サッカーの試合を一時間余見入って居たので、さすがにあきれて叱ったことがあった位だったから。

そして群大に進学、前橋に下宿、彼は始めて親のもとを離れました。そして月に1・2度は帰って来ました。そして或る日、自分はワングル部に入ったと云った。私は彼が良くそんなスポーツ部に入ったなあ顔を見る様でした。中学時代からなにかスポーツをと再三すすめたのに、それに乗らなかった彼が、良くそんな気になったなあ感心した。でも山は危険だからと云うと夏山だから大丈夫とのことで私も賛成した。私が彼に求めて居たものは健康と根性と感激だった。やゝともすると女子3人の後に出生

した1人の男子と云うことで知らず知らずの間にあまやかして居たのでないか、彼が案外ひよわい体の持ち主であったため、そう育ててしまったのかと思って居たから、夏山訓練で彼に健康と根性と、感激性を求めました。私は其の後彼から夏合宿のつらかったこと、また他のパーティと合流した時のうれしかったこと等を聞いて心ひそかによろこびました。

こうしたことから私の求めて居る彼の姿が見出せるのだと思った。しかしやがて山岳部に入り夏山に満足せず冬山にいとむ様になった。しかし私は過信だったかも知れないが彼の慎重さを信頼して居たから危険とは知りながら無理に止めさせようとしなかった。

そして彼のこうした山行の中に見違がへる程健康になった身体、よくなった顔色、生き生きとした男らしさを心ひそかに悦んでいました。

あのひよわかった子が、運動の好まなかった子がよくこれまで成長したかと内心うれしかった。しかしそれも束の間自然は残虐だった。彼は自然の力の前にひとたまりもなく敗れた。自然の前には余りにもはかない人の命であった。

私はこの事実に直面してぼう然となった。心の支柱は一瞬にして失われた。私は今更の様に山に無知だった自分を責めた。しかしそれは後のまつりだった。彼の慎重さを余りにも信じすぎて居たのだろうか、私は悩み、そして苦んだ。しかし彼等は熱心に山に関する書物を読み、先輩に学び更に短いながらの経験とで冬山の恐しさも充分知りほんとうに慎重をきして計画された山行だったと思う。だが暖冬異変とまでいわれた今年の冬の気温は果して彼等の計算に入って居たのだったろうか…。

・自分達だけはきっと無事にかえれると確信を持って行ったあの姿、しかし不運が彼等を待ち

うけていたと思うより仕方がない。彼は冬山に若い生命力のすべてをかけてしまったのだ。なんと悲しい現実でしょう。しかし唯彼等の遭難、彼等の死をただ不運だったの一言に片付けて良いものでしょうか、このきびしい現実をよく見つめ、お互によく反省して更に今後一人の遭難者も出ない様冬山の研究の余地が残されて居るのではないのでしょうか。

前途ある若者の生命を失うことのない様な万全の対策と彼等の遭難が良い教訓になってくれればこそ彼等の霊も慰められるのではないのでしょうか…。終りに今回の遭難に対する救援活動に付いては学校当局は勿論、群大山岳部、ワンゲル部の現役並に先輩OBの方々の親身も及ばぬ御努力と我が身の危険をもかえりみず御活躍下さいましたことを心より厚く御礼申し上げますと共に皆様方の今後の御健勝をお祈りいたします。

亡き弟に

川久保紀久子（姉）

あれからもう半年にもなろうとしている。あなたの危急を知らされたのは、2月の土曜日の午後だった。母からの電話で、「正が大変なことになりそうなんだよ」そう告げられたのだった。そんなことはない、そんなはずはない、私の声はうわずっていた。どこかで遭難したにしても、きっと帰ってくる、そう何度もくり返しながら、私の内には、一瞬にして、いい知れぬ不安が広がり、まったく困惑していた。

そう、そしてあの日から、まもなく半年が過ぎ去ろうとしている。そしてあなたは、とうとう帰ってこなかった。はにかんだような笑顔を見せてくれなくなった。まわりのものすべて

が、なんて空々しく、寒々と思えたことだろう。そしてその日からあなたの学友や親戚の方たちが、血なまこになって、あなた方の足跡を追ったのです。くる日もくる日も、あなた方の発見のために、何と多くの誠意ある捜索が続いたことでしょう。そしてついに5月3日午後1時、あなたの学友が、深い雪の中から、あなたの遺体を探しだしてくれたのです。

わかりますか正、あなたの岳友たちは、自分の危険もかえりみず、必死に探してくれたのです。今まであなたさえ知らなかったかも知れない、真の友情の雫が、あなたのなきがらの上に、いくすじにも重なって号泣したことを。

私があなたに対面できたのは、もうあなたが棺の中に安らかに眠っていました。あなたのために、谷川の野花が、飾られ、あなたの遺体には、もう線香の香がありました。谷川の夜更けでした。山のざわめきが、おそろしく、響いていました。このような夜を、あなたは、あの冷たい雪の中で、2月有余送らなければならなかったなんて…どんなにか淋しく思われます。それにじっと耐えていたあなた、あなたの屍は、冷たかった。あなたは、安らかに眠っている人のようにだった。そしてもう、何も答えてはくれなかった。

弟は、あなたは、あまり多くを話さなかった。どちらかという、無口で、気むずかし屋だった。中学生のころ、よく私と、テレビのことでケンカをしたのを、思い出します。「食事をしながらテレビをみてはいけないのよ」そういう私に、あなたはよく反発しましたね。4人兄弟の末っ子で、3人姉妹の中の1人男だったから、家の中でも、わりと、大切に育てられました。そんな環境の中で、自然あなたは、わがままに育ってしまったようです。

英語が得意で、よく教科書を読んでいたのを覚えています。「英語だけは、誰にも負けたくないんだ」あなたは、そういっては、誇らしげに試験の答案を見せてくれましたね。小学校の高学年のときに、腎臓の具合が悪く学校も欠席がちだったせいもあるでしょう。中学で習いはじめた英語に意欲を燃やしていたようでした。

運動も何度もすすめても、あなたは、あまり関心を示しませんでした。バスケット部や剣道部に所属していたようでしたが、あまりあなたを満足させてはくれなかったようです。そして、受験という重荷を背負いながら、あなたは、ずい分志望校を考えましたね。夜更けまで、こたつを囲んで語り合ったこともありました。昭和45年4月あなたは、幸運にも、めざす群大の工学部に入学できたのです。

弟よ、そこにあなたの求めていた何かがあったのだろうか。まもなくワンゲルに、山岳部にすっかり魅了されていったのですね。あなたは、山のすばらしさに心を奪われ、特に冬山への限りない愛着を持っていたのですね。あなたにとって、いい修業になるかも知れない、そう両親も私もひそかに思っておりました。そのことについて多くは語らなかつたけれど、自分自身との戦いを山に賭けていたのではなかつたのだろうか。いつかあなたの部屋に「健康・努力・忍耐」と書いてあったのを思い出します。

自分自身の性格の欠点を補なおうと努力し、あるいはまた、そこに、生きるということへの探索があつたのではなかつたのだろうか。大学生になってからのあなたには、すばらしい友人に恵まれ、自分の青春の激情と、人生への思索を山に求めるようになってくれたことを、姉として、誇らしくさえ思っておりました。あなたが人生とは何か、如何に生くべきかと問い続け

ながら、人生を歩きはじめたときに、逝ってしまふなんて、誰に考えられたでしょう。

肩の小屋で蓬のヒュッテで、何を語りあつたのだろう。あの遭難の前日茂倉の頂上での写真の何と、嬉しそうな笑顔。思えば、不思議な運命のいたずらだった。あの時のあの笑顔の中に、どうして、なだれの中にのみこまれてしまうなどと考えられたらろうか。

あなたの内には、友情のすばらしさと、山の壮厳さがみなぎって、全身を浄め、そしてあの谷川岳の大きな息吹の中に、吸いこまれていってしまったのだった。

弟よ、私はあなたの死をむだにしたくない。あなたの写真の前で、私の幼い2人の兄妹は、静かに幼い手を合わせています。そしてあなたの笑顔はクキいちゃん、心配をかけてごめんよ。卓君や弘子ちゃんを大事にして、強く、たくましく育ててほしいな。クといっているようではない。あなたの山に捧げた命を、その心を生かして生きていきたい。あなたの人柄と、あなたの心は、いつまでもあなたを知る人々の間に生き続けているのだと信じたい。

二度とあなたの足で登ることはなくとも、あなたの魂は、あの谷川のみわたせる土合の墓標にやどり、四季折り折りの谷川をのぞみ、山を愛する人たちを守ってほしい。そして、今私たちも、あなたとの別離の悲しみから立ち上って、人生を強く、たくましく歩き続けることだと思ふのです。

弟よ、安らかに眠って下さい。

「まさか正が！」

平井恵美子（姉）
旧姓 岩上

私が弟に最後に会ったのは丁度遭難した2月13日の1週間前の2月6日、日曜日だった。その日は弟の正が実家の方で出産する私の為に荷物をとりに来てくれる事になっていた。

午後から雪が降り出し車で来る正が心配になり実家に電話をすると、すでに掛けたとの事、何事においてもとても慎重な正の事だから大丈夫とは思ったが、訪ねて来たのは大分遅かった。もう少し待って来なかったなら夕食を始めようと言っていると間もなく表に車の止まった音がしたので窓をあけてみると、やはり正だった。にっこり笑い「今晚は」と言って入ってきた。

その晩、山の話は出なかった。いずれ近く行く計画はあったとしても、10日の夜行で行くという事は決ってなかった様子だった。

もしあの時谷川岳へ行くことが決っていたら一言くらい言っただろうに。しかし山に行くという事を聞いたとしても、私は何と言えただろうか。ただ「気をつけてね」と山の知識の全くない私は、山の遭難など少しも考える事なく言ったに違いない。「魔の谷川」と言われ、それ程高くないのに危険であり遭難者が多く出ているのは知っていても、それは自分達とは全く別の事であって、私等の囲りには関係ない様に思っていたから。まして用心深い弟が遭難するとは思ってもありませんでした。

今でもまだ山から帰ってくる様な気がしてなりません。

正が来た次の日雪は積っているし、危いから一晩泊っていく様すすめたが、いつもならそう

しただろうに、その日に限って帰ると言う。

1月から始めたばかりの家庭教師が今日はあるからと言う。それでは強く引き止めるのも悪いと思い「正、気をつけてね。今度帰ったときはお世話になるけれどよろしくね」と言うと、了解という様に笑顔をして帰って行った。

あの時の「あの笑顔」が心のカメラに焼きつけられて忘れることができません。

そして12日の土曜日、実家に帰った時は山に出掛けた後でした。これまでも、よく私が行くと弟が出掛けて留守の事がたびたびあったので、「又」と思い別段気にもとめませんでした。

まさかこんな事が起きようとは夢にも……。

しかし、もう永遠に会うことがなくなった今、過ぎし日の正の姿が、私の目の前で走馬燈の様にちらつきます。今でも車の音を聞くと「正が」とつい思ってしまいます。

よく母や私の足となり用事があるとすぐ気軽に車に乗せて行ってくれた正……、

この出来事があってから、山の話や聞いた、写真を見たりして、とても「山」というものに引き付けられます。この3月に生れた子供が大きくなって機会があれば谷川岳に行ってみたいと思います。

寺林 金次

昭和4年8月初旬、友人3人と3泊4日の予定で黒部の宇奈月から白馬に登ったことがあります。黒部から立山へのコースも検討しましたが、その当時は難コースで専門家しか登らなかったようです。40何年も前のことなので断片的な記憶しか残っていません。

1日目は宇奈月から祖母谷迄行きました。今は軌道車が樺平まで行っていますが、其の頃は水力発電の工事用で人は乗せませんでした。軌道の上を歩きトンネルの中は電灯もなく、ヒヤヒヤしながら歩きました。

祖母谷には有人の小屋があり布団もあったように覚えています。温泉の湯元は非常に熱く卵など茹でて食べました。

2日目は急に山らしくなりフウフウいいながら清水小屋迄辿り着きました。人にも殆んど逢うこともなく唯、苦しかったことだけ覚えています。小屋は5坪程で中央に囲炉が切っていました。夜には冷えるので枯木を沢山集めて一晚中燃やし、囲炉のまわりにごろ寝をしました。

3日目は這松地帯に変わり、行けども行けども霧と這松ばかり、そのうち雪溪が現れ一面のお花畑に出ました。山頂を見あげると人の行列です。

信州方面からたくさんの方が登ったようです。その日のうちに又清水小屋迄下りました。

小屋には隣り町の中学生3・4人が先着していました。柔道の試合等で顔見知りの連中であつたので深更まで語りあいましたが非常に親近感にうたれたことを覚えています。

翌日は膝のガクガクするのも構わず一気に下山しました。

食糧は、米、味噌、玉葱、氷砂糖、片栗粉、いり粉「麦をいり粉にしたもので当時は非常食として用いました。」氷砂糖は雪の中に入れてしゃぶると美味しいと言われていました。その後時を隔てて明が中学2年の夏休みに、共に帰郷した折、立山に行きました。

郷里の富山では男は一度は立山に登るものとされています。バスが室堂迄行っているので歩

く事も少なく登山とはいえないものです。室堂に1泊翌朝明と弟の長男が山頂に行きました。その日は年に数回しかないという程の快晴で遠く富士も望まれた由、壮嚴な御来光を眺め深い感銘をうけた様子でした。

私は足が悪かったので小屋の附近でスケッチをしていました。雪溪での雲すべりも非常に楽しかったようです。ずっと使っていたカメラを購入したばかりの時にパチパチ撮っていましたがどうしたことか一枚もものになりませんでした。幼い頃から土に塗れての遊びを好んだ素朴な自然児でしたが、この立山行きで山への憧れを強め、高校山岳部入部のきっかけともなったことであろうと思います。

大学に入学してからたまに帰省しても山の疲れでごろごろ寝るのが仕事でした。たまに行くのが映画ぐらい。今までに充分話し合う機会もありませんでした。

長い長い間皆様にほんとうに温かい友情をもって、御捜索いただき、なんともお礼の申しようもありません。ただただ感謝の気持ちでいっぱいです。父として皆様の温かい友情の数々、そして人間として生きる道等いろいろの事を、この事件を通して体験させていただきました。老い先の短かい私ですが一生この感激は忘れる事はないでしょう。

住みにくい世の中ですが今の皆様の純心さをいつまでも大切にされん事を心からお祈り申し上げます。

寺林 ヤエ

明のお骨を持ち帰り或る日、お骨の箱の脇に置かれている遺体から外された時計を手にし、何気なくネジを捲いてみた。思いがけず時

計は生き還ってきたように時を刻み初めた。そしてネジさえ捲けば何時でも正確に時を刻み続ける。

全く何ということ……。大量生産の時計は事もなく淡々と生きていたというのに、コツコツと生きた明が、そして手塩にかけ尽くしてきた明が一瞬の雪崩の為に脆くも生を絶たれてしまうとは。

一体どのようにして息絶えていったのやら、それさえ判らない。瞬時に気を失ってしまったのだろうか、そうであればよい。それ共苦しみも夢現の中でどんな思いを馳せたことか。せめて顔や手足を丁寧に拭い清潔な衣服に更えてと、そんな願いすら叶わず霧雨に烟った湯沢で、焼けてガラガラになってしまった明にまみえることになろうとは……………

誠に断腸という言葉の思い知らされた苛酷な時の移りであった。そして明への思いもさること乍ら多くの方へおかけした大変な御迷惑、御労苦やら又万一の事故など想っては苛いなまれるような日々であり食事も喉から胃へ押し込む作業でしかなかった。

又岩上様、高木様では御遺体が発見されたというのに明が発見される迄はと、葬儀も延ばされ山行きにも行動を共にされて唯痛み入るばかりであった。

運命と思うのは何としても残念だが所詮はそういうことと思うより他ないのであろう。

お父さんは「仕方ない。運が悪かった、可哀そうに。」と言葉少く今迄も「本人が好きですることはしょうがない。」と言っていたが、それも又親の愛情であったろう。止めだてに躍起となっていた私はあれこれ未練がましく、矛盾した事やうらはらな思いが迸り湧いてきてしまう、併し現実はどう消し去ろう術もない。

この絶対の無常を確と心に刻み、虚脱の底から努めてゆく他ないのであろうか。それ共何とか屁理屈でもつけ誤魔化し、心を宥め賺し乍らこの思いから遠ざかってゆこうか。

いっそのこと明が好きだった山を自分の楽しみにすることができたら……。とそんなことも思う。登山という程のことはできなくても偉大な美しい山の息吹きに触れて豊かな自然の恵みをうけ、明の山への想いを幾らかでも感じとってみたい。

発見の1週間前土樽からジープに乗り、明も心弾ませて幾度か辿ったであろう山道を、何とも懐かしい思いであれば茂倉、あれは万太郎と確め乍ら黒金沢に着いた。そしてふっと引き入れられるように独りで新緑の小径に踏みこんでしまった。

この溪川の奥の雪の中に明が埋れていると思うと、せめて一歩でも近づきたくとんとん弾みがついたようにして行ってしまった。

小さな沢を二つ程渡り振り返ると、ゆったりと山がせり上がってきていた。ひと息ついていると追いかけてきたお父さんに黙ってきてしまったので叱られてしまった。

吾が子を捜しに行くことすらもできず、長い間家に閉じ籠っていた重苦しさに比べせめてものひとときであった。

何時か或る日……。ずっと心の何処かで燻り続けていたことが突然やってきてそして去って行った。

前橋へ行ってからは心配も倍増した。高校では冬山は条令で禁止され制約も多かったが大学山岳部ともなると手の届かぬような怖さを感じた。それに山好きの人間が山に囲まれ、独り活しの解放感と若さが危惧された。

山のことも知らぬ儘に記憶に残っていた松本

深志高の落雷遭難のことや、蛇笏賞となった切々の情溢れる吾が子への一連の追悼句、その遭難の顛末記事の切抜きを示し山の怖さを訴えた。

「こんな事なんて滅多にありはしない。余っ程運が悪いんだよ。こんな事迄心配していたら山だけでなく世の中何もできなくなってしまう。クルマの方が危いよ。」確かにそうも言えよう。生きている以上偶然の巡りあわせの重なりあいの上に運、不運となってくることも多いし、全くその辺のかねあいは言いようもなく難かしい。

そして確率の高さのこと等で言い交したが、無理なことも危険なこともしないからと自身は思いこんでしまっていたが、そこが盲点だと思う。盲点や誤算のない人はいないのに厳しく用捨のない自然が対象であったが故にと可哀そうになってくる。

山のことを除いたら赤ん坊からこれ迄実におとなしくのんびりとして、きかん坊な姉に比べて何とも楽な子だったの一語に尽きる。

無理な要求もされた覚えもなく怒ったり、悲しんだり、苦しむとか苛らつようなことも見られず、何だか仙人めいて不可解でもあったが生れつき感情の起伏が人より少なかったのであろう。それでも時には漫談家そこのけの巫山戯け方で笑わせることもあったし、好きなことをコツコツしている時は如何にも楽しみきっているようであった。

何事にもファイトを燃やすというような激しさは見えなかったが、ジワリジワリと浸透してゆくようなかたちであった。

身も心も私に委ねきっていた幼年時代は童話の世界に共に遊んだような微笑ましく楽しい数々の思い出に充ちている。それにふんわりした

金髪、色白で高山植物の花びらのように小さい口もと…。後年の明からは何としても想像つかぬ愛らしさであった。

小・中学生の頃は私の言うこと、私の喜びを至上のものとしてくれ、誠に低いところから弛みなく努め遅い歩み乍らも力を伸ばしていったことで張りあいのある楽しみな時であった。外でもおとなしく積極的に人に接する術も、誤解にもひとこと言う術も知らないような無口、無器用さであった。そんな明に天体を相手なら性にあいそうだし、危険もなく盛んにお膳立をし中学1・2年の頃迄は僕の将来はお空のこととか、無邪気な空の詩など作っていたのに小細工は通用しなかった。高校になると山岳部に入り、志望学部は思いもよらぬ医学部であった。

そしてぐんぐん大人っぽくなり前橋から帰ってきた折にも色々なことをお喋りしたが、無口な明へ強引に話しかけ返事を引っ張りだすようなかたちであった。

それでも私の愚知話にも兎も角も耳を傾けてくれる家中で唯1人の存在であったし、呑気そうに「何とかなるよ。」「普通でいいじゃあないか。」と何時も定って同じアドバイスを授けてくれた。仕事も一番頼み易く気軽にしてもくれた。又時として意表を衝いたような辛刺さでコテンコテンにされてしまうのだけれど終いには共に大笑いになる愉快さであった。

前橋ではお友達にレポートの文案を頼んだり、低料金で引越しの手伝いを頼んだりしたのを聞いて呆れる思いであったが以前「僕は初対面の人にはとても恥かしがり屋であるが、慣れるに従い必要以上に図々しくなる。」と書いてあった通りを発揮していたのであろうか。又私の知らないどんな面があったことだろう。前はお友達といえは或る限られた範囲であったの

に、山岳部、ワングル部の効用の故かお友達の多いのに驚いてしまった。

見るからに立派な確りした方、清々しく気持のよい方、明るく優しい方、おとなしそうな真面目な方、その上お嬢さん方からはシャットアウトと常々思いこんでいたのにお嬢さん方も……。

宝石箱をひっくり返したように燦めくばかりの多彩なお友達、何と勿体ないことをしたのであろう。このようなお友達を多く身近に勉強し、語りあい、山へ行き……、それはどんなに楽しく又成長の糧となったことであろうに。

せめてせめて、もう1、2年楽しませたかった。かけがえのない命を失くし今、紫陽花のたわわな花房の奥から青い空、白い雪の中で何処の山へか投げている眠差し……。

雪の中に埋れていたフィルムから撮し出された最後の姿に、何と大人っぽくなったものだと思う。もうこれで成長してくれない明あきとなってしまった。

これからは嘆き乍ら思い出を繰返し追うことより、素朴を好み自然を愛した明の心を生きてみることを希い、そしてお友達が示して下さった崇高な迄の純心な真を、これからの人生に生かせるよう努めたい、それが残された唯一の救いのように思われる。

雲こそ我が墓標と歌った若い方があったがそうだ、私は山をこそ3人の墓標としよう。そして谷川の峯々が真っ白な新雪に覆いつくされた時、まごうばかりの雪山を心に目に泛べ心を籠めて祈り捧げ祀ろう。

高木君へ

柏木 順子

久しぶりに雨が降っています。くちなしの花の香りがします。10年ひと昔といいますが、早いもので私が木更津から松戸へ来て10年、そして高木君とは、その間、数はさほど多くはないけれど、絶えることなく便りが往復していたわけですね。私達21年生きた者には、半分の年月にあたるのです、一緒のクラスだったのは、1学期間あったかどうかで、話した記憶は1回だけしか思い出せません。

会えるチャンスが何度もありながら、とうとう1度も会えず、声さえ聞けず私は写真を頂いていたので、その顔と手紙の高木君だけで10年間過ごしてきました。そして貴方は、私が写真1枚さえ送らなかったのも、手紙のみでしか知らなかったのですね。その手紙さえ、自分の書きたいことだけ書いて、気の向いた時に出すというわがまま、すれ違いばかりでした。

内容は、山の事、花の事、本の事、この3つが主であり、副であったと思います。近頃は、山の事が中心になってきましたが、私の方も慣れて、山の恐ろしさに慣れすぎてしまっていたようです。

でも、1月18日の手紙に「…同じクラブ内でも山が好きというタイプ、趣味の範囲で好きの2つのタイプがあり、ぼくは後者で…。と、私はこの言葉を信じ、ほっとしていました。私がまだ1度も見たことのない、桐生の町、又石打のスキーの事自然描写が、こんなにも美しく描き出されることに驚きをおぼえました。

私が、社会人のため、時間に余裕が無いのが残念だけれど、異なるからおもしろい事もありそうな気がするといつて、今まで私の都合で

会えなかったことも、何気なくかばってくれる
やさしい心づかいの人でした。10年にたった1
度さえも会えない運命でした。

最後に「3月の桃の節句に後期の試験が終
り、暇になるので手紙を下さい、たぶん家で
たいくつしているでしょうから」ここで終わ
りました。10年間おそらく、覚えている限り、手
紙をほしいなんて1度だっていかなかった高木
君、今、私はどこへ送ればいいのか、教えて下
さい。

さようなら

7月9日

悼 歌

井上 敏克

白き峰々よ
聞け
この若人の精敢さを
雪踏む靴音軋りを
荒れ狂う吹雪よ
おのが命のはかなきを
男たちに妬むのか。

乙女たちよ
知れ
このしなやかな体を
浄く、たをやかな心根を
憩ひの花のコマクサよ
お前たちは知っている
をとこたちの優しさを。

そびゆる神々よ
心あらば聴け
ちちはは しの
父母の偲ぶ泪を

仲間たちの悼み深きを
絶ゆるなき谷よ
水たむけ、守れかし
男たちのやすらぎを。

逝きし岩上君を悼む

昭和41年度
田沼東中卒業生一同及び担任

安藤 宏

紺碧の空にそそり立つ 谷川岳に君は征く
みくに
三国の山々目前に 遠く故郷の男体山
たどりつきしは肩の小屋
話はずきず夜ふけまで
(翌日晴天谷川岳踏破蓬沢ヒュッテ一泊)
黎明 とつ風 夢さめて 帰路は土樽蓬沢
勇躍 小屋をあとにしが 天候猫の目の如し
ふぶきて 歩み遅々として
さしかかりしは蓬沢

嗚呼！ 天命をだれぞ知る 突如なだれここ
におき 若い生命無念にも
恨みは深し蓬沢
嗚呼 痛恨の蓬沢

悲報に接した旧友はただ愕然と涙して
ひとつき
一月前の正月に同窓会のその席で
愉快に語りし その君と
とわ
永久の別れになろうとは
嗚呼 神ならぬ身ぞ だれぞ知る

学びし庭に今立てば 柔和な君の姿あり
困りし友と語り合い 学究のみちにいそし
みぬ
剣豪の君は微笑^{ほほえみ}て 昨日のごとく目に浮ぶ

高き理想（山）に情熱を燃やし続けた君なれば
旧友心に今強く やけつく如く刻まれし
天国の君よ安らかに
天国の君よ安らかに

遭難について思う事

大浦 勝

山での遭難、これは非常に重大な出来事である。山を愛する人にはいい奴が多い。そんな奴が山でその短い生涯を閉じて行く。非常に残念だ、家族の悲しみを思うと、又一人前になる所まで育てた父母の気持を思うと、罪深い事をしでかした、と言いたくなる。友人達、先輩や後輩、その他多くの人達の日夜につぐ努力を思うと、むなしい言葉だが、「一緒にやってみる。」と言いたくなる。

後の事まで配慮して遭難した人の話は聞いた事がない。要するに自分が遭難するつもりで山に入る人はまずいない。遭難した人の大部分は遭難なんて自分にはかかわりのない事であるとも思っていたのではなからうか。登山は危険を冒してまでも行うべきものではない。その危険は登山する人の中にあると言ってよい。それはその技術と判断力である。この判断力は登山技術に含まれるものであろう。

人間は大自然に打ち勝つ事は出来ない、いわんや〇〇を征服したと言う考えは思い上がりである。我々にはその中で、いかに順応して行けるか訓練するしか方法がない。たとえば急な所では重力にさからって行動を取るだけではなく、何が落ちて来るか分からない。へたをすれば自分が落っこちるかも知れない。登山者に出来るのは重力に耐えて行く事、上から落ちて来る物を選げるとか落ちて来るものがなさそうな所を

選ぶ事か、又落下しないように何らかの手段を講ずる事しかない。重力をなくしたり、落ちて来るものを念力のようなもので消したりする事は出来ない。変りやすい山の天気に対しても同じ事が言える。現在では気象の変化を予想する為の情報入手する事が可能であり、それに基づいて正確な判断をする事は専門家でも困難ではあるが、登山者が天気図を参考にして刻々と変わる現地での気象の変化を観察して、的確な判断を下す事は可能である。このような判断力は経験と努力によってつける事が出来るものである。冬山においては気象の変化に対して的確な判断で対応して行く事が特に重要である。

岩登りは危険であるから、又冬山は危険であるから登るな、と言うのではない。その危険はよく調べ、備えを怠らなければかなり避ける事が可能である。それでも危険が残るようならばすべからず断念すべきである。自然の猛威には現在の科学の力を持ってしても太刀打ち出来ないし、登山者は自分自身をその前にさらさなければならぬから。遭難してしまえばどんな言い分けもきかない。

今度の寺林、岩上、高木3君の遭難について考えてみると、結果論になるかもしれないが、登山カードを提出しなかった事、ラジオを携帯しなかった事、これらから判断して、その他遭難の原因については色々とあげる事が出来るであろうが、彼等の冬山の危険に対する考慮が足りなかった事は否定出来ないだろう。

ワンゲル部について一言ふれる。ワンゲル部では岩場とか冬山登山を全面的に禁止するものではないが、クラブとして登山そのものが目的ではないはずであるから、そのため狭義の技術の訓練は行なっていないし、又行なう必要もないと思う。したがって、必然的に対象する所が

制約されてやむをえないであろう。

おわりに、今度の遭難で御遺族の方々の悲しみを思うと、つくづく二度と遭難を起してはならないと感じた。3君のそれぞれの御両親の心を察すると、捜索に参加した現役。OBの諸氏もその事を深く心の奥底に仕舞い込んだことであろう。この悲しみを後輩にもいつまで語り継いで、今後遭難者を群馬大学から出さないようにしたいものだ。それが3君の死を無為にしないことになるのだ。

安全登山実行の クラブへ変身しよう。

今回発生した遭難の特徴を推察し、これらの特徴から安全登山のできるクラブ、登山者になるための体制改善の方法を考察し、今後の活動の一助になれば幸いです。

1. 雪崩 今回の原因は雪崩であったが全く予測が不可能だった原因は何だったのだろうか。ぼくは、下記2～5の事を実行していたならばもしかするとあのアクシデントは起こらなかったような気がする。
2. 厳冬期 厳冬期における行動は好天中をねらってやるべきであり、予備日も十分にとり、あせらずに行動すべきである。
3. 悪天中の行動本人の経験的判断、安全度の取り方によるものだから本人しだいであるが100メートル先が見えないような天候中の行動は、避けるべきだと思う。
4. 事前調査 冬期における山の特徴（冬山コース、雪崩の起きそうな場所、逃げ道、

天候、地形等）を把握するための調査、研究の実行。従って調査期間も必要であるから冬山登山計画書は、約1年位前には出来上がり、その目標に向かっての調査山行あるいは情報集取がなされ安全であることが確認されなければならない。そして調査結果により安全が確認されても冬期中の行動は慎重にしなければならない。

5. 天候調査 山行出発予定日の2・3日前から天気図を記入し天気の動きを把握して出発しよう。そして2日以上の上山には必ずラジオを持参し、天気図を記入しよう。さらに天気図だけでなく山行中も空の色、浮ぶ雲の形、風の流れなどに気をくばり天気図の関連から空模様を予想しながら行動をしよう。
6. 山行届 下山予定日になっても下山しなかった時あるいは遭難が発生したときの救助行動の判断基準になるものだから必ず提出すべきものである。いくら自信があるにせよ万が一の事を考慮し部員はクラブと登山口両方に提出すべきと思う。

今後二度とクラブから遭難が発生しないように充分安全登山について研究をしておく必要があるのではないのでしょうか。そしてクラブに『安全登山の実行』という言葉が永遠に伝えなければならないだろう。寺林、高木、岩上三君の死を無駄にしないためにも。

以上

1972. 7. 16 松田

夭折の彼らへ

近藤 寿

死者に語るべきどのような言葉を我々は持っているというのだろうか。

しかし堅い雪のうえに横たわる彼の姿から、思いすごしだろうか、未だ去りがたい青春が感じられた。彼らがあゝの谷に足を踏みこむまで、何を逡巡し何を決断したか、今となっては明らかだが、あのときあのように決定してはならなかった。山においてそれは自明の理であると体得するまで彼らは生きなければならなかった。生きている者のどんな想いも虚しく己れに還ってくる。それでもなお、呼びかけずにいられない肉親の哀しみを思う。

息を呑むような冬山の美しさ。そこに自らの躰で1本の線を引くにすぎない行為のなかに、人はどのようなよろこびを見出すのだろうか。

白い雲とコントラストをなす、くろい岩壁の乾いた岩の確かな手触り。リズムカルに高みを獲得するにすぎない行為のなかに、人はどのようなよろこびを見出すというのだろうか。霧にとざされ、雨にぬめる暗い日もあるというのに。

為すに値する何ごとも存在しない、というエゴイズムが行き着いたニヒリズムのなかに我々があるのなら、アルピニズムもまた一つの生き方であり得るだろう。

凍った岩角にもたれて、生をそぐような風雪の夜に耐えて苛酷な朝を迎え、また頂へ向って重たくのしかかる雪を岩の壁を克え、やがて陽光のなかで柔かい雪稜のうえに、共に立ちたかった。山への憧憬を共有し、共に闘った者たちのなかに生まれる信頼感が、ある幻想にす

ぎないにしても。

彼らも知っていたら。青空に広がる草原の小さな花達を。日差しに咲き、風にそよぐ精緻な彩りを。

木立を吹きわたる爽やかな風を。空を透して、黄ろい闊葉樹の木立から、落葉の積もる山道にきらめく零れ陽を。

山で死んではならない。しかしその言葉はまた、山がもつその可能性の逆説的な表現である、山は我々に多くのものを与え、そしてまた奪ってゆく。

紀行文(記録)

谷川岳一ノ倉沢

滝沢下部トラバースルート—上部本谷
(昭和46年10月16日)

46W 西口 一伸

土合の階段を登り駅の外へ一步出ると、星が今日一日の好天を予期する様に夜空をうずめていた。今回は谷川岳東面のクラシックルートである2つの滝沢(一ノ倉沢と幽ノ沢の各滝沢)の登攀が目的であり、今日は一ノ倉へ、明日は幽ノ沢へという計画である。友人のMと共にすぐに歩き始め、指導センターへ計画書を提出しマチガ沢の出合で山岳部の天幕を捜したが見つからず一ノ倉出合の避難小屋跡へ行くと見覚えのある天幕があった。声をかけるといびきが聞こえるだけで返事はなく、入口を開けると6人で白川夜舟である。とりあえず起こして、朝食を作りながら今日の登攀ルートとオーダを決める、その間Mはツェルトを張りめぐり込んで大いびきをたてている。僕とMは予定通り滝沢下

部トラバースルートより本谷登攀、それにTが加わり3人パーティ、あとは南稜に2名、ニルンゼに3名といったオーダである。

夜が明けきった頃8人で沢へ踏み入れると、もうそろそろ冬の訪れを待っているのだろうか沢の吹降しが肌に寒い。かなり遅い出発である。中央稜テールリッジ経由で南稜テラスへ着き、ここで南稜パーティ2人が残り、僕達6人は本谷バンドへとさらにトラバースし本谷の流れのそばで一ブクする。ニルンゼのパーティはここから登攀開始であるが。僕達は滝沢の取付へ向うべく本谷の右岸沿いに下降する、取付のガリーの下で各自セルフストを着け登攀用具を身につけ、アンザイレンせずザイルを背負ったままガリーを5~60m登りバンドに立つ。ここに確保用のハーケンを打ち、僕がトップ、Mがミッテル、Tがラストでアザイレンして取付く。

まず2m下降し第1バンドに立ち、バンド伝いに10m位トラバースするとバンドが切れ1m位下降して第2バンドに立つ。このバンドは外傾しており、おまけに濡れているので非常にきわどいバランスを強いられる。上部はオーバハング、バンドの下もオーバハングで本谷までストーンこと落ちており高度感抜群である。

第2バンドをトラバースしピッチを切るが、ラストは5m以上上にいるので、トラバースルートというより下降ルートという感じである。

(Ⅳ)セルフビレイをとりMに来るよう声をかけるが岩をまわり込んでいるのでコールが届かず、まだ順番待ちで南稜テラスで暇をもてあまして南稜パーティに取りついでもらう。

岩登りをしていると、よく経験する事だが、実際30m位しか離れていない者どうしが話が出ず、300m以上も離れた所にいる者との方が

声を通るといった面白い現象である。とりあえずMがトラバースし僕と一緒にいるが、テラスが狭いので、Tには僕があと1ピッチかせぐまで取付で待ってもらおうように南稜パーティに取りついでもらう。次のピッチは第2バンドより残置されている9mmザイルを頼りに下降し第3バンドに立ちトラバースして行きづまった所より上の洞穴目ざしてボロボロの重壁を登りピッチを切る。(Ⅳ)ここでTがまずMの所までトラバースし、そのあとMが洞穴まで来るが、ここも3人集まるには狭すぎるので、Tは動かず僕が次のピッチにかかる。洞穴の右壁をアブミのかけ替えで快適に登り再びトラバースするが途中より間違っって凹角を登ってしまい、下降できないのでそのままオーバハングを越し草付のテラスでピッチを切る。

(Ⅳ A₁) (とりあえずTがMの所まで登り、その後僕がMを確保して登ってもらい僕が間違った所よりさらにトラバースして大きなテラス(5人位立てる)に行ってもらい、TもMの所まで行ってもらい、Tが登っている間、僕はテラスにある残置ハーケンに加えもう1本ハーケンを打ってこの2本を支点としてシュリングをかけアップザイレンの用意をし、TがMのところへ着くとすぐにザイルを送ってもらって下降する。アブザイレンとは言えどカラビナを回収しながらの下降は非常に疲れる仕事である。

途中で支点にしていた残置ハーケンが抜け軽い衝撃が伝わりぎょっとする。もしもう一本のも抜けたらその先は目に見える。あとは一本のハーケンに全体重を託して慎重に振り子でトラバースして、登攀開始後始めて3人集まる。次のピッチはTにトップを代ってもらい。大柄なTがダイナミックに登り、続いてMがそして僕が登る。

このピッチはトラバース気味に登り、カンテをまわり込んで滝沢左岸の落口へ立つ。(ⅣA₁) 確保点はあまり安定していないのであと40m程ザイルをのぼし、Y字河原までコンティニューアスで傾斜の落ちた本流沿いに登り、アンザイレンを解いて小休止し、これからのルートを考える。Y字河原は昨年第1スラブを登った際通っているが、一ノ倉全体が展望出来、水もあってなかなか快適なところである。

ここからルートは右から滝沢本谷、マイナー、第1、第2、第3、ルンゼ状の各スラブがあり、僕達は予定通り本谷を登ることとし、一般的には小槍のコルより右稜をまいてF2を越すのだが、F2の正面が面白そうなのでそちらへ行く事にして出発する。正面からは行けそうにないので第1スラブとマイナースラブの間リッジを第2バンドあたりまで登り、ルンゼ状スラブを1P40mアンザイレンして直下のバンドへ着く。ここにはボルトがかなり打っており、取り付けずに下降して右稜よりまいた人が多いことを物語っている。とりあえず登れる限り登ろうと思い僕がトップで取り付く。全体的にはほぼ垂直で弱点を見つける為バンドを右へいっばいトラバースし、残置ハーケンを見つけるが、きいていなく、他に打つべくリスも見当らないので気休めにカラビナをセットしてザイルをかけ、そこから左上し外傾した細かいホールドを使用し、最後はやや傾斜の落ちたスラブをフリクションで無理やり登ると40mいっばいで落口へ出た。

下部のトラバースより数倍悪く感じたし、多分フリーの5級程度はあるだろう。休む間もなく、F3(40m)、F4(40m)があり3ピッチで広河原に出る。F2の終了点あたりで上方の広河原あたりに人影が見え、多分5ルンゼを登

ったパーティだろうと思ったのだが、すでに出発したあとで見あたらなかった。日のあるうちにとBルンゼを急いで登ったが、国境稜線へ出たときには夕闇がすでに日をとざしていた。三人でかわるがわる登攀成功の握手をし、オキとトマをまいて肩の広場へ着くと5人が待っていた。夜のとぼりがすっかり降りた西黒尾根を下降中、昼間の快よい疲労が睡魔を呼び、マチガ沢のせせらぎが聞える頃ついに堪え切れずツェルトをかぶり、とかげを決め込む。小1時間ぐっすり眠るとすっきりし、下降を続ける。マチガ出合よりMと別れ、一ノ倉出合のB.C.への道程は何故か非常に遠く感じた。ベースで祝杯をあげ遅くまで歌ってさわいだので、翌日は到底起きられず、夜行で来て幽ノ沢の岩壁を登ってきた2名を加え下山の途へついた。

(以上)

後記

文中Tは故寺林明君、Mは私の友人である松本秀則氏である。この記録は故寺林君ら3名の追悼号の為にまとめたものである。

太田 博

遭難が起ったあの時期は、クラブとして、部員として、一番気のぬけていた時期であった。4年生は卒業をひかえ、3年生は2年生に後をゆずり、後に続く2年生はいろいろ来年度の方針や計画を立ててはいたが、その実行には時が早かった。しかも、スト中ということで前にも増して焦点がぼやけていた。

真空地帯を通りぬけた白い悪魔は今までのワングルの道と共に生まれ、生き、育ったものと思われる。

私はワングルの4年間を顧みながら、クラブ

の事をちょっと考えてみたい。

工学部のワングルで最悪な事は4年生がだらしない事だ。執行部を退くと共にワングルの中心からはずれ、それまでやり、又、しようとした事を忘れ初める。4年生の皆さん、今年からワングルの指導的な立場にある現役として、それなりの考えと行動をしようではありませんか。追い出しコンパでもやってもらうまで精力的にかけずり回ってほしい。何もしないでクラブに顔を出すのはかえって悪いと思う。なぜなら、今まで一緒に山行をやって来て、3年生とは気心が知れ、その間に何んとなくいいかげんで、ナーナー主義の雰囲気立ちこめるからだ。一見、くったくの無い、親しみ深いクラブに見えるが、何か大きな穴が開くものだ。

3年生はというと、秋合宿以後毎年気がぬけるようだ。そして、この気のぬけが、今言った繰り返しの芽となる。3年生にもなれば、ある程度山に対する自分なりの考えもはっきりしはじめるだろうから、その実行に秋合宿以後の時間を有効に使えと思う。

2年生はですネ。前橋から桐生に来ると、ちゃんとした年間計画のレールがひかかれている不満はあるだろう。だからといってそれらの事に対してだまっているのではなく、一緒に考えよう。一番若い開拓者だから、一番新鮮な道を歩かなければならないのだから、いろいろな実力をつけよう。2年の時の一年を、一年一年後にくりこさないような心がまえが必要ではないか。俺など、まだ4年間のしりぬぐいもできていない。三君の冥福を祈る。

寺林君の思い出

医学部 杉田 憲一

寺林君との出会いはクラブのオリエンテーションの時であった。

「何かクラブへはいったか!」「まだです。」
「ワングルなんかどうかね?」

「……はいりません」「高校時代は何かやった?」「山岳部」見事に最初のアタックに失敗した、そこへ先輩の川辺さんが来て、オレと同じ高校だからと言う事で強引にひき入れてしまった。

それからの寺林君の事は学校がはなれていたせい、殆んど噂によるが、テキパキとやり、さすが山岳部出身だといわれていたようだ。体力もかなりあり、あの無口でギョロツとした表情からは想像もできなかった。

二人で山へ行った事は一度しかない、新潟の守門岳である。登りを俺がバテ、下りで彼がバテた……。

……やがて彼は山岳部にうつって独自の行動を開始するようになった。何事かに熱中すれば他の事には注意はまわらなくなり、当然つきあう人、即ち友達なども限られ、医進のクラスなどでも余りめだつような存ではなかったようで、そういう彼にとってワングルはその欲求不満に似たものを代償するにはものたりなかったのではなかろうかと思う。

また他方で、山岳部において岩に向えば向うだけ山のおもしろさ、美しさを知るにいたり、この2つの相乗作用と言うべきものによりますますうちこんでいったのだと思う……。

自らも感じる事であるが山に行くと、平地にいる以上に生きていくと言う実感を強く認識できる。めしを自分で作る、住むべきテントは自

らがたててそこにねる。雨よけの溝をほると言った形をもったものから、一塊の手がかりが生命をささえているといったものまですべてが生きているといった感じを認識させる。そこに充実感があるのだ……。

去年の十一月、寺林君も間もなく専門に行くという事で、学部に近い俺のアパートに越してきた。俺がさそった時は免許を取っているのですという事で少し遅れてきたために日当りの悪い室であった。

彼の室をのぞくと小さな本棚とコタツ、机があるみでがらんとしており。押し入れには山の道具がほおり込んであった。僕に気が付くと紅茶がいい？、コーヒーがいい？と聞いてすぐ入れてくれた。いつもラジオを聞きながら本を読んでいた。彼との話となると勉強、女性の事、山の事に終始していた。例をあげれば…、「朝が起きられなく学部の試験とおるかな？」

実際、夜十時になると殆んど電気は消え、一時間目の授業に出席する事は稀だった。実によく寝た。「杉田さん若いうちに結婚だけはしないほうが」いつも女性に影響されるとか、しばられるなんて…「アーいやだ、いやだ。」と言われ「若いうちにはいろいろ自由に遊んでそれから」とか言われ、ストリップ劇場、トルコ風呂、パーに行こうとしきりに言われた。金がかかると言って断ったが……山の事でも「冬山に行ってみない」とか「岩でもやってみようよ」などいろいろいわれた。寺林君は一步一步技術を身につけ確実に進んでいける人を見て「僕もあーなりたいがな」と言って、自分がそうできない所にあせりに似たものを感じていたようだった。そこにはなにか器用、不器用さが関係していたように思う。

彼は不器用だった。野球をいっしょにやって

それを感じた。スキーの時もいろいろ本を読んでいた。熱中するタイプであった事もたしかだ。ひっこして3日目ごろからいっしょに夕飯だけはかわりばんに作り始めた。こんな事は始めてのようで半月位はコロケ類が毎日のようにでた。それから最高にけっさくだったのは豆腐をひやヤッコで食べようとした時「生で食べられるのですか」と聞き、なかなか食べようとしなかった事である。その味をしめてからコロケに豆腐が加わった。

一ヶ月目ごろからいつも遅く俺がかえってくると食事の用意ができていてすぐ飯が食べられふと、結婚生活なんてこんなものなのかなと、も感じた。

米代を除外して一人一食百円でやっていたが時々「予算オーバーしたなあ」なんて言うとなんて「作ったほうがずーっとうまいから…」なんてなくさめをいってくれたのがうれしかった。今度の谷川岳へ登る日、コンパの時の鳥のモモが彼の室のコタツの上に置いてあって、夜のおかずにと走り書きがしてあった。3日目にそれに気づき食べて2日間激しい下痢におそわれて困った。一人で食べるのはさびしいので外食しててみつけるのがおそくなってしまったのだ。胃の虫がさわいだのだろうか。彼が帰らぬ人になっていらい、外食ばかりになってしまったが紅茶を入れてくれたヤカン、コタツの上の板は今私の室にある。

そして夜、フトンにはいってからも、ふと、隣の室に寺林君がいるのではと思い、声を出してよほう、よんでみようという衝動にかられる。あの黒い顔に似合わない心の澄んだ、すなおな……青年はいまいずこかに行ってしまった。みていてひかえめであっただけに友だちを作るのがうまくない人ただだけに……彼がい

なくなった事がよりさみしく感じられる。「気を付けて行けよ」とも言えなかった事も今となってはくやまれてならない事だ。

思いのままに

長谷 健二

雪深き山に帰らぬ友なれば

我は悔まん君好きなれば

留どめなき思い馳せる雪山に

思い留どまれん君なれば

新緑の蓬を捜せし友なれば

君を求めん身倒れても

雪溶けの早さに比して搜索の

遅々と進まぬこのつらき思い

厳冬の蓬に消えし友三名

我等をとわに護られん

寺林君と

一ノ倉沢の思い出

医学部 前田 光久

僕の始めての一ノ倉沢入り、それが寺林君と共にの山行であった。二人共に全くの未知の一ノ倉で、本で様子を知っているのみであった。

その年(46年)の夏、剣の八ツ峰などである程度の岩登りをして多少の自信はあったものの、はじめての者同志2人で行くということで不安があった。ルートは一ノ倉の入門ルート、“南稜”でポピラーな所ではあるが僕らにとって

未知は未知であった。経験者で共に一ノ倉に行く者がいなかったそのころの山岳部自体にも問題があったのであろうけれど。しかし僕らの登山から、未知の冒険的な要素を除いてしまったら、後に残るものは味気ないものになってしまうだろう。山の頂の草原で寝そべって、空行く雲を眺めるのも、又、沢の手のしびれるような流水で乾いた喉をうるおし、ほてった足を浸すのも大きな楽しみだ。

しかし僕らは若い、これらの休息は短かければ短い程、充実したものになるだろうし、岩壁の間に一輪咲いた小さな花は、僕らの心に十分な安らぎを与える。

そんな訳で、その後の多くの山行や、時の経過と共に、始めての一ノ倉行き思い出も霧の様にぼやけてしまったが、今でも良く覚えているのは南稜での最終ピッチのフェイスで、ここで寺林君とトップを交代して彼が登り、上部の細かい所も乗り越し上のテラスで僕を確保していたのだが、彼の笑顔と冗談に、緊張しながらも楽しく冗談を云いながら僕も最終フェイスを乗り越した。

これが寺林君との最初で最後の一ノ倉行きであった。

気の合ったザイルパートナー、冗談を云いながら文句を云いながら困難な岩壁を登り合える仲間を失ってしまった。

ヌーボーとした顔、どことなくおっとりした態度、しかし山での生活ではタフであり教えられる様な所も多かった。冬山での炊事、水用の雪取りなどいやがる事を進んでやっていた。

山登りに一体何の価値があるのだろう、そんなものは他から見れば何にも無いに決まっている。登り終わった後のかすかな充足感、虚脱感…。

他人が何回か登った所にしても、自分にとって未踏の所、満足の行く登攀なら良いではないかと思うこのごろである。

人が一生のうちに登れる山はわずかで有り、山は余りにも多く有り過ぎる。岩も多く攀じりたいし、冬の峰々にも立ちたい。又、清らかな溪流をさかのぼって草原の稜線にも飛び出たい。これらの多くを残して蓬沢に消えて行った君に僕らは何もし得ないし、残るのは思い出だけである。

相変らず一ノ倉通いをしている僕だが、いつも君が見守ってくれている様でもあり、君の分まで登りたいし更に僕自身の限界を試すためにもまだまだ続けたいと思う。

三君を偲ぶ

教育学部四年 上波 勝

寺林よ、冥福を祈る。

高木よ、冥福を祈る。

岩上よ、冥福を祈る。

もう二度と会えぬ君らに、私が出来ることが祈ることだけだ。生と死の境で離れた我々だが、君らの後生菩提を祈る我と君らは決してそんな隔たりがあるはずがない。いつか又会える。寺林よ、太郎助山はどうだい。今頃そこも暑いことだろう。いや、今雨だ。雨に濡れて風邪ひくな。ひとりぼっちでさみしかろう。高木よ、岩上よ、つき合ってやってくれ。3人で山の歌をここまで聞こえる位に歌ってくれ、決して泣くな、笑ってくれ。でないと、こっちまで悲しくなるぜ。

生き続ける私に今出来ることは、己の責任を

問うことだ。寺林は進んでワングルに入ってきたと思う。高木は私が勧誘したと記憶している。岩上も、もしかしたら私が勧誘したのかもしれない。

45年11月、岩上計画の上州武尊パーワンに同行。もう冬山に近かった。山行後、冬山初歩として、元旦登山を上州武尊にすることを決めていた。岩上も参加。そして当日、すさまじい烈風と貧弱な装備が対称的だった。冬テンも借り物、個人装備も借り物が多く、山岳部の完全装備を横にみて、これではダメだと感じた。

46年2月21日「冬山も行くのだ。ワングルの為、これだけは絶対に必要なのだ……」と私は立山の冬山研修へ。しかし3月11日「Kさんにオーバーズボンを買って返し……、何より迷惑をかけてしまい残念である……。

ワングルの多様性をねらう時期ではある。そしてクラブの一体化より、多様性をねらうのも一案ではある。……」この頃から冬山はもちろん、山だけというのに疑問が出る。高木はその前に死んでしまった。更に、秋から冬はクラブが沈滞ぎみ。トレーニング、部会活発でなく、高木はその為かあまり見かけなかった。しかし、春スキー合宿に参加を希望したので、一瞬迷ったが、これからやるだろうからいいだろう、と黙認する。そして雪の中の合宿一週間、きびしさと楽しさを知った。

彼らの死に対する私の責任は書くには余りある。唯、これからのこととして、ワングルの方向性は多様性だと思うこと、クラブのあり方として自主性に団結心を育成しなければと思うことの二つを述べておく。

高木に最後に会ったのは、47年1月の工学部でのコンパだった。その時寺林も一緒。彼ら2人、何となく酒酔いにしては人相が違って見え

たように思う。特に切象に残っている。今にして思えば不思議だ。岩上で気になったことは、45年11月の上州武尊で撮った写真で、岩上が遭難碑の前で笑っているのがあることである。当時、縁起でもない、と気になったことを最近思い出した。気にすべきことではないし、運命とも言いたくないが不思議なことではある。

それはともかく、3人の死に対する私の責任は非常に大きく、消え去るものでもない。

唯、寺林、高木、岩上3人の後生を弔い、御両親、御家族の方々にお許しを願うのみです。御両親、御家族の皆さまの御心痛いかばかりか察することできません。決して許されることでもありませんが、誠にすみませんと言うのみです。又山岳部、ワングル部員の方々の一致協力、忘れることはできません。

寺林君を偲んで

医学部 児玉 一恵

「どうして山へ行くんだい？」

「山が好きだから。本当は、山は遊びだよ。」

「つまるところそうだなあ。でも何か目的を持った方がもっと意義があるぞ。自分を試す意味もあるし……いろいろある。人によってちがうけど。」

「それはそうだけど、無理に意味づけることはないんじゃないの。」

「でも、そういうことを考えてみることも必要だと思うよ。クラブは、ただ山へ行っていれば良いというものじゃない。しかし、それもそうだなあ。俺も、山を何かの手段と考えるのは、何かさびしい気がするよ。」

「そうだよ。山に登る人にとっては、山その

ものが目的なんだもの。」

「そうだなあ。しかし、ずいぶん山に行っている人がいるなあ。学校に行っている日よりも山にいる日の方が多いい人もいるみたいなあ。」

「でも、入山日数なんか問題じゃないんじゃないの。よく卒業すると山へ行かなくなる人がいるけど、そんなのは、入山日数をかせぐために山へ行くだけで、本当に山が好きなんじゃないんじゃないの。」

「寺林は卒業しても山へ行くかい？」

「うん。」

寺林お前は慎重なヤツだったはずだ。オレが医進2年の2月、一人で浅間へ行くと言った時、単独行をやめさせたのは、お前だった。冬山は、そんなに甘いものじゃないと、いっも言っていたのに……。

スキーに乗れば、しょっちゅう転んで、よくケガをしていた。肉が出る程のケガをしても、いたがりもせず、平気な顔をして滑っていた。そんな大胆さを持っていた。

3月の袈裟丸では、雪をふみかためてテントを張った。オレが木を切ってペグを作っている間に、お前はクラストした雪の表面からブロックを切って、風よけを作ったり、炊事用のブロックまで切り出しておいてくれたりして、本当の冬山を知らないオレたちを感心させたものだった。

新人としてワングルに入ってきた時から、山慣れて、まめに動いていた。ボヤッとしているようで、実は、賢い所があった。無口のようなが、時々スットボケた事を言ったりした。

酒を飲むと、ギョロツとした目をして「児玉さん、飲みなよ」などと言って飲ませに来る。ことわる。逆に飲ませる。オレも少し飲む。

ことわると、しまいにはふざけて格闘をした

り……。ユーモラスな、意外に親しみやすいヤツだった。そんなお前が逝ってしまうなんて、あまりにもあっけなく、信じられない気がするのだ。

追悼山行では、君達の冥福を祈るのみだった。そして、オレたちは、君達の死を無駄にはしないぞと。こんなことがあっても、山はいつもと変わらぬようだ。

だが、オレたちは……………。

くりかえして 言いたいこと3つ

児玉 一恵

① 一般に山をあまくみている。

地図を持って来たかい？磁石は？一人になったらどうするの？君は天気図が取れるかい？ラジオは？替着はいらないの？

② 部員としての自覚がうすい。

君は山へ行くためにクラブの装備を利用できればそれでいいのか？「オレは群大ワングル部員だぞ！」と試してみろよ。

③ 部員の活動を把握しようとする努力が不足している。

山行届、一週間前に出せ。それは無理じゃないですか……それに、紙がない。そのへんの紙に書いて張っておけ。

笑わないでほしいこんな時代があった。我々の仲間が3人も死んで、ようやく反省の段階から一歩進んだ人達もいるし、今だに自覚のない人もいるのだ。彼等の死を無黙にしたいくない。

プロフィール

児玉 一恵

寺林

カッコ良さを追求する男。

慎重、ユーモラス、大胆、

岩上

ガンバリ強いヤツ。元旦の上州武尊で、急斜面を1時間近くもラッセルを続け、すぐうしろにいて交代したオレを驚かせた。オレはこんな急な所は登れっこないと、別なルートをさがしたのだった。

酒が好きで、春歌が好きで、マージャンもタバコも好き。そしてあのニヒルなほえみ……。山に入った時のガンバリ。岩上は、ワングルに残ってほしかった一人だった。

高木

どんなに疲れていても愚痴をこぼさなかった。黙々としていた。だから、意外な面の多いヤツだった、料理がうまくピアノをひく。花が好き。そして山も……。

いつも木更津の自慢をしていたっけ。

谷川岳

教育学部4年 高橋 直幸

夏。どこまで青い空、雄大な雲を背景にした谷川岳の山容は、多くの岳人を魅了する。ある者は岩へ、またある者は尾根にとりつき、谷川岳に迫る。ニッコウキスゲやイワカガミの美しさは、この山の雄々しさに女性的な魅力を与える。また谷川連峰と称される長大な稜線は、期待と不安を含み、岳人に迫る。

冬。純白の衣を身にまとった谷川岳は、岳人に乙女の容姿を思い起こさせる、内に秘めた危険な牙すら、たまらない魅力として映る。青い空とどこまで続くかのような白く長い稜線。しかし、雪と風の中では可憐な乙女はその片鱗さえみせずただ荒れ狂うだけ。

そんな谷川岳に3人の仲間は消えた。雪崩の巨大な雪のかたまりの中に、3人の温みは奪われた。彼らは何故冬の谷川岳へ行ったか「遭難」というまぎれもない事実の中で、クラブの対応や、クラブの性格、さらにワングルとは何か、という深刻な問題提起がなされている。反省や再検討を通じて、これらを全て否定しざる者はいなだろう。クラブ総体としての反省は必要だと思うし、問題点の徹底した討論も良いだろう。しかし、結局は自分自身の問題として把握する、という態度が迫られるのではないか。三学部合同がなされる以前(?)において、荒牧のワングルの持っていた体質は依然として残っている。方向性や方針を検討するのもおおいに結構、しかし一步を歩き始めなければ何もしない、ということなんだと思う。話し合いの中で出てきたことをとにかくやるべきだ。

3人を魅了した谷川岳。キャンパスから見る谷川岳には悪夢のような遭難を我々に想起させるもの、という姿を見ることができない。あくまで美しく、我々の目に映る。自然が限りなく美しいものであるかぎり、我々は常にその奥深く抱かれないと思う。3人もきっとそんな思いを胸に秘めていたのだろう、そして永遠に谷川岳に眠るだろうことを誰が予想できたであろうか。寺林君、高木君、岩上君のうち一体誰が…。我々は自然に対し常に謙虚な態度で立ち向かわねばならない。

あたかも教えを乞う子供のように。3人に対

し批判を加えるのはあまりにも酷だと思う時、その批判はあくまで自分自身にむけられねばならない。クラブとの関わり、自然との関わり、その中の自分に。

3人を本当に奥深く抱き込んだ谷川岳。冬のあの白さはもう消えた。今年も谷川岳に夏が来た。しかし、彼らは…。

遭 難

工学部3年 相川 克明

大学1年の春、赤城への新人合宿。深山へ下るとき、まだ互いの名も十分に覚えていない仲なのに、私と並んで歩きながら、「山ってこんなに疲れるのか。」と言った岩上だった。

会津への夏合宿の2日目の朝、会津朝日岳の麓で眼下一面に広がる雲海を感激に満ちた目でみつめながら「俺は山に来たんだ。」と言った高木だった。

いつごろのことであろうか、「山には、人生においてプラスとなる何かがある。」と言った私に、「バカだな、山なんてレクリエーションの域を出ないヨ。」と、めずらしく、真面目な顔で、寺林君は言った。

私達を残して、先に逝ってしまった彼ら三人は、そんな人達であった。

私達は、それぞれに目的を持って山に登った。彼らもそうであった。それは自分自身の鍛練でもあり、自然との触れ合いでもあったろう。又、ある意味では、休息を求めての山行であったかもしれない。

私達の山行は、“死”という極限の問題にまで及んだ行動ではなかったはずだ。しかし、こうして、思いもよらぬ現実に直面したとき我々

の生命はこれほどに弱い存在であったのかと、愕然とした。又、彼らを求めて、雪溪の穴に入ったとき、せせらぎの片隅に、鮮やかな黄緑の新芽を出し、ただ1つ懸命に生きてゆく、ふきのとうを見たとき、生と死がかくも隣りあわせに存在しているとはと驚きをおぼえた。これは、彼らの遭難によって、改めて考えさせられた、重大な事実である。

客観的にみる山での死には確かにあるロマンティズムが漂う、あくまでも客観的見地に於てである。〃山で死ぬことができたなら本望だ〃これは幼い感傷にすぎない。

「死」—いかなる場合に於ても、そこには、まぎれもなく死がある。

山に登る。それは、死への行進ではなく、生の確認ではないだろうか、私達の山行もそうであったはずだ。それなのに、彼等三人は逝ってしまった。現在。彼等三人に対して、私にできることは、彼らの冥福を心から祈るだけである。

冥せよ岳友、黙せよ親友、そして、我々の山行を永遠に見守りたまえ。と。

谷川岳と我々

工学部3年 稲葉 耕一

谷川岳、我々が最も親しみを持ち、身近かに感じていた山、そこで岳友三名が遭難してから、もう春も過ぎ、山の雪もすっかりなくなろうとしている。そして僕も寺林君や岩上君が一度登りたいと思っていた穂高の岩を登った。一ノ倉沢に撞れていた寺林君、雪山が好きだった岩上君、そして山の花を愛していた高木君、わずか二年足らずの間ではあったが、山でそして

学校で供にすごしたことが、今ではすべて思い出になってしまった。みんな山で親しくなった友人であった。そして山が好きだった。

僕にとって谷川岳は山を続けていくかぎり、一つの目標であり、一番思い出に残る楽しい山となるはずだった。きっと僕と同様彼らも谷川岳の思い出は楽しいものになっていただろう。

なぜこんなに身近かに感じていた山で彼等が遭難したのだろうか。群馬大学山岳部は谷川岳と供に歩んできたといっても過言ではないのに。谷川岳に対して多くの方は魔の山というイメージを持っているが、これは一ノ倉沢に代表される岩登りでの事故が多い為であると思っていた。しかし厳冬期の谷川連峯の縦走を、日本アルプスの山々と比べ、標高の低いことや、アプローチの短いことなどから我々が余りに安易に考えていたと思う。

今度の遭難救助活動で、僕の予想以上の吹雪に会い思いしらされた。また縦走の難かしさも身を持って感じたが、全ては遅すぎたことであった。確かに彼等三名の遭難の直接的な原因は蓬沢の雪崩であるが、こんな事もその奥には原因となっているのかもしれない。そして僕達が山を続けていくなかで二度と遭難をおこさない為にも、山を愛すると共に、絶えず山を恐れる心を持ち続けることが必要だと思う。

山は僕達の事など何もなかったように、いつも変らぬ姿でいる。僕はこんな山にいつまでもみんなと登りたかった。互いに喜びあい、励ましあい、その一時が良き思い出となるようにしたかった。

一、朝霧晴れて光るルンゼに
紫の花匂うエーデルワイス

二、青空閉ざす、オーバーハング
罨する音聞こゆハーケンの歌

三、夏雲くずれ嵐吹くとも
お前と俺の誓いアンザイレン

四、山の男は夕べの空に
帰らぬ友を偲び一人歌う

この歌は寺林君や岩上君とよく歌った山の歌
だった。

彼ら^{たびだち}の出発及び回顧

工学部3年 漆瀬 正行

2月10日の夜、俺が下宿へ帰ると、岩上、高木の両君が、谷川岳へ行くのだとあって、荷分けをやっていた、青のアタック、キスリングにそれをつめ、俺の部屋で最終の高崎行を待っていた。茶を飲みながら、ストのことやなにかだべて時を過した。やがて時間になり、彼ら二人は駅へと向った。出がけに、「気を付けろよ。」と言うと、岩上は白い歯をのぞかせて「ああ、わかっているよ。」とあって出かけていった。この会話が彼ら二人と、かわした最後の言葉になろうとは、まったく予測しえなかった。

それで俺は彼らの装備等にはそれ程注意を払わなかった。「ラジオを借してくれ」と言われた時、「電池がないぞ」といったら「それじゃいいよ。」といて彼らにラジオをもっていかせなかったことなど今になってみれば俺は自責の念にとらわれる。彼らは冬山、それも厳冬期に行くのだから、彼らの装備にもっと注意を払い、その不備な点は指摘してやるべきではなかったのか。

以上は彼ら二人（寺林君は前橋からであるからその間の事情はわからない）が俺の下宿を立ったときの様子と、それについて俺が感じたこと（自己批判）を記述した。

俺は彼らとは、1年の時のワングル時の仲間である、その後2年になってからは俺の健康上の理由等などから彼らと山行を共にしたことはなかった。しかし彼らとのつき合は、たもたれていた。それは酒を飲んだり、麻雀をしたり、あるいは議論をしたりして、また俺の下宿が駅の近くにあることより岩上君は電車の時間を待のによくついていた。

下宿でラジオを聞いていると、8時過だというのに、ひょっこりと現われ、「パチンコをやってきた、何千円勝った」といって戦利品を置いていったことも、いまとなれば思い出の中にしかない、話が岩上君に片よったが、彼の方が接する期間が多かったからである。また出かけるときの白い歯をみせた笑い顔が俺の頭に強烈に焼ついているからでもあろう。しかし、人の思い出の中の人物となってしまうことは非常に悲しいことである。

「野球と帽子」

工学部3年 大島 茂雄

高木君について一番印象に残っているのはクラブの仲間として山へ行ったことではなく、またクラス仲間として勉強についてや、その他いろいろなることをだべったことでもなく、それはちょうどぼくらが一年の秋から冬になるころのことであった。ぼくらワングル部の工学部1年生は、なんとなく変な親近感がでてきていた。いま思えば1年の時は暇だったので毎日のよう

に昼休みには部室へ集まって、ソフトボールなどの道具が身近にあったので、たいくつしのぎにノックをしたりして遊んでいた。こういう時に、高木君は性格としてあまり活発に発言するほうでなかったし、部室へも毎日顔を出すほうでもなかったので、あまりつき合いもなく、書いて彼のことを考えてみれば、ただおとなしいやつがいるなあとしか考えず、あまり関心ももっていなかった。それがどうして印象づけられたかという、前にも言った通り、ぼくらは野球が好きだったので、ある日トレーニングの後に6~7人で軟球のボールでノックをして遊んでいた時、高木君がちょうど自転車で通りかかり、しばらくの間ぼくたちをながめていて、そのうち、誰かにさそわれてやる気になった。

そしてぼくらが守り彼がノックすることになった。ぼくはべつだん気にせず見ていたら、いきなりぼくらの頭を軽くこえていくような大飛球を打ったのでめんくらってしまった。そして次々と大きいあたりを打つので、その時はじめて、高木君はおとなしいけれどなかなかやるなあと感じたのであった。

その後、桐生の方へ行ってからは、1年の時の部員がワンゲルと山岳部に分かれてしまい、ワンゲル部員が少なくなったので、高木君と山へ行く機会が多くなったというより、合宿はすべていっしょに行ったといっても良いと思う。そこでいっしょに合宿などをやっていた感じた感想というか、思い出みたいなものとしてこんなことが心に残っている。それは「帽子」についてである。青く、つぎでできていて、テニス用みたいなひさしの大きい丸い帽子であった。これは夏合宿へ行く前に帽子屋へ行って買ったものである。そしてなぜそういう帽子を買ったかについては、部員ならばわかるが、他の人には少

しわかりづらいと思う。それはこういう理由からである。1年の夏合宿、ぼくは彼とは同じコースではなかったけれど、だいたい同じ状態なのでその合宿の状態を考えてみると、当然夏の炎天下、尾根を歩くのだから、暑いのはとうぜんである。事実この合宿中に数名の者が日射病にやられている。それにくわえ、群犬の場合やぶというものをやるので、むぎわら帽子のようなつばの広い帽子はひっかかかたりして、非常に歩きにくくなるので、結局前にのべたような帽子になってしまったわけである。実際こういう形の帽子が、一番適していると思う。それに二年の夏合宿では、木のしるにかぶれたのか、顔があついと言って例の帽子に水を入れ、頭から水をかぶっていた姿も印象的であった。その帽子はこの遭難山行にはもっていかなかったのでもまだどこかに残っていると思う。ぼくにはこの二つの印象が今でも鮮明に心に残っている。

工学部3年 川崎 喜孝

アルバムを広げる。

気持ちよさそうな笑顔

秋晴れの越後三山だ。

真剣な顔

冬のスキー合宿だ。

チョッピリ寒そうな渋い顔

残雪期の足尾だ。

さまざまな表情の夏合宿。

いろいろなことがある。

どうするんだ、この実験。

どう書こうか、このレポート。

徹夜で頑張る試験前。

明日は休講、映画でも見ようか。
今日の実験は早くすんだ、麻雀やろう。
コーヒーを飲みながら
木更津ってそんなにいいのか！
オレンちのほうはな……！
ヨシ、遊び行くぞ！
オレンちにも来いよな！
酒を飲みながら、
おまえもてるだろう！
だいたいおまえはよおー！

……………
……………

山の好きなおまえ
花の好きなおまえ
空の好きなおまえ
映画の好きなおまえ
音楽の好きなおまえ
おまえの心は美しい
おまえには美しさがわかる
おまえにはやさしさがある
おまえには責任感がある
おまえには……………

……………

高木君についてあれこれ

工学部3年 熊田 武夫

あの山にもこの山にも行ってみたいと言った
彼が、あの冬の谷川岳を最後に永遠に私たちの
所へ帰って来なくなってしまいました。私は、
桐生へ来て一年間彼と同じ下宿のはず向いの部
屋にいて、夜いくばくかの話をしましたが、私
には、まだ彼という人を十分には知りませんが

その知らないながらも彼の事をつづってみよう
と思います。まず彼の心には美しい物を愛しか
わいがるということがあったようです。例え
ば、花を自分で育てるという事です。

この事は何度となく彼に聞かされました。そ
の時の彼の口もとは何かしらほころんでいるよ
うでとても楽しそうでした。事実彼の自宅は、
ほんとうに花で包まれているという表現がびっ
たりしているようでした。この花も彼が植えた
ものかと思われるほどでした。次に、彼は常に
一人にいるという事を好んだようです。事実下
宿にあっても、他の人と余り交わることがあり
ませんでした。そして一人で何かを常に考えて
いるようでしたが、私には、何を考え、そして
何に悩んでいたかは十分には分かりませんでした
が、彼と岩上君そして私達と6人ぐらいで飲
んだ時に、彼は「将来の事を考えると不安で眠
れない。」と言っていた事が思い出されます。

そんな彼も、山に入っては、山の美しさとき
びしさ、そして友情によって結ばれる山行を好
み、次第次第に山に魅了され、冬山への挑戦を
したのでしょう。山を愛し、花を愛した彼、さ
ようなら。

高木君の思い出

工学部3年 品田 忠保

三平汁。

あいつがスキー合宿のとき作ってくれた
食料研究係としての初仕事
酒かすを使った不思議な味
身がポカポカあたたまった
わすれないぜ、あの味

下宿

コンパの後のほろ酔い加減
あいつと夜ふけまで話したっけ
人生、生活、大学、家族、etc
そこで垣間見たあいつの心、純真だった

酒

どんな酒が好きだったかな
ビール、ウイスキー、いや日本酒
酒に雪を浮かべてオンザスノー
なんて言いながら雪見酒したっけ
あいつはムードで酒を飲んだ

女性

あいつの好きなタイプどんなだったかな
いつか冗談半分に言っていたっけ
年上のひとでもいいなど
あまえられる、やさしい女性
そんなひとにあこがれていたのかな

歌

山へ行く道で好きな娘に会ったら
山へ行く道で野いちご摘んでた
一つホイ 二つホイ
たんと摘んだならば
早くお帰んなさい
山に夜が来る
あいつが好きだと言ってた歌の一つ
ハデじゃないが素朴な美しさ
あいつの心そのままだ

寺林君のこと

教育学部3年 高井けい子

一步一步大地を踏みしめながら登る山のように着実に前進する人だった寺林君、山ではいつも地図に磁石をみつめていました。彼の判断力は山においても優れ、数少ない彼の言葉は誰にも信頼感を与えていたのです。山の仲間、学友だけでなく、生前彼が住んでいた荒牧の下宿の人達から温厚な彼が好感を持たれていたのは言うまでもありません。

彼と最後に会ったのは2月上旬、6日頃でした。一面に真白な雪が覆った部室の前で愛用のオートバイに乗り、とても楽しそうでした。ちょっとぶり無鉄砲な彼、バイクで富士山へ行って来たのだと自慢したものです。

彼が何よりも愛したであろう厳しく、美しい雪山が、一瞬にして彼の生命を奪ったなどと、どうして信じられるでしょう。いつだったか富士山に登りたいと言ったら、5月、いや6月でなければ私には無理だと言われたことがありました。自然の厳しさを誰よりも知っていたはずの彼、あれほど慎重な彼が何故…でもそれが現実となってしまったのです。

彼のような、有能な人の命がこんなにも早く絶えねばならないとは。自然の力はこんなにも恐ろしく、偉大なのでしょうか。

3月上旬彼の下宿を訪れました。彼ら3人が出発したままの状態、テーブルの上には天気図用紙と封の開けてない1通の手紙が、台所には3人分の食器がありました。すぐにも雪焼けして真黒な寺林君が帰って来るような気がしてしばし入口に立ち止まってしまったのです。

手紙は彼のおかあさんからのものでした。もしリストが決行されていなかったなら、期末試験

中。彼の体を心配していたというお母さんの言葉に、せめて彼が山への出発する前にとどいていたら、と思うと残念でなりません。

一見無口、無表情、でも実際は逆で、不思議なほどにユーモアのある人でした。北アルプスでは、新婚旅行は熱海がいいな、などと言って皆を驚かせた寺林君、熱海にはいついくのでしょうか。

彼らの死によって私達が得た教訓は大きなものです。でも、それらが彼らの命と引き替えでなければ得られなかったのかと思うと、かなしくてなりません。二度とこのような悲惨な事故を起こさないように、私達は真剣に考え、実行しなければならぬと思います。

少ない山の仲間として真の友情を分かちあえたのであろう彼がいない今、心の中に大きな穴があいたようなさみしさを感じます。

夜空に輝く美しい星をみつめていると、あの星の中に寺林君がいて私達をやさしく見守っていてくれるような気がするのです。寺林君、安らかに眠って下さい。

蓬 沢 に て

工学部3年 高橋 茂雄

この谷間にあいつは眠る
7mもの雪の下
さみしかったろう
もう起きろよ、外は春だぜ

高木とは、共に機械科で実験も二人でしていた。いつも遅くまでやって見たり、「妥協妥協」と言っては切り上げたり、レポートの写し合いをしたりしていたのだ。

時には、あいつは単位を落したのに、試験の前にノートを書いた俺の方が取れて、くやしだった事もあった。4月になって俺が下宿したら「いっしょに飯をつくらう」と言っていたのに。なぜ死んだ。バカヤロー

しかし静かな男だったよな。二人で巻機から白毛門を縦走した時など「星がきれいだなあ。」とロマンチックに言っていた。お前の星はどの星だろうか。俺達に知らせてくれ。

そして迷える登山者を導いてくれ。発見された岩上のザック。水をすい込んだ岩上のザック。このザックを下へおろす時俺は思った。この冷たさ、この肩にくい込む重さ。そしてあいつが受けた雪崩のすごさ雪の重さを。あいつはその時もガニ股だったろうな。あいつはあの時もあの眠たい目をしていたのかな。そして心は「谷川岳のすばらしさを帰って皆に話してやろう。」だったろうな。お前はもういない。けど天国から見守れ、お前の父を母を兄弟を、そして俺たち迷える山男らを。

谷川の冬のきびしさ友達を
蓬の沢の雲にうずめる
冬山のこのきびしさを登山者は
肝に命じよ命の代価に

俺達にとって山の天気は魔物だ。そして悪魔は人の心に忍び込む。だいじょうぶだよ。天気はもつって……。心にささやきかける魔王の誘惑に打ち勝たねばならぬ。

山への憧れ

教育学部三年 高橋美恵子

うっすらとした雪化粧を落とし、
鮮やかな緑に衣替えした山々。
その裾を長くひく赤城山、
武尊、子持、小野子、谷川、榛名。
テニスコートの向う側の山々は
少しも変わってはいない。
そこでボールを打つ人も、
グラウンドから聞えてくる掛け声も
なにもかも
少しも変わってはいない。
生の不思議と自然の苛酷とを
この現実の中に引きこんだ時、
何もかも、変わっていないこの現実、
人が生きることのはかなさを感じる。
三人の友はいなくとも
何もなかったかの様に
山も、人も動いている様な気がする。
何の為に……………。
花を求め、雪を求め、新緑を求め……、
そして人の愛と和を求め、
時には暖かく、時には厳しい自然の、
その懐に飛び込んで行く——。
生きることに疲れた時、
自分がどんなに小さなものであるかを知る。
毎日が充実している時、
こんなにもすばらしい自然の中にいる
自分は、幸福者であると思う。
素直に山に憧れ、そこに身を任せる時、
山へ一歩が始まる。
山への憧れ。自然への憧れ。
大切にしたい。

けれども考えなくてはならない。
償う術さえわからない
罪を犯してしまった今、
自分にできることは何なのかを。
そして、それを精一杯続けることで、
何分のひとつでも良いから許しを請おう。
憧れを単に憧れの段階で実行する
ことなく、
自然と真正面に向き合って、
その上で実現していくことが
必要とされるだろうと思う。
悲しみを再び繰り返さない様
努めることが
唯一の罪滅ぼしであると思う。

工学部3年 武井 昇

明日は山を後にしなければならぬという
晩、二俣の空には星が輝いていた。吹雪に悩ま
された搜索も10日近くになるが、その日まで俺
達は信じていた。三人はきっと生きています。
山へ向う車中で誰もが考えていたことは、き
っと土樽の駅か、山荘あたりで、ひょっこり三人
に出会のではないかとということだった。仙ノ倉
北尾根のボッカ、夕暮れの山頂、吹雪の中で撤
退、毛渡沢のラッセル、万太郎尾根サポート。
吹雪の中での搜索が長びいてもやはり三人はど
こかで待っていてくれると信じていた。

三人の死を実感として感じたのは5月にな
って遺体を前にした時だった。

5月。君達は雪の下から出てきた。ただの肉
のかたまりとして、君達はあまりにも重か
った。

高木君、秋の坪川での山ぐりの栗ごはん、
山ぶどうの味を覚えているかい。滝を攀じりカ

モシカに挨拶をした。小屋中煙だらけにして焼いたくるみ、岩魚の思い出は今君のどこにあるんだい。スキー合宿の時君が考え出した餅のうま煮の味なんかももう覚えてはいないだろうな。

山での死は少しもロマンチックなものではない。君に残ったのは君の体だけ。それも今では土と化して無い。

冬の上越国境稜線の縦走といえば誰もがあこがれるものの一つである。純白の衣をまとった谷川岳、万太郎、仙ノ倉、平標。雪に包まれた時、山はもっとも美しい姿を我々に見せてくれる。鋭き稜線はさらに鋭く、平らかなる稜線はさらに平らに。しかし最も厳しい自然条件を呈するのもこの時期の山であり、我々はその美しさのみに心をうばわれて厳しさを忘れてはいなかったろうか。事故を起し得る要素はすでに我々のクラブ内にあったように思われる。山に対する考えも甘かったし、行こうと思えばどんな山にでも行けるかのように考えていた。

同時にクラブというものに対する考え方もしっかりしていなかった。このことは未だに十分反省がなされているとは言えず、山行届の書き方もいいかげんとまでは行かなくても、進んで詳しく書こうとしているのは見当らない。今各人が個々の山行をもっと大事にしなければならぬ時に来ている。計画、準備段階から山行を終了して記録を整理する時まで、そこに各人の全力を投入する必要がある。

クラブに入っている以上種々の制約が加わってくるのは当然であるし時にはそれがかなり大きなものともなるだろうが仕方がない。そうすることによって山行の安全性も増すし、より充実した山行もできる。

3人の死は事実である。

高木君について

工学部3年 広瀬 健一

彼について、僕はあまり深い事は知らない。一応ワングル部3年ではあるが、2年から入部したので、しかたないと思う。しかし彼の事が印象的に頭に浮かばないのは、彼の性格なども多分は影響しているのではないかと思える。

彼は、僕から見た限りにおいては、静かな男であった。どちらかというあまり人と協調しない様な、個性的な男であった様に思える。僕は彼と話をした記憶があまり浮かんでこない。彼と僕は、専攻の科も違うし、僕自身、あまり部室に顔を出さないから、部会位しか彼を会わず機会はなかった。

そして部会においても、それ程親密に彼とは、話をした事はないから、当然の結果として、えたいの知れない男となる。僕がこう感じていたから、彼の方も以心伝心的に同様の事を僕に対してもっていたに違いない。彼と僕が山行を共にしたのは、合計して2回にすぎない。一つは4人で谷川岳へ行った時、もう一つは現3年全員で、鬼怒沼方面へ行った時である。

彼は、その時もあまり、はしゃぎ回る事はなかったしひととき目立つ様な事をしなかった。だが山の事はくわしく知っていた様に思える。

彼を最後に見たのは、僕らがスキー（足利会にて）に行く事になった時彼が、“山へ行くので行けない。”と部室で言った時である。その山へ行くが、あの世に行くになってしまった。僕は冬山は行かない事にはしているけれども、彼にとっても、冬山は、はじめてらしかった。そして、そのはじめての冬山登山が、遭難という結果になるうとは。わずか20代の青年が、これから社会へ出発しようとしていた青年が、他界

するとは。親の身になって考えれば、泣いても、泣ききれない思いであろう。彼は、もうこの世には存在しない。僕は、この様な経験は、はじめてである。同じ年代で、しかも同じクラブの青年が、永久にこの世から姿を消すとは、悲しい事である。

しかし僕らは、悲しんでばかりは、いられない。この事を深く肝に命じてこれからも活動を続けなくてはならない。そして、そうする事が彼に対する一つの弔になる事を信ずる。そして最後に彼の冥福をここに祈る。

遭難私記

医学部 壬生 隆一

「気をつけて行ってこいよ。」という僕の紋切型の言葉に、いつとなく力なく口ごもった声で「オー」と返事した。その言葉を最期として寺林君は深い夜の帳の中に消えてしまった。^{とぼり}そして、吹雪をついての搜索も空しく再び会ったのは新緑の見事な蓬沢の雪の中にいる彼の姿だった。しかし、その彼は単なる有機物のかたまりと化してしまっていた。

それまで何か悪ふざけをやっているように思い込もうとして、ひとつづつ穴をあける度に見えないの見てホッとしたような不思議な気持ちに襲われ、張りつめた心も風船みたいにしぼんでいくのを感じるだけだった。

およそ死など予感できはしないのだ。どのような非日常的な行動をとろうとも死へなど直結するとはかぎらない。むしろ、死という冷徹たる事実があ夜の行動を異常へと僕の心の中で転化させてしまい、一つ一つのふるまいが一つ一つの陰画となって僕の脳裏に刻み込まれてしまうのである。

あれは期末試験も間近に迫った一月の下旬ごろだったろうか、彼の下宿を訪ねると、一生懸命本をよんでいるので「おっ、勉強しているな。」と話しかけると、黙って表紙を見せてくれるので見ると冬山に関する山岳書であった。

そして、急に「俺は遺書でも書こうかと思っんだ。

今度OBと衝立岩をやるんでな。」としんみり言い出した。「死ぬのが恐けりゃやめればいいじゃないか。」とって笑い飛ばしてやると「そうだな。」と何か納得しかねたような答えをしたのみだった。結局、衝立岩をやることは中止にしたらしいが、彼が遭難というものに対する不安と恐怖を身近な個人的な問題として話してくれたのはこれが最後であった。あの時は冬の岩場を初めてやるというので気負っており、その不安を軽減させるために真剣そうに話しているのだらうなどとまったく意に介していなかったのだが……。

あれからもう半年もたってしまった。夏の蓬峠は高山植物が咲きみだれ、冬の厳しさなど一片ものぞかしていない。友を奪われたなどというセンチメンタリズムとは無縁であるような様子を呈しているだけである。我々もまた山の友として世間一般並みの「なぜ山などに登って死ぬのか」という次元でなく、「生」の充実を願う行為が逆にあまり早く「死」という運命を受け入れてしまった友に対し、彼らにとって不本意とは何かをもっと見極める必要があるのではなかろうか。

二度と遭難を起こさないようクラブの活動をより活発化させることこそ今残された我々に問われているのだし、それが成就されてはじめて彼らの鎮魂となるだろう。

三君よ安らかに。

故岩上 正君を偲んで

工学部3年 山口 明

最後に彼に会ったのが確か2月10日、私が丁度授業が終り、今日は雨がぼつぼつ降り出して来たので自転車はやめてバスで帰ろうとバス停で待っていたところ、彼がニッカー姿で私の自転車に乗り「山口、ちょっと自転車かしてくれよな」と例の八重歯でニタと笑い近づいて来たので「ああいいよ、今日の夜行で行くんだっけ、気を付けて行けよ」と一言声をかけのたが彼との最後の会話となるうとは夢にも思わなかった。またこの2年間を振り返って見ると、特に私が一年の時は自宅通学のためかよく前橋の友人の下宿に泊ったものであった。

そして一番良く泊ったのが彼の下宿であった。クラブやコンパで酔いつぶれた時、そしてマージャン大会、年末にはクリスマスまで彼の下宿でやったものだった。そんな楽しい思い出が次々と湧き出てくるのだった。また私はスキーで不覚にも骨折してしまい2年の授業が始まって出られない状態であった。そんなある日、彼の車で友人3人と一緒に見舞いに来てくれた。遭難の事を母に話したらその日の事を思い出したのだろう「あゝ、いつか来たあの八重歯のかわいい子」と言ってとても残念がっていた。

こうして考えて見るとすべてが忘れられない残像として心に焼きついて離れないのである。

大切な御子息を失った御両親のお気持ちはその立場は違えど良く解ります。私達の年代から見れば両親とはとても邪魔物的存在である。しかし返せば我々の行動をたえず見守ってくれたれよりも心配してくれるものである。ある時はアドバイスを、さらに非難もたびたびである。

そうすると自然と行動を起す前に改めて検討

し、危険な行動はつつしもうと心に決められるものである。ともすると我々の年代はその若さでもって何でもかんでも可能にでき体力や精神力が無限に駆使できるものと思い込み、つい冒険的行動に出がちである。やはり人間は人間以外の何物でもない事を確認すべきであろう。

只、今は故3君の旅路の安らかならん事を祈り、彼らの分まで一生懸命生き抜いてやろうではないか。

会 計 報 告

収入の部

遺 族	701,172
○ B 会	118,780
部 員	62,500
教職員学生カンパ	358,613

計	1241,065円
---	-----------

支出の部

交 通 費	104,190
食 糧 費	301,233
装 備 費	88,025
謝 礼 金	100,000
碑	200,000

残 金	447,617
計	1241,065円

上記の通り報告致します。御協力をいただきました皆様に厚く御礼申し上げます。残金は文集発行の後、部基金として積み立て、後に備えさせていただきます。

編集後記

谷川岳蓬沢で高木君、岩上君、寺林君を亡くしてから、すでに二年が過ぎようとしている。冷たい雪の中から出てきた彼等と会った時の恐ろしさは、永遠に忘れる事はない。彼等は雪の中で何を考えていたろう。残された我々に言いたかった事は何であったろう。今また、じっくりと考えてみたい。

彼等とっては同窓であった諸兄も、今学窓を去らんとしている。もし彼等が生きてくれたら……と皆が思っている。女々しいとは思わない。皆が、彼等が死を代償として教えてくれたものを守り、同時に部の名誉も守ってきたのだから。

今蓬沢は深い雪におおわれている。彼等の霊を悼み、山の安全を願い、一人でも山で逝る人がなくなるようにと、蓬沢に建てた導標をかねた慰霊碑も雪の中かも知れない。しかしやがし雪は消え、花が咲き、緑につつまれる。彼等の事を想い、彼等の逝ったこの地を、いつまでも訪れたい。

本文集作成に当り、多くの方々に御指導、御援助をいただきました。この紙上をかりて深く感謝いたします。

最後に、本文集発行がおくれにおくれた事を、深くお詫びいたします。

(追悼集編集委員会)

谷川岳蓬沢遭難追悼集

昭和49年2月13日発行

編集者 追悼集編集委員会

発行者 群馬大学山岳部
群馬大学ワンダーフォーゲル部

桐生市末広町6-14

印刷所 群馬印刷所

拝啓

今年も長い梅雨が明ければいよいよ夏山シーズンがやっつてまいります。昭和四六年弊部の部員三名の谷川岳での搜索につきましては並クならぬ御尽力をいただき誠にありがとうございます。はや三年の月日が流れてまいりましたがここに追悼文集ができ上りましたのでお送り致します。折りにふれて目を通りていただけたら幸いです。

敬具

昭和四九年七月

群馬大学山岳部
群馬大学ワンダラーフォーゲル部